

3. 我が友よ、汝は何故に我を害さうと欲したか。
4. 敵將は烈しい攻撃をした。(全.過.)
5. 私は逃げるより死する事を欲する。

### XCV. 奪格別句 (Ablātivus Absōlūtus).

【442.】 羅句語には奪格別句(希臘語の屬格別句参照)といふ文の構成法があつて、それで、能相の義をもつ他動詞完了分詞の缺乏から起る不便を大に補ふて居る。例へば、

‘ケーサルは、此の事を決定して、陣營へ歸つた’。

(Caesar, having settled this matter, returned to the camp.)

は直ちに此のままで、即ち接續詞を使ふ事なしに、然かも‘決定して’(having settled)を能相の分詞の形で、羅句語に譯す事はできない。そのわけは、已に §428. で述べたやうに、羅句語の他動詞の完了分詞には能相の義のものがないから、他動詞‘私が決定する’の羅句語 *constituō* の完了分詞 *constitūtus* は、所相の義即ち‘決定されたる’(having been settled)であるからである。然し、若し此處に上記の奪格別句といふ文の構成法を使ふ時には、上記の文は *constituō* の完了分詞を使用して、容易に構成することができる。即ち、

*Caesar, hāc rē constitūtā, ad castra rediit.*

‘ケーサルは、此の事が決定されて、陣營へ歸つた’。

(Caesar, this matter having been settled, returned to the camp.)

【443.】 然し羅句語の形式所相動詞の完了分詞は能相の義であるから、若し、

‘ケーサルは夜中に此の町から出發して、ローマへ來た’。

(Caesar, having set out from this city at midnight, came to Rome.)

を羅句語に譯さうと欲するなれば、‘出發して’(having set out)は、直ちに其の儘で羅句語に譯することができるので、決して奪格別句を使ふ必要はない。即ち、

*Caesar mediā nocte ex hāc urbe profectus Rōmam vēnit.*

【444.】 範例。

1. *Ventō favente, nāvis in portum vēnit.* ‘順風で舟は入港した’。

2. *Cōsul, pāce factā, Rōmam vēnit.* ‘平和の締結後、執政官はローマへ來た’。

3. *Tē duce hostēs vincēmus.* ‘汝の統率の下に、我等は敵を征服するだらう’。

4. *Augustus, Cicerōne cōsule, nātus est.* ‘アグسطسはキケローの執政官であつた時に生れた’。

5. *Patre vivō Corinthī viximus.* ‘父の在命中、我等はコリントスで生活した’。

【445.】 文章法 XXXVII. 文法上(意義上ではない)、其の文の主文と直接の關係がなく、然かも其の主文の動詞の動作、状態等の時、原因、其の外色々の事情を示すために用ひられた (I) 奪格の形の名詞或は代名詞と、(II) 奪格の形の名詞

或は代名詞或は形容詞或は分詞との結合した文の構成法を奪格別句と稱へる。

【446.】一文の主語又は目的語を表はし又はそれを形容する名詞、代名詞、分詞及び形容詞等は決して奪格別句になる事はない。

次の二文を比較せよ。

1. **Galli ā Caesare victi domum revertērunt.** ‘ガリア人等はケーサルに征服されて歸國した’。
2. **Gallis ā Caesare victis, exercitus domum revertit.** ‘ガリア人等がケーサルに征服されたから、軍隊は歸國した’。

【447.】次の羅句文を譯せ。

1. Pater, his rebus constitutis, non moratus est.
2. Caesar milites paucis verbis cohortatus signum dedit.
3. Hannibal, viso fratris occisi capite, “Agnosco,” inquit, “fortunam Carthaginis.”
4. Auxilio ab imperatore militibus defessis adlato, omnes gaudebant.
5. Equites in collo positi hostes exspectabant.
6. Natura duce, nunquam errabimus.
7. Marco Messala et Marco Pisone consulibus, Orgetorix, cupidine regni adductus, conjurationem nobilitatis fecit.

【448.】次の文を羅句語に譯せ。

1. 我等はケーサルの下に勝利者であるだらう。
2. 兵士等が敵に打破られて敗走した。

3. 人質が與へられた後、彼等はガリア人等と平和を締結した。(全.過.)

4. 私の判断ではこの奴僕は甚だ伶俐である。

5. 私の姉は夕方町へ送られて来た。

【449.】文例. XVI. **Gallia Pacata.**

Omnia Gallia pacata, tanta hujus belli fama ad barbaros perlata est, ut<sup>1)</sup> ab Germanis, qui trans Rhenum incolebant, mitterentur legati ad Caesarem, qui se obsides daturus<sup>2)</sup> pollicebantur, nam timebant, ne<sup>3)</sup> Caesar suam terram vastaret. Quos legatos Caesar, quod in Italiam properabat, inita proxima aestate ad se reverti jussit. Ipse, legionibus in hiberna ductis, in Italiam profectus est. His rebus gestis ex litteris Caesaris supplicatio dies quindecim decreta est, quod ante id tempus accidit nulli.

## XCVI. 與格を支配する合成

### 動詞及び形容詞.

【450.】範例.

1. **Ipse dux suis militibus aderat.** ‘將軍自ら彼の兵士等を助けた’。
2. **Caesar decimae legiōnis peditēs equis imposuit.** ‘ケーサルは第十軍團の歩兵等を馬に乗せた’。

1) ‘程に’, CIII. 参照. 2) ‘與へんと’, CX. 参照. 3) ‘事を’, CXXVI. 参照.

3. *Quid erat molestum populis Italiae?* '何が伊太利人民等に煩はしかつたか?'

【451.】 文章法 XXXVIII. 前置詞 *ad, ante, con, dē, in, inter, ob, post, prae, prō, sub* 及び *subter* と、單純な形の動詞との合成で出來た多くの合成動詞は與格を支配する。他動詞的の合成動詞は、與格の外に、對格も支配する。(§ 450. 1. 2.).

【452.】 このやうな合成動詞の若干を擧げてみると、*absum* '私が居ない' 及び *possum* '私ができる' の二つの動詞を除けば、動詞 *sum* と上記の種々な前置詞との合成動詞は總て與格を支配する。例へば、

*adsum*, '私が助ける, 私が出席する'.  
*dēsum*, '私が缺げる'.      *intersum*, '私が加はる'.  
*praesum*, '私が司る'.      *prōsum*, '私が役立つ' 等.  
*adferō*, '私が持つて來る, 私が報告する'.  
*dēferō*, '私が報告する, 私が與へる'.  
*inferō*, '私が持つてくる'.      *occurō*, '私が出會ふ'.  
*praeficiō*, '私が.....の支配者とする'.

【453.】 文章法 XXXIX. 性質を示す形容詞の内或るものは與格の形の名詞或は代名詞を支配する。かゝる形容詞は接近, 適當, 親切, 愉快, 類似, 或は此れ等と反對の觀念を示すものに殊に多い。(§ 450. 3.).

【454.】 このやうな形容詞の若干を擧げてみると、

*amicus*, '親切的な'.      *inimicus*, '不親切的な'.  
*finitimus*, '附近の'.      *molestus*, '煩しい'.

*gratus*, '快い'.      *idoneus*, '適當な'.  
*proximus*, '甚だ近い'.      *similis*, '似た'.

【455.】 次の羅句文を譯せ.

1. *Tibi nullum officium a me defuit.*
2. *Is est qui nec sibi nec alteri prodest.*
3. *Galli copiis Romanis erant inimici.*
4. *Equites fugientibus hostibus in silva occurrunt.*
5. *Romani ad silvam oppido proximam castra movebant.*
6. *Agri Germanorum fluvio Rheno finitimi erant.*
7. *Haec res exercitui magnam calamitatem attulit.*

【456.】 次の文を羅句語に譯せ.

1. 多數の水夫等が其の戰に加はつた.
2. 私の兄は其の日第八軍團を指揮するだらう.
3. 此の美しい女王に誰が親切でないか.
4. どれ程多くの人々が汝の父に敵であつたか.
5. 私は朝ローマへ去るだらう.

## XCVII. 所有を示す與格;

### 目的或は結果を示す與格.

【457.】 範例.

1. *Est mihi equus.* '私に馬がある' = '私は馬を所有する'.

2. *Est mihi nōmen Antōnius.* ‘私の名はアントーニウスである’。

【458.】文章法 XL. 動詞 *sum* 或は其の種々な活用の形は名詞或は代名詞の與格と結合して所有を示す。

【459.】範例.

1. *Militēs ibi venērunt praesidiō.* 兵士等は其處へ防禦のために來た’。
2. *Hōc mihi cūrae est.* ‘これは私に心配事である’。
3. *Quantō amōri nōbis est iustitia.* ‘正義が如何に我等に親しくあるよ’。

【460.】文章法 XLI. 動詞 *sum* 或は其の種々な活用の形、及び‘來る’、‘送る’、‘與へる’、‘思ふ’、及び此れ等の動詞と類義の動詞と一所に使はれる名詞(主に抽象名詞)の與格單數は、或る人或は物が‘あるべき’ (*is to be*) 或は‘こして役立つ’ (*is to serve as*) 物を示すに使用される。

注意 此の種類は與格には、通常人(時には物)を示す他の與格が伴ふて居る。又此の種類は與格は量を示す形容詞より外の形容詞に形容される事はない。

【461.】次の羅句文を譯せ。

1. *Huic homini Pompeius nomen erat.*
2. *Puto illam victoriam magno honori fuisse Marco.*
3. *Nonne vobis erit, non mihi, quidquid divitiarum est in urbibus hostium?*
4. *Dux magnas copias exercituum castris subsidio ibi reliquit.*

5. *Iste liber, quem tu mihi proficiscenti dedisti, per totum iter fuit mihi voluptati.*
6. *Quanto odio nobis est bellum!*
7. *Quis praefuit equitatu, quem Aedui Caesari auxilio miserant?*

【462.】次の文を羅句語に譯せ。

1. 私は弟を舟の番に残すだらう。
2. 此の美しい家は市府の飾である。
3. 私は五人の兄弟、三人の姉妹をもつ。
4. 將軍は陣營に適當な場所を見出した。
5. 兩親は子供等に如何に親しいことよ。

## XCVIII. 接 續 法.

*ut* 或は *nē* で引出された目的を示す句で使用せられる接續法.

【463.】§ 794.—§ 799., § 746.—§ 753., § 754.—§ 761. で動詞 *sum*, *amō*, *moneō* の接續法の能相、所相の形を全部學べ。

注意 接續法の時稱は已に § 48. で述べたやうに現在、過去、完了過去、全分過去の四時稱である。其の時稱の價値は、大體は、直説法の相應の時稱の價値と、相似てなる。但し接續法では、何れの時稱も、未來に關係する事ができる。

【464.】接續法の時稱は：

- 現在 (能相) {
  - 第一種活用 現在幹 (但し最後の母音 ā をのける) + ē + 人稱語尾.
  - 第二種活用 現在幹 + ā + 人稱語尾.
  - 第三種活用 現在幹 (但し最後の母音 ē を除ける) + ā + 人稱語尾.
  - 第四種活用 現在幹 + ā + 人稱語尾.
- 過去 (各種の活用) {
  - 能相所相共に, 現在不定法能相 + 人稱語尾.
  - 能相は 完了幹 + ērim, + ēris, + ērit, + ērimūs, + ēritīs, + ērint.
- 完了過去 (各種の活用) {
  - 所相は完了分詞と sim 以下 sum の現在接続法の形.
- 全分過去 (各種の活用) {
  - 能相は完了幹 + issēm, + issēs, + issēt, + issēmūs, + issētīs, + issēt.
  - 所相は完了分詞と essem 以下 sum の過去接続法の形.

【465.】 範例.

1. **Dō ut des.** '私は汝が與へるために與へる'.
2. **Sē armant ut pūgnent.** '彼等は戦ふために武装する'.
3. **Sē armābant ut pūgnārent.** '彼等は戦ふために武装した'.
4. **Civēs pūgnant nē oppidum dēleātur.** '市民等は町が破毀されないために戦ふ'.
5. **Servi labōrābant nē culpārentur.** '奴僕等は非難されないために労働した'.

【466.】 文章法 XLII. 羅句語では, 或る動作の目的を示すに決して不定法を使用しないで, 接続詞 **ut** 或は **nē** で引出された, 主語をもち, 接続法の定動詞をもつ句を使ふ. 而して此の場合に **ut** は肯定の目的句を引出すに使はれ, **nē** は否定の目的句を引出すに用ひらる. 決して **nē** の代りに **ut nōn** を使用してはいけない.

注意 **ut** 或は **nē** で引出された附屬句の接続法の動詞の時稱は, 主句の動詞の時稱に従ふもので, 若し主句の動詞の時稱が現在か未來か未來完了である時には, 此の接続法の動詞の時稱は通例は現在 (なりなりは完了過去) であり (上例 1. 2. 4.), 若し過去, 完了過去或は全分過去である時には, 通例は過去 (なりなりは全分過去) である. (上例 3. 5.) CIX. 参照.

【467.】 次の羅句文を譯せ.

1. Venite statim, ut me in hac re moneatis.
2. Scripta epistula servum misit, ut filia certior fieret.
3. Fugiunt hostes ne vulnerentur.
4. Ut valeret, corpus exercebat.
5. Impedimentis in oppido relictis, in campum profecti sumus, ne vastaretur.
6. Veniunt agricolae, ut urbem magnam videant.
7. Nobis absentibus profectus est, ut bellum videret.

【468.】 次の文を羅句語に譯せ.

1. 我が兄よ, 我を助けるために來い.
2. 善い奴僕が, 勇敢な主人を見るために町へ行った.
3. 彼は敵に殺されないため逃げる.
4. 私は汝を褒めるためにローマへ行くだらう.
5. 彼は教師に非難されないために勤勉であつた.

## XCIX. 接 續 法.

ut 或は nē で引出された目的を示す句に使用せられる接續法(續).

【469.】 § 762.—§ 769., § 778.—§ 785., § 770.—§ 777. で *regō*, *capīō* 及び *audiō* の接續法の能相と所相の形を全部學べ.

【470.】 次の羅句文を譯せ.

1. Ad te scribo, ut omnem timorem tollam.
2. Haec ad te scripsi, ut omnes has res statim constitueres.
3. Hoc proelium factum est, ne legati ad Caesarem mitterentur.
4. Ad urbem omnes venimus, ut oratorem audiremus.
5. His rebus factis, veniam, ne opus conficiat.
6. Praeceptum erat Labieno, ne proelium committeret.
7. Nuntium mitte, ut consul de his rebus certior fiat.

【471.】 次の文を羅句語に譯せ.

1. 私は汝に書物を返却するために来るだらう.
2. 野獸が農夫に捕へられないために森中へ逃げた.
3. 彼は其の書籍を發見するために海岸へ妹を送つた.  
(全過.)
4. 彼等は演説者の語が聞かれないためにこの大聲をした.
5. 汝等は舟を焼くために港へ行くか.

C. 不定法と共に使用せられる對格  
(Infinitive Proposition).

【472.】 ‘彼が彼の母は健康でないと言ふた’. (He said that his mother was not well.) このやうな文即ち ‘何々の事を’ の ‘事を’ (that) を、羅句語ではどのやうにかくべきであるかと云ふに、此の ‘事を’ (that) に直接相當する羅句語はない。それで、上文を羅句語に譯さうと欲するならば、文の構造法を變へなければならぬ。即ちこのやうな場合には、所謂 *infinitive proposition* といふ文の構成法を使ふて、‘事を’ の前(英語ならば that の後)の文の主格の形の主語(及び其れに附屬する形容詞又は分詞)を對格に變へ、其の定動詞を不定法に變へるのである。即ち、

*Dixit mātrem nōn valēre.* 即ち、

直接説話を間接説話に變へるにはこのやうな變化をする。今數例を附加してみると、

## 直接説話

1. (Tū) scribis. ‘汝が書く’.
2. Epistula scripta est. ‘手紙が書かれた’.
3. (Tū) scribēs. ‘汝が書くだらう’.

## 間接説話

1. Dicimus tē scribere. ‘我等は汝が書くと云ふ’.
2. Putāmus epistulam scriptam esse. ‘我等は手紙が書かれたと思ふ’.

3. *Dicimus tē scriptūrum (esse)*. ‘我等は汝が書くだらうと云ふ’.

【473.】文章法 XLIII. 間接説話は‘言ふ’, ‘考ふ’, ‘知る’及び‘認む’等, 或は其の外此れ等と同義の表示法の後に用ひられるものである, 而してそれは定動詞の變つた形である不定法を, 主格の形の主語の變つた形である對格の形の主語と共に使ふて表さる. 言ひ換へると直接説話を間接説話に變へるには, 直接説話の主な動詞である定動詞を不定法に變へ, 且つ其の主格の形の主語を對格に變へ此の不定法の主語とするのである.

【474.】間接説話が後に來る動詞は, 通常次のやうなものである.

1. ‘言ふ’, ‘告げる’等の義の動詞.  
*dicō*, ‘私が言ふ’.  
*negō*, ‘私が言はぬ, 私は否認する’.  
*nuntiō*, ‘私が通告する’.  
*respondeō*, ‘私が答へる’.
2. ‘知る’, ‘學ぶ’等の義の動詞.  
*cognoscō*, ‘私が學ぶ, 私が知る’.  
*sciō*, ‘私が知る’.
3. ‘考ふ’, ‘思ふ’等の義の動詞.  
*arbitror*, ‘私が考へる’.  
*existimō*, ‘私が思ふ’.  
*jūdicō*, ‘私が判断する’.  
*putō*, ‘私が思ふ’.

- spērō*, ‘私が望む’.
4. ‘知覺する’, ‘見る’等の義の動詞.  
*audiō*, ‘私が聞く’.  
*sentīō*, ‘私が感ずる’.  
*videō*, ‘私が見る’.  
*intellegō*, ‘私が理解する’.

【475.】文章法 XLIV. 不定法の時稱は, 自分自身で獨立した時を示すものでなく, 常に主文の主な動詞の時稱と連關して居るもので, 其の動詞の時稱に對して, 現在, 過去又は未來の時を示すものである. 現在不定法は主文の主な動詞の示す時と同時の, 未來不定法は此の動詞の示す時より後の, 完了不定法は此の動詞の示す時の時には已に完了した, 或る動作或は状態を示すのである. 直接説話の現在直説法は間接説話では現在不定法となり, 過去直説法は完了不定法となり, 未來直説法は未來不定法となる.

【476.】次の羅句文を譯せ.

1. *Videmus ver adesse et vere hiemem pelli et frigus solvi.*
2. *Novimus multas aves in arboribus cantare et alias mox cantaturas.*
3. *Principes Gallorum dicunt se nullum consilium contra Caesaris imperium inituros esse.*
4. *Legati responderunt neminem ante Caesarem illam insulam adisse.*
5. *Aliquis nuntiavit Marcum consulem creatum esse.*

- 6. Spero te patre invito non venturum.
- 7. Nonne audivisti Romulum primum populi Romani regem fuisse?

【477.】 次の文を羅句語に譯せ.

- 1. 私は彼女が此の手紙を書いたのを見た.
- 2. 我等の將軍が敵を破るだらうと父は考へる.
- 3. 汝の兄は父が今ローマに居る事を知つてをるか.
- 4. 私は彼が已に出發したと思ふ.
- 5. 彼は父の留守中, 家に居ると云ふた.

### CI. 不完全動詞 (Verba Defectiva).

【478.】 不完全動詞とは, 其の動詞では只少數の形ばかり使はれて, 外の形は使はれない動詞を云ふのである.

【479.】 次に不完全動詞の若干を示さう:

- 1. *aiō*, '私が云ふ, 私が諾する, 私が主張する'.  
 現在直說法: *aiō, ais, ait, aiunt.*  
 現在接續法: *aiās, aiat, aiant.*  
 過去直說法: *aiēbam, aiēbās, aiēbat, aiēbāmus, aiēbātis, aiēbant.*  
 現在分詞: *aiēns.*
- 2. *inquam*, '私が云ふ'.  
 現在直說法: *inquam, inquis, inquit, inquitus, inquitis, inquit.*

- 現在接續法: *inquit.*
- 命令法: *inque, inquitō.*
- 過去直說法: *inquiēbat.*
- 未來直說法: *inquiēs, inquiet.*
- 完了過去直說法: *inquisti, inquit.*

注 意 現在直說法の種々な形は *inquam* より外は時々完了の義に用ひられる.

3. 次の四つの完了形の動詞.

- a. *memini*, '私が記憶する'. b. *ōdī*, '私が憎む'.
- c. *coepi*, '私が始めた'. d. *nōvī*, '私が知る'.

【480.】 *memini, ōdī, coepi, nōvī* の活用表.

完了過去	直說法	<i>memini, -isti, 以下</i>	<i>ōdī, -isti, 以下</i>	<i>coepi, -isti, 以下</i>	<i>nōvī, -isti, 以下</i>
	接續法	<i>meminerim, -eris, 以下</i>	<i>ōderim, -eris, 以下</i>	<i>coeperim, -eris, 以下</i>	<i>nōverim, -eris, 以下</i>
全分過去	直說法	<i>memineram, -erās, 以下</i>	<i>ōderam, -erās, 以下</i>	<i>coeperam, -erās, 以下</i>	<i>nōveram (nōram), -erās, 以下</i>
	接續法	<i>meminissem, -issēs, 以下</i>	<i>ōdissem, -issēs, 以下</i>	<i>coepissem, -issēs, 以下</i>	<i>nōvissem (nossem), -issēs, 以下</i>
未來完了直說法		<i>meminerō, -eris, 以下</i>	<i>ōderō, -eris, 以下</i>	<i>coeperō, -eris, 以下</i>	<i>nōverō (nōrō), -eris, 以下</i>
命令法		<i>memento</i> (二人稱單數)	欠	欠	欠
		<i>memento</i> (二人稱複數)	欠	欠	欠



完了不定法	meminisse	ōdisse	coepisse	nōvisse (nōsse)
未來不定法	欠	ōsūrus esse	coepturus esse	欠
完了分詞	欠	perōsus	coeptus	欠
未來分詞	欠	ōsūrus	coepturus	欠

注 意イ. 上記の四字の内 *memini*, *ōdi*, *nōvi* は、其の譯の示すやうに、形は完了形であるが、意義は現在である。従て全分過去の形は過去、未來完了の形は未來の義である、以下之に順する。

注 意ロ. 若し所相形の不定法と一所に、*coepi* 或は其の活用形を使ふる時には、能相 *coepi*, *coeperam* 等の形の代りに、所相形 *coeptus sum*, *coeptus eram* 等の形を用ゐる。例へば、

*Urbs aedificāri caepta est.* ‘市府が建設され始めた’。

【481.】 若し或る者の詞を、其の儘に引用するときには、*inquam* 以下其の適當な活用形を、此の或る者の詞の前に‘云ふ’の義で使用する(但し *inquam* は所謂後置詞 (*postpositive*) の一つであるから、此の詞で文を始めることはできない)、しかし或る者の詞の意義ばかりを引用する場合には、*aiō* 又は *dicō* の適當な活用形を使用する。

【482.】 次の羅匈文を譯せ。

1. Cato se id mirari aiebat.
2. Quod tu mihi dixisti, pulchre meminero.
3. Novi hominem et scio eum pessimum civem semper fuisse.
4. “Non credimus.” inquit, “vera esse, quae dicitis.”

5. Ne cives ab oratore deciperentur, Caius dicere coepit.
6. Dixit se neque hunc hominem neque illum odisse.
7. Turpe est rem bene coeptam male finire.

【483.】 次の文を羅匈語に譯せ。

1. 私は明日ローマへ行くだらうと彼は云ふ。(inquam を用ゐる.)
2. 汝等は農夫の悪い子供等を憎んだ。(全過.)
3. 私は彼が其の日アテーナエに居つたと記憶する。
4. 彼の兄が家の内に留まると云ひ始めた。
5. 汝が長い手紙を書いたと彼女は云ふた。(ait を使ふ.)

## CII. 不人稱動詞 (Verba Impersōnālia).

【484.】 不人稱動詞とは、只三人稱單數の直說法と接續法(通例主語を表はさない)、及び現在不定法と完了不定法とでばかり用ひられる動詞を稱する。例へば、

- a. *pluit* (-ēre), ‘雨が降る’, (it rains.)
- b. *lūcescit* (-ēre), ‘夜が明ける’, (it dawns.)
- c. *tonat* (-āre), ‘雷が鳴る’, (it thunders.)
- d. *fulgurat* (-āre), ‘雷が光る’, (it lightens.)

注 意 此れ等の不人稱動詞も、時としては主語が表はれてゐる事がある。

例へば *Jupiter pluit.* ‘ユピテルが雨を降らす’. (Jupiter rains.)

【485.】 以下に列擧する若干の不人稱動詞は、時には主語が表はれてをらず、時には中性代名詞を主語とし、時には甚だ

普通である事は不定法或は(複雑な文では)一つの名詞句を主語として用ふる。

【486.】 1. *piget*, ‘惱ます’, *puđet*, ‘恥づる’, *paenitet*, ‘悔ゆる’, *taedet*, ‘疲れる’, 及び *miseret*, ‘哀れむ’ 等の不人稱動詞は, 此れ等の動詞で表はされてをる觀念の感じを持つ人を表す語の對格の形と, 此れ等の感じを起さす事物を表す語の屬格の形(但し, これは此の事物が其の文の主語として使用されてない時の事である)とを支配する。

例. *Nēquitiae tuae mē puđet*. ‘私は汝の邪惡を恥づる’。

【487.】 2. *interest*, ‘差異がある, 大切である’, (it make a difference, it is important.), *rēfert*, ‘關する’, (it matters.) の二つの不人稱動詞の内, 前者は或る動作のために差異を蒙る, 即ち或る動作が其の人に取つて大切である人(事物でない)の屬格を支配し, 後者は或る動作が關係して居る人(事物でない)の屬格を支配す。

例. *Interest Caesaris bellum ante hiemem confieri*.

‘戰爭が冬以前に終る事がケーサルに取つて大切である’。然るに

*Interest ad laudem civitātis*.

‘其れは國家の名譽に大切である’。

注意 けれども, 此れ等二つの不人稱動詞は, 一人稱及び二人稱の人稱又は再歸代名詞, 及び三人稱の再歸代名詞では, 屬格 *mei*, *nostrī*, *tui*, *vestri*, *sui* を使はずに, 所有代名詞の奪格單數女性形である *meā*, *nostrā*, *tuā*, *vestrā*, *suā* を使用する。

例. *Interest meā Rōmam ire*.

‘ローマへ行くのは私に大切である’。

【488.】 3. *libet*, ‘氣に入る’, (it pleases.), *licet*, ‘許される’,

(it is allowed.), *liquet*, ‘明白である’, (it is manifest.), の三つの不人稱動詞は, 或る事が氣に入り, 許可され或は明白である人の與格を支配する。

例. *Licet his incolumis discēdere*.

‘彼等は害を蒙らずして去ることができる’。

【489.】 4. *Oportet*, ‘適當である, 筈である’, (it is fitting, it ought.), *decet*, ‘似合しい’ (it is seemly.), 及び *dēdecet*, ‘不似合である’, (it is unseemly.) 等は通常, 不定法と對格との構成法に伴はれて居る。

例. *Omnēs hominēs ab odiō vacuōs esse decet*.

‘凡ての人々が憎惡なくある事は似合しい事である’。

【490.】 自動詞を, 時々所相の形で使用する事がある。このやうな場合には, 只, 不人稱動詞のやうな用法で使用される。

例. *itur* (動詞 *eo* の所相形), ‘行かれる’. (There is a going. A journey is made).

【491.】 次の羅句文を譯せ。

1. *Pluit, amice; neque hodie ad urbem ire poterimus.*
2. *Dixit sua referre navem solvi.*
3. *Diu et acriter ab utrisque pugnatum est.*
4. *Quid Milonis interest interfici Clodium.*
5. *Liberos decet parentes suos semper amare.*
6. *Illorum magis quam sua retulisse credunt.*
7. *Factorum meorum me nunquam poenitebit.*

【492.】 次の文を羅句語に譯せ。

1. 昨日, 雨が降り, 雷が鳴り, 雷が光つた。

2. 私が田舎から市府へ歸る事は、市民に大關係がある。
3. 汝は汝の兄の言を聴づるか。
4. 汝は此の書物を読む筈であつた。
5. 昨夜は心地よく眠られた。

### CIII. 接 續 法.

ut 或は ut.....nōn で引出された結果  
を示す句に使用せられる接續法.

#### 【493.】 範例.

1. *Hostēs ita terrentur ut fugiant.* ‘敵等は逃げる程、驚かされる’。(驚かされて、逃げるやうになる.)
2. *Hostēs ita terrebantur ut fugerent.* ‘敵等は逃げた程、驚かされた。(驚いて逃げた.)
3. *Is puer tam malus est ut ā magistrō nōn laudētur.* ‘かの男の子供は大に悪くて、教師に褒められない’.
4. *Is miles tam ignāvus erat ut ā duce nōn laudārētur.* ‘かの兵士は大に怠惰で、將軍に褒められなかつた’.

注 意イ. 結果を示す *ut* 或は *ut.....nōn* 句の時稱關係は § 466. 注意で示したものと等しい.

注 意ロ. 上例で明白なやうに、結果を示す附屬句に對して、本文には屢々 *ita, tam* のやうな副詞を使ふて、結果句を指示して居る事がある.

【494.】 文章法 XLV. 羅句語では、或る動作の結果を表はさうとするときに、肯定の結果であるなれば、*ut* で其の句を引出し、否定の結果であるなれば、*ut.....nōn* で引出すのである。而してこの結果句の動詞は常に接續法の形である。

#### 【495.】 次の羅句文を譯せ.

1. *Is miles tam fidus erat ut Romam a duce suo mitteretur.*
2. *Non sum tam ignarus ut nesciam Romam a Romulo conditam esse.*
3. *Terror est tantus ut non facile milites sese recipiant.*
4. *Recipite vos ad silvas ne ab hostibus capiamini.*
5. *In silvis tam diu manebamus ut hostes impetum in nos non facerent.*
6. *Ita acriter pugnatum est ut pauci nostrorum aut illorum relinquerentur.*
7. *Quis nostrum est tam sapiens ut omnia cognoscat?*

#### 【496.】 次の文を羅句語に譯せ.

1. 其の馬は性が烈しいので導くに容易でない。
2. 彼は外出する事が出来ない程跛足である。
3. 暫時で舟が水で充たされた程波が大きかつた。
4. 我等の將軍が大に傷をうけて捕虜になつた。
5. 危険が大きい結果何人も出發するを欲しない。

## CIV. 間 接 疑 問 文.

## 【497.】 範例.

## 直接疑問文

1. **Quis es?** '汝は誰であるか'.
2. **Cūr profectus est?** '何故に彼は出發したか'.
3. **Quem vidisti?** '汝は誰を見たか'.

## 間 接 疑 問 文

1. **Sciō quis sis.** '私は汝が誰であるか知つてをる'.
2. **Quesiērunt cūr profectus esset.** '何故に彼は出發したか彼等が問ふた'.
3. **Sciō quem videris.** '私は汝が誰を見たか知つてをる'.

【498.】 文章法 XLVI. 間接疑問文で使はれる定動詞は接續法の形である.

注 意 間接疑問文で使はれる接續法の動詞の時解は 466. 注意で述べたのと等しい.

【499.】 間接疑問文を引出す最も普通な疑問詞は, **quis**, '誰か', (who?), **cūr**, '何故に', (why?), **ubi**, '何處か', (where?), **quō**, '何處へか', (whither?), **unde**, '何處からか', (whence?), **quot**, '如何に多くか', (how many?), **num**, 'どうか', (whether?) 等である.

【500.】 間接疑問文は **petō**, '私が要求する', **postulō**, '私が求める', **quaerō**, '私が求める', **rogō**, '私が問ふ' 等の疑問

動詞, 或は '言ふ' の義をもつ動詞, 或は精神的動作を示す動詞或は其の他の表示方法の目的として使用せられる.

## 【501.】 次の羅句文を譯せ.

1. Amicus a me quaesivit unde venirent tot milites.
2. Heus tu, quid agis?—Rogasne quid agam? nihil ago.
3. Rex rogavit quid legati postularent et cur ad se venissent.
4. Hi dicunt quod illi negant; neque possum reperire quid in illa re factum sit.
5. Dic mihi num Alexander a proeliis semper abierit victor.
6. Videtisne quae oppida hostes oppugnaverint?
7. Nesciebas quis in horto meo ambularet.

## 【502.】 次の文を羅句語に譯せ.

1. 何を汝が右手に持つか私に告げよ.
2. 私は汝の弟が何處へ行つたか知らなかつた.
3. 將軍が兵卒等に何故に使者が來たか問ふた. (全.過.)
4. 兄が弟に何處からこの白鳩が來たか問ふだらう.
5. 彼等は農夫が大犬を所有してをるかどうか知らない.

## 【503.】 文例 XVII. Proserpina.

Proserpina, Cereris filia, aliquando in Sicilia ad urbem Henam in agris flores carpebat,serta nectabat laudabatque cum comitibus. Subito terra concussa Pluto, inferorum deus, cujus currum equi atri vehebant, e terra emersit. Deus Proserpinam

abduxit, ut uxor sua et inferorum regina esset; clamorem puellae compressit. Mater cum ignoraret, ubi filia esset, totum orbem terrarum frustra peragravit. Tandem Ceres a Sole, qui omnia conspicit, audivit quis filiam abduxisset. Itaque statim iter ad Jovem flexit et precibus animo ejus persuasit, ut filia a Plutone remitteretur. Proserpinae permissum est, ut per partem anni apud matrem, per partem alteram apud inferos esset.

### CV. 目的文詞 (Supinum).

【504.】 已に § 56. で述べたやうに、目的分詞には **-um** で終るものと、**-ū** で終るものとの二つがある。

その内、**-um** で終る目的分詞は ‘行く’ (**eō**), ‘来る’ (**veniō**), ‘送る’ (**mittō**) 及び ‘呼ぶ’ (**vocō**) 等のやうな動作を示す動詞と一所に、その動詞の目的を示すために用ひられる。而して目的分詞はそれと同じ語である定動詞と等しい格を支配する。

- 例. 1. **Cubitum eō.** ‘私は眠るために行く’。  
2. **Veniō auxilium orātum.** ‘私は援助を乞ふために来る’。

【505.】 **-ū** で終る目的分詞は已に § 56. 2. に於て述べたやうに、實は目的を示すのではなく、**dulcis**, ‘甘い’, **jucundus**, ‘悦しい’, **molestus**, ‘煩はしい’, **dignus**, ‘價值がある’, **indignus**, ‘價值がない’, **facilis**, ‘容易な’, **difficilis**, ‘困難な’, **foedus**, ‘恐ろしい’ 等、及び此れ等と類義の形容詞等、及び **fās est**

‘其れが許可される’, **nefās est**, ‘其れが許可されない’, 等の句、と一所に使はれて、‘何々には’のやうな意義をもつてをる。

- 例. 1. **Id est facile factū.** ‘其れはするに容易い’。  
2. **Fās est dictū.** ‘言ふ事は許可される’。

【506.】 文章法 XLVII. **-um** で終る目的分詞は、或る動詞の目的を示すために用ゐられ、**-ū** で終る目的分詞は、或る若干の形容詞、或は句と共に、‘何に於て’其の形容詞或は句の意義が眞であるかを定めるために使用せられる。

【507.】 次の羅句文を譯せ。

1. Legati Romam veniunt pacem petitem.
2. Num facile factu credis milites Romanos vincere?
3. Ingens hominum multitudo in urbem convenit ludos publicos spectatum.
4. Haec res non modo visu sed etiam auditu est foeda.
5. Rogavit cur venissent. Responderunt se venisse oratum pacem.
6. Optimum factu putant dormitum ire.
7. Nefas est dictu.

【508.】 次の文を羅句語に譯せ。

1. 私は直ぐ寢に行くだらう。
2. 汝は何故に金錢を乞ふために私の處へ來たか。
3. 敵を破るのは甚だ爲し易い事と汝は思ふか。
4. 彼は何を云ふのが最もよいか問ふた。
5. 使節が平和を乞ふためにローマへ送られるだらう。

### CVI. 動詞的中性名詞 (Gerundium).

【509.】 動詞的中性名詞は已に §55. で述べたやうに、能相的の動詞的名詞であつて、英語の -ing で終る動詞的名詞に等しい。而して第二種轉尾の中性名詞 **bellum** の單數の形のやうに轉尾する。(但し、その主格の形と、前置詞と結合しない對格の形とは不定法で補ふ)。

【510.】 動詞的中姓名詞の轉尾表。

主格	(amāre, 愛する事, to love).
對格	amandum, 愛する事な, loving), (前置詞がない時は amāre).
屬格	amandi, 愛する事の, (of loving).
與格	amandō, 愛する事に, ために, (to loving, for loving).
奪格	amandō, 愛する事で, etc. (by loving, etc.).

【511.】 範例.

1. 主格 **Vidēre est crēdere.** ‘見るのは信ずるのである’.
2. 對格 **Hic locus ad pūgnandum idōneus est.** ‘此の場所は戦ふに適當である’.  
**Dicunt vidēre esse crēdere.** ‘彼等は見るのは信ずるのであると云ふ’.
3. 屬格 **Caesar hortandi finem facit.** ‘ケーサルは勵ます事の終りをする’。(即ち、勵ます事をやめる.)

4. 與格 **Aqua ūtilis est bibendō.** ‘水は飲むに有用である’.
5. 奪格 **Mōns discendō alitur.** ‘心は學ぶ事で養はれる’.

注意 動詞的中性名詞の與格は、主に或る若干の形容詞の後に、對格は主に前置詞 **ad** の後に用ひられる。

【512.】 動詞的中性名詞は、動詞から出來た名詞であるから、他の名詞に隸屬して名詞的の性質を示し、例へば、**ars scribendi**, ‘書く事の術’, 次には、それと同じ語である動詞と等しい格(名詞或は代名詞の)を、又は格と其の格を支配してをる前置詞とを一所に支配し、且つ副詞で形容されて、動詞的の性質を示してをる。

【513.】 文章法 XLVIII. **Gerundium** とは一種の動詞的中性名詞で、只、對格、屬格、與格及び奪格單數でばかり使用せられるものである。而して動詞的中性名詞の格の成句法は、外の名詞の格の成句法と一般に同一である。

【514.】 次の羅句文を譯せ。

1. Inter pugnandum triginta sunt captae naves.
2. Natando homo aptus est; natando corporis vires exercentur.
3. Legati non solum audiendi causa sed etiam dicendi venerunt.
4. Rem publicam bene administrare difficile est.
5. Victoris consilium acceptarum injuriarum obliviscendi ab omnibus laudatur.

6. Hostes tam celeriter progressi sunt ut spatium pila in eos jaciendi non daretur.  
7. Hominis mens discendo alitur et cogitando.

【515.】 次の文を羅句語に譯せ.

1. 此の船は航海に役立つ。
2. 我等は愛して愛される。
3. 子供等を教育する術は困難である。
4. この事をするのは敵を征服する事である。
5. 兵士等は穀物を得るためにアテーナエに行つた。

## CVII. 所相的形容詞 (Gerundivum).

【516.】 Gerundivum は一種の所相的の動詞的形容詞で、三つの性に對して、三種の語尾をもつてをつて、丁度 bonus, -a, -um のやうに轉尾する。

【517.】 所相的形容詞の用法に二つある、

1. ‘爲さる可き事’を示す、即ち義務又は必要の義をもつ所相的の分詞として使用せられる。

例. Vir laudandus, ‘稱讃せらる可き男’。

2. 義務又は必要と云ふやうな觀念なしに、動詞の現在分詞所相のやうに使用せられる。

例. Facultātem itineris per provinciam faciendi dāre nōlebat. ‘彼は州を通つて旅行する機會を與へる事を欲しなかつた’。(直譯は：彼は州を通つてすられる旅行の機會を與へるを欲しなかつた。)

【518.】 自動詞から出來た所相的形容詞の中性の形のもの、est とが結合したものは、一種の不人稱發表法である。而してその動作をする人は與格の形である。

例. *Mihi scribendum est.* ‘私は書かねばならない’。

【519.】 自動詞から出來たこのやうな不人稱的の所相的形容詞は、それと同じ動詞の構成法を守るのである。即ち、このやうな所相的形容詞はそれと同じ動詞と等しい屬格、與格或は奪格を、或は格と格と結合してをる前置詞とを一所に支配し、且つ副詞で形容せられるものである。例へば、

1. *Obliviscendum est injuriarum acceptarum.* ‘人は蒙つた害を忘れねばならない’。(obliviscor は屬格を支配する。)

2. *Parcendum ā tibi est inimicis.* ‘汝は敵を宥免すべきである’。(parcō は與格を支配する。)

注意 自動詞を所相的に使ふには、常に不人稱構成法でなくてはいけない。

【520.】 對格の形の一つの目的物をもつてをる他動詞、例へば、*laudō virōs bonōs* のやうな文から上記 § 518. のやうな不人稱的表示法を用ゐて一文を作る事はない。それであるから *laudandum est virōs bonōs* は正しい文ではない。即ちこのやうな場合には、人稱的表示法を使用して、對格の形の目的物 (*virōs bonōs*) を主格の形の主語 (*virī bonī*) にし、所相的形容詞と est とは此の新らしい主語の要求する形 (*laudandī sunt*) となるのである。即ちこのやうな場合には不人稱的の所相的形容詞を使はないで人稱的の所相的形容詞を使ふのである。

例. *Educandum est nobis pueros.* は誤文で

*Pueri nobis educandi sunt.* '男小供等は我等に教育せられねばならぬ' と書く可きである。

【521.】文章法 XLIX. 動詞 *sum* 或は其の種々な活用形と結合する所相的形容詞は、その動作を爲す者を示すのに、*ā* 又は *ab* と名詞或は代名詞の奪格とを一所に使用せずに、通例單に其の名詞或は代名詞の與格ばかりを使用する。(但し、此の與格の用法は、若し其れがために其の文の意義を不明瞭にするやうな場合には避けて、その代りに *ā* 又は *ab* と名詞又は代名詞の奪格とを使ふて行爲者を示すのである)。

例. *Pecunia mihi reddenda est.* '金錢は私に返却されるべきだ。' の文で '私に依りて' の義を示さうとするならば、*a me* を用ふ。

【522.】所相的形容詞は '取る', '與へる', '世話する', '放任する' 及び 此れ等と類義の動詞の動作の目的を示すために使用せられる。

例. *Urbs ā duce militibus diripienda data est.* '市府は掠奪するために、將軍から(=に依つて)兵士等に與へられた'。

【523.】次の羅句文を譯せ。

1. *Me duce, nihil est timendum.*
2. *Alii Pompeio, Caesari alii, favendum esse dicebant.*
3. *Impedimenta nobis relinquenda sunt, si vincere volumus.*
4. *Ad urbem eundum est, ut hos libros emamus, illos vendamus.*
5. *Hostes vobis, neque sine causa timendi, neque sine causa contemnendi sunt.*

6. *Pro patria fortiter nobis pugnandum est.*
7. *Quot epistulae mihi scribendae sint, nescio.*

【524.】次の文を羅句語に譯せ。

1. 私は直ぐ此の手紙を書かねばならない。
2. 汝等は悪人を信じてはいけない。
3. 我等は一戦で敵を破らねばならない。
4. 此の山は陣營を据えるためにとられた。
5. 私は今日ローマへ行かねばならない。

### CVIII. 所相的形容詞と動詞的中性名詞.

【525.】若し動詞的中性名詞が、對格の形の目的語をもつて、屬格か奪格かの形である時には、この動詞的中性名詞の代りに、好んで所相的形容詞を使ひ、若し對格か與格かの形である時には、必ず所相的形容詞を使用するのである。

【526.】動詞的中性名詞、例へば *ars pueros educandi* を所相的形容詞に變へるには、次の方法をとる。

1. 對格の名詞(代名詞) (*pueros*) は動詞的中性名詞の格の形 (*puerorum*) となり。
2. 動詞的中性名詞 (*educandi*) は所相的形容詞となつて、附從的形容詞として、上記の名詞(代名詞) (*puerorum*) の性、數及び格に従ふものである。即ち、  
*ars puerorum educandorum.*



【527.】 此れを表で示せば、

	動詞的中性名詞	所相的形容詞
對格	(puer aptus est ad litterās tractandum.)	puer aptus est ad litterās tractandās.
屬格	Ars litterās tractandī est difficillima.	Ars litterārum tractandarum est difficillima.
與格	(Puer idōneus est litterās tractandō.)	puer idōneus est litterīs tractandīs.
奪格	litterās tractandō ingenium acuitur.	Acuitur litterīs tractandīs ingenium.

【528.】 中性の形容詞(名詞となつたもの), 又は中性の代名詞を目的語とする屬格, 與格或は奪格の形の動詞的中性名詞は所相的形容詞に變る事はない。例。

1. **Studium vera cognoscendī.** ‘真理を學ぶ學問’。
2. **Aptus sum id faciendō.** ‘私はその事をするに適する’。

【529.】 人稱(又は再歸)代名詞の複數の形である **sui, nostri, vestri** 等と一所に使はれる所相的形容詞は單數の形である。例。 **hominēs cupidī sunt sui conservandī.** ‘人々は自己の保存を欲する’。

【530.】 動詞的中性名詞, 又は所相的形容詞の對格の形は, 前置詞 **ad** と結合し, 或はその屬格の形は, **causā** と結合して, 目的を示すために用ひられる。例,

	動詞的中性名詞	所相的形容詞
對格	ad audiendum vēnerunt.	ad verbum audiendum vēnerunt.
屬格	audiendī causā vēnerunt. 彼等は聞くために來た。	verbī audiendī causā vēnerunt. 彼等は言を聞くために來た。

【531.】 次の羅句文を譯せ。

1. Consilia ineunt urbem delendi.
2. Ad eas res conficiendas Orgetorix deligitur.
3. Initio belli gerendi facto non nos oportet legatos pacis orandae causa mittere.
4. Ille dies flumini transeundo dictus est.
5. Spatium neque arma capiendi neque auxilii petendi est datum.
6. Urbis incendendae causa statim proficiscemur.
7. Occupatus sum in litteris scribendis.

【532.】 次の文を羅句語に譯せ。

1. 汝は市府を占領する計畫をするか。
2. あの犬は手紙を送るに適當であつた。
3. 熱心に働くから此の忠僕は主人に褒められる。
4. 彼女はそれを見んと熱望したか。
5. 船は航海する用意が出来, 風は順風である。

【533.】 文例。 XVIII. **Proditor.**

Darius olim rex Persarum in silvas cum magna nobilium caterva venatum iverat. Subito ante oculos omnium unus ex accipitribus regiis, qui columbam sequebatur, ipse ab aquila,

rege avium, oppugnatus est. Ille autem nec viribus nec majestate hostis perturbatus, et rostro et unguibus sese quam fortissime defendebat. Tandem aquila, quod nullo modo victoriam reportare poterat, in fugam sese dedit. Inde rex accipitrem ad se ferri jussit, et capitique alitis auream coronam pro tanta virtute ipse imposuit. Deinde unum ex iis servis qui adstabant securi jussit percutere caput proditoris alitis. "Hic enim," inquit, "contra suum regem fortiter sed impie configere ausus est.

### CIX. 時稱關係.

#### 命令及び禁止の發表法.

【534.】 範例.

1. **Audiō ubi sit, 或は ubi fuerit.** '私は彼が何處に居るか(或は)居つたかを聞く'. (現在)
2. **Audiam ubi sit, 或は ubi fuerit.** '私は彼が何處に居るか(或は)居つたかを聞くだらう'. (未來)
3. **Audiverō ubi sit, 或は ubi fuerit.** '私は彼が何處に居るか(或は)居つたかを聞いただらう'. (未來完了)
4. **Audiēbam ubi esset, 或は ubi fuisset.** '私は彼が何處に居つたか(或は)居つたりしかを聞いた'. (過去)
5. **Audivī ubi esset, 或は ubi fuisset.** '私は彼が何處に居つたか(或は)居たりしかを聞いた'. (完了過去)

6. **Audiveram ubi esset, 或は ubi fuisset.** '私は彼が何處に居つたか(或は)居つたりしかを聞いた'. (全分過去)

【535.】 現在, 未來, 未來完了, 現在完了の四つの時稱を第一時稱 (primary tenses) と稱へ, 過去, 歴史的完了過去, 全分過去の三つの時稱を第二時稱 (secondary tenses) と稱へる.

【536.】 文章法 L. 主文に第一時稱の内の一の時稱の直説法の形の動詞が使用せられる時には, 其の附屬句の動詞の時稱は, 接續法の現在か完了過去かの形である (§ 534. 1. 2. 3.), 主文に第二時稱の内の一の時稱の直説法の形の動詞が使用せられる時には, 其の附屬句の動詞の時稱は 接續法の過去或は全分過去の形である. (§ 534. 4. 5. 6.)

注 意 時稱關係を定める際には, '現在完了'も第二時稱と考へるのが普通である.

【537.】 時稱關係表.

	主文にある直説法動詞の時稱	附屬文にある接續法動詞の時稱	
		不完了或は接續行為を示すもの	完了行為を示すもの
第一時稱	現在 未來 未來完了	現在	完了過去
第二時稱	過去 完了過去 全分過去	過去	全分過去

## 【538.】 命令及び禁止.

1. 命令及び要求等は羅句語でも英語, 獨逸語等のやうに命令法の形で示される, をりをりは現在接續法の形も使ふ. 例へば,

a. **Dic mihi**, 又は **dicās mihi**. '私に告げよ'.

b. **Scribite epistulās**, 又は **scribātis epistulās**. '汝等手紙を書け'.

注意 命令法の種々な形の中で **-tō, -tōte, -ntō**, で終る長い形は主に法律文や詩歌で使用せられる.

【539.】 2. 二人稱の禁止は通例次の二つの方法の内の一つを使用する.

a. **nōlō** の命令法の形である **nōlī** 或は **nōlite** に動詞の不定法の形を附加する方法,

例. **nōlī scribere**. '書くな'.

b. 否定詞 **nē** に動詞の完了過去接續法の形を合し用ふる方法,

例. **nē scripseris**. '書くな'.

注意 否定詞 **nē** に命令法の形を加へて禁止を表はす方法は, 只法律文か詩歌で發見されるばかりである.

【540.】 命令でも, 禁止でも, 三人稱では, 單數, 複數何れも, その命令法の形, 或は **ne** + 命令法の形の代りに, 普通は接續法現在の形の動詞を使用する. 一人稱では常に接續法現在の形の動詞を使ふ. 否定詞は **nē** である.

【541.】 次に命令, 要求, 禁止の最も普通な形の例を示さう, (一人稱の例はあげない).

	肯 定	否 定
二人稱單數	dā. (汝)與へよ.	{ nē dederis. (汝)與ふるな. nōlī dāre. (汝)與へんと欲するな. (=與ふるな.)
二人稱複數	dāte. (汝等)與へよ.	{ nē dederitis. (汝等)與ふるな. nōlite dāre. (汝等)與へんと欲する な. (=與ふるな.)
三人稱單數	det. (彼)與へよ.	nē det. (彼)與ふるな.
三人稱複數	dent. (彼等)與へよ.	nē dent. (彼等)與ふるな.

## 【542.】 次の羅句文を譯せ.

1. Rogabimus quot homines occisi sint.
2. Ne dixeris patrem Romam vespere ire.
3. Amet fratrem ut semper beatus sit.
4. Audi quid Socrates ille dicat.
5. His rebus cognitis rogabam num in eadem sententia maneret.
6. Ne feceritis talia mala, nam dei semper nos vident.
7. Venite domum meam, ut oratorem audiatis.

## 【543.】 次の文を羅句語に譯せ.

1. 彼は此の書物を読むために家の内に留まつた.
2. 汝はこのやうな悪い事を云ふな.
3. 汝の友人が勤勉になるために忠告せよ.
4. 我等は敵軍を破るために勇敢に戦ふたであらう.
5. 汝等は彼が誰であるか知らない.

## CX. 望む (sperō), 及び約束する (promittō, polliceor) に就て.

### 【544.】 範例.

1. Promittit sē ventūrum esse.<sup>1)</sup> ‘彼は來ると約束する’.
2. Sperō mē Rōmae mansūrum esse.<sup>1)</sup> ‘私はローマに留まることを望む’.
3. Sperō reginam tibi creditūram esse.<sup>1)</sup> ‘私は女王が汝を信ずることを期待する’.
4. Sperō tē domi esse. ‘私は汝が家にをることを望む’.
5. Sperō tē jam rediisse. ‘私は汝が已に歸つたことを望む’.

【545.】 文章法 LI. Promittō は其の意義が常に未來に關係してをるから、いつも未來不定法が後に來る。Sperō は其の意義に従ふて、現在不定法、未來不定法、完了不定法の内、何れが後に來ても差支ない。

注意 此れ等の不定法の主語(對格の形の)は必ず常に表はされなければならぬ。

### 【546.】 次の羅句文を譯せ.

1. Promittit se cras in Galliam profecturum: sperat se Haeduos victurum.
2. Promiserunt se nihil dicturos. Non eis licet tibi nomen dicere.

1) 此れ等の esse は略す事ができる。

3. Sperasne matrem jam epistulam legisse?
4. Si me rogabis quid sperem, respondebo me sperare Gallos victum iri.
5. Regina speravit se hostes victuram esse.
6. Fratres his de rebus certiore facto, promisit pater se celeriter profecturum.
7. Ragas me, num promiserim me longam epistulam scripturam esse.

### 【547.】 次の文を羅句語に譯せ.

1. 私は汝が明日家に留まることを望む.
2. 彼は私の留守中に長い手紙を書くことを約束した.
4. 汝は兄を見るために數日以内に町へ來ることを約束するか.
4. 私の弟は妹が已に出發したことを望んだ.
5. 汝は教師が今宅に居る事を望むか.

## CXI. Tē Ducem Facimus.

### 【548.】 範例.

1. Rōmānī Cicerōnem cōsulem fēcērunt. ‘ローマ人等はキクローを執政官にした’.
2. Cicerō cōsul ā Rōmānīs factus est. ‘キクローはローマ人等から執政官にされた’.

【549.】 文章法 LII. ‘する’ (faciō), ‘選ぶ’ (creō), ‘稱する’ (vocō), ‘顯す’ (manifestō), 及び其の外此れ等と同義或は類義の多くの他動詞は, 能相の形では對格の形の直接目的語の外に對格の形の述語的目的語をもつことができる. 而して若し所相の形に變る時には, 此れ等二つの對格の形の目的語は主格の形の主語と述語的主語とになる.

【550.】 普通二つの對格の形の目的語を取る他動詞は次のものである.

creō, ‘私が選ぶ’, appellō, nōminō, vocō, ‘私が稱する, 呼ぶ’,

faciō, ‘私がする’, manifestō, ‘私が顯はす’.

【551.】 次の羅句文を譯せ.

1. Ille agricola a civibus homo optimus appellatur.
2. Ciceronem et Antonium consules fecerunt.
3. Romani Galbam ducem creaverunt et summa celeritate profecti sunt.
4. Urbem condidit, quam a suo nomine Romam jussit nominari.
5. Spero me, patre mortuo, regem factum iri.
6. His rebus cognitis, milites me ducem fecerant.
7. Quaesivi uter fratrum Quintus nominaretur.

【552.】 次の文を羅句語に譯せ.

1. 彼は彼が建設した町をローマと稱へた.
2. 私はかの忠實な男子供を我が子とするだらう.
3. 私の弟は Virgilius と呼ばれた.

4. この小女は女王の娘と稱へられた.

5. かの勇敢な我が友は市民から將軍に選ばれた.

【553.】 文例. XIX. Sertorius et Cervae.

Sertorius vir acer egregiusque dux et utendi regendique exercitus peritus fuit. Is in temporibus difficillimis et mentiebatur ad milites, et litteras compositas pro veris legebat, et somnia simulabat, si quid istae res eum apud militum animos adjuvabant. Illud adeo Sertorii nobile est: Cervae alba, pulcherrima simul et celerrima, a Lusitano ei quodam dono data est. Hanc sibi datam divinitus, et instinctam Dianae numine esse, et colloqui secum, et docere quae utilia factu essent, omnibus persuadebat. Si quid durius volebat militibus imperare, a cervae sese monitum praedicabat. Id cum dixerat, universi tamquam si deo libentes parebant. Ea cervae quodam die, cum incursio esset hostium nuntiata, festinatione ac tumultu consternata in fugam prorupit, atque in palude proxima delituit, et postea frustra requisita periisse credita est. Neque multis diebus post inventam esse cervam Sertorio nuntiatur. Tum qui nuntiaverat jussit tacere, praecepitque ut eam postero die repente in cubiculum immitteret. Postridie igitur praestantibus amicis dixit: “Visum mihi est in quiete cervam quae perierat ad me reverti, et, ut prius consuevit, quod opus est facto docere.” Tum servo significat. Cervae missa in cubiculum Sertorii introrupit; admirati omnes clamorem sustulerunt.

## CXII. Multa Mē Rogāvit.

【554.】 *Id, hoc, idem* 等のやうな多くの中性代名詞, *unum, multa, omnia* 等のやうな若干の中性形容詞(名詞となつたもの)等は, 眞の名詞では用ひられる事のできない場所に, 屢々動詞の目的語として使用せられる. それであるから, *hoc gaudeō*, '私は此れを悦ぶ', は正しい文であるが, *hoc* といふ中性代名詞の代りに或る名詞例へば *pax* を使ふて, *pācem gaudeō*, '私は平和を悦ぶ', は正しい文ではない. *Multa mē rogāvit*, '彼は私に澤山の事を尋ねた', は正しいが *Pecuniam mē rogāvit*, '彼は私に金錢を求めた', は正しくない. (*Pāce gaudeō. Pecuniam ā mē rogāvit.*)

【555.】 次の羅句文を譯せ.

1. Dux hostium omnia eum rogavit, ut nocte ad oppidum veniret.
2. Hoc gaudeo te, fratre absente, domi mansurum promississe.
3. Pater fraterque major idem gavisus sunt.
4. Hoc unum me monuerunt, ne ab illis pessimis civibus nocerer.
5. Hoc enim spero me urbem, duos jam annos obsessam, capturum.
6. Quid tu puerum docuisti?—Artem belli gerendi eum docui, ut patriam defendere posset.
7. Pauca me rogaverunt. Dixi fratrem consulem nominaturum.

【556.】 次の文を羅句語に譯せ.

1. 彼は屢々私に同じ質問をしてそれを悦んだ.
2. 彼等が私に此の一つの忠告を與へるだらう.
3. 汝等は小女に何を手に持つか問ふた.
4. 我等はゲルマニア人等の風俗に就いて澤山知つてをる.
5. 私は汝に只此の一つの忠告を與へた.

## CXIII. 冗長な活用

(Conjugātiō Periphrastica.)

【557.】 I. 第一種又は能相的の冗長な活用は, 動詞の未來能相分詞と, 動詞 *sum* 又は其の種々な活用の形とを一所に使用して作られる. *amō* の一人稱單數の形で例を示すと,

	直 説 法	接 續 法
現 在	<i>amātūr-us, (-a, -um) sum,</i> 私は將に愛さうとする.	<i>amātūr-us, (-a, -um) sim,</i>
過 去	<i>amātūr-us, (-a, -um) eram,</i> 私は將に愛さうとした.	<i>amātūr-us, (-a, -um) essem,</i>
未 來	<i>amātūr-us, (-a, -um) erō,</i> 私は將に愛さうとするだらう.	
完了過去	<i>amātūr-us, (-a, -um) fui,</i> 私は將に愛さうとした.	<i>amātūr-us, (-a, -um) fuerim,</i>

	直 説 法	接 續 法
全分過去 未來完了	amātūr-us, (-a, -um) fueram, 私は將に愛さうとした。 amārūr-us, (-a, -um) fuerō, 私は將に愛さうとしたらう。	amātūr-us, (-a, -um) fuissem,
	不 定 法	
現 在 完 了 未 來	amātūr-us, (-a, -um) esse, 將に愛さうとする。 amātūr-us, (-a, -um) fuisse, 將に愛さうとした。 amātūr-us, (-a, -um) fore, 將に愛さうとするだらう。	

- 例. 1. *Quisquam dubitat quid virtute perfecturus sit?* '誰か彼が勇氣で、何事を仕遂げんとするかを疑ふか'。  
2. *Sciēbam quid facturus esses.* '私は汝が何をせんとして居つたかを知つていた'。

【558.】 ii. 第二種 或は所相的の冗長な活用は、所相的形容詞と動詞 *sum* 又はその種々な活用の形との結合で作らる。*amō* の一人稱單數の形で例を示すと、

	直 説 法	接 續 法
現 在	amand-us, (-a, -um) sum, 私は愛されるべきである。	amand-us, (-a, -um) sim,
過 去	amand-us, (-a, -um) eram, 以下略する。	amand-us, (-a, -um) essem,

	直 説 法	接 續 法
未 來 完了過去 全分過去 未來完了	amand-us, (-a, -um) erō, amand-us, (-a, -um) fuī, amand-us, (-a, -um) fueram, amand-us, (-a, -um) fuerō,	amand-us, (-a, -um) fuerim, amand-us, (-a, -um) fuissem,
	不 定 法	
現 在 完 了 未 來	amand-us, (-a, -um) esse, amand-us, (-a, -um) fuisse, amand-us, (-a, -um) fore,	

注 意 第二種冗長活用に就ては CVIL を見よ。

【559.】 次の羅句文を譯せ。

1. *Maxima diligentia adhibenda erat, ne hostes nocte Romam venirent.*
2. *Multa me rogaturus eris, ut scires ubi amicus heri fuerit.*
3. *Pater venturus fuit, ut reginam Italiae videret.*
4. *Milites duci adhortandi fuerunt.*
5. *Verba oratoris tanta cura audituri sumus, ut omnia de his rebus sciamus.*
6. *Pater dixit matrem cras rus ituram fore.*
7. *Utendum nobis est occasione.*

【560.】 次の文を羅句語に譯せ。

1. 各人は各々自分の判断を用ふべきである。

2. 農夫が將に畑を耕やさうとした。
3. 彼は今日長い手紙を書かねばならない。
4. 女王は軍隊を見るために將にローマへ來ようとする。
5. 將軍が將に陣營を動かさうとした。

### CXIV. Aliquid Cibi.

【561.】 或る形容詞(名詞となつたもの)又は代名詞等は、之れに屬格の形の名詞がついて、中性單數主格又は對格(此の二つの格より外の格はいけない)の形で使用せられる。

例へば. ‘或る食物’, *aliquid cibi*; ‘どんな報知か’, *quid novi P*; ‘どれ程澤山の金錢か’, *quantum pecuniae P*; ‘善い何物も……ぬ’, *nihil boni*; ‘澤山の樂’, *multum voluptātis*; ‘一層大きな苦痛’, *plus dolōris*; ‘一層少量の酒’, *minus vini*.

【562.】 次に示す例のやうな場合には、羅句語は屬格の形の名詞を使用しない。

‘櫛の頂上’, *summa quercus*, ‘夜の真中’, *mediā nocte*, ‘山の麓’, *imus mōns*, ‘ブリタンニア島’, *insula Britannia*, ‘カプア市’, *urbs Capua*. (英語等と異なつて居ることに注意をせよ.)

【563.】 *Quis, quid* 等は *num, nō sī* 等の後に使用せられる時には、‘或る’, ‘或る人’ 或る物’ の義である。

【564.】 次の羅句文を譯せ。

1. *Nihil boni fecit, nihil iusti.*
2. *Si quid pecuniae in urbe est, dux gaudebit.*
3. *Responderunt se multum cibi habere, nihil vini.*
4. *Audivistine aliquid novi de adventu hostium?*
5. *Dixit se aliquid negoti in imo monte habere, negotio confecto in hortum se venturum. Spero eum mox venturum.*
6. *Milites, multo vino reperto, finem fecerunt incendendae urbis.*
7. *Nihil pulchrius est quam urbs Neapolis.*

【565.】 次の文を羅句語に譯せ。

1. 多くの人々は澤山の樂をもたない。
2. 山の麓にゲナーファといふ町がある。
3. 此の悪い子供は善い事を少しもしない。
4. 私は彼れの父にどれ程澤山の穀物を奴僕に與へたか問ふた。
5. 櫛の頂に小鳥の巢が二つある。

### CXV. 述語として用ひられて所有、本分、又は性質等を示す屬格の形の名詞。

【566.】 範例。

1. *Quae patris fuērunt, Balbi fiunt.* ‘バルブスの父



の(所有物)であつた物等は、バルプスの(所有物)になる’。

2. **Patris est filium monēre.** ‘子息を訓戒する事は父の(本分)である’。
3. **Sapientis est tempori cedere.** ‘情況に譲るのは賢人の(方法)である’。
4. **Summae virtūtis est in mediōs hostēs impetum facere.** ‘敵の真中を攻撃するのは大勇の(標)である’。
5. **Nōn meum est punire filium tuum.** ‘汝の子息を罰するのは私の(仕事)でない’。

【567.】 文章法 LIII. 羅句語の名詞の屬格の形は、屢々或る者(物)の所有、本分、義務、標、性質等を示すために使用せられる。

注意 時には、此の種の屬格の代りに所有代名詞を使用する事がある。(§ 566. 5.)

【568.】 次の羅句文を譯せ。

1. **Patris est filium monere, ne pigram vitam agat.**
2. **Num tu meum esse putas tibi, turpissimo homini, subvenire?**
3. **Ego autem puto victoris esse parcere, victi parere.**
4. **Quae fratris fuerant, fili ejus fiebant.**
5. **Stulti est me talia rogare.**
6. **Servorum fidorum est dominum de omnibus rebus certiore facere.**
7. **Num sapientis est Baebum, justissimum hominem, accusare?**

【569.】 次の文を羅句語に譯せ。

1. 小事を褒めるは女子の事である。
2. 斯かる事をするは彼の性質でない。
3. 被征服者の所有物は征服者の所有物である。
4. 人々を欺くが演説者の本領であるか。
5. このやうな悪人共を罰するのは裁判官の義務である。

CXVI. ‘若し彼が話せば’ (if he speaks), 及び ‘彼が話す時に’ (when he speaks), に就て。

【570.】 範例。

1. ‘若し彼が話せば、他の人々は黙する’。(If he speaks, the rest keep silent.) **Si loquitur, ceteri tacent.**
2. ‘若し彼が話せば、私は聞くであらう’。(If he speaks, I will listen.) **Si loquētur, audiam.**
3. ‘若し彼が話せば、彼は罰せられるだらう’。(If he speaks, he will be punished.) **Si locūtus est, poenam dābit.**

【571.】 文章法 LIV. 羅句語は、日本語或は英語等よりは、時稱の用法が正確で、上例の示すやうに其の時稱の意義と形とが常に一致するのである。

注意 ‘彼が話す時に’に就ても同様である。(§ 574. § 575.)

【572.】 次の羅句文を譯せ.

1. Si ab hostibus urbis victus erit, condemnabitur.
2. Si litteras ad matrem scribis, roga quando sit reditura.
3. Flumen transibit, cum satis militum habebit, ut hostes adoriatur.
4. Cum epistulam scripsero, in hortum veniam.
5. Si dicet talia verba, a patre culpabitur.
6. Cum ver adest, aves multae in horto meo canunt.
7. Si cras aliquid triste audiveris, patrem non certioorem facies.

【573.】 次の文を羅句語に譯せ.

1. 若し私が黙せば彼の悪い市民が將軍となる.
2. 彼が田舎へ來た時に彼は手紙を書くだらう.
3. 若し彼が明日來れば私は悦ぶだらう.
4. 彼等は汝を見る時に怒るだらう.
5. 若し汝がかの有名な詩人の歌を聞けば汝は褒めるだらう.

## CXVII. 接續詞 cum で引出された 時を示す句に就て.

【574.】 範例.

1. Cum ille loquitur, tacēmus. ‘彼が話す時には、我等は黙する’.

2. Veniam, cum poterō. ‘私が出来る時に私は來るだらう.’
3. Cum Caesar in Galliam vēnit, Aedui Rōmānis amici erant. ‘ケーサルがガリアへ來た時には、アエズィーはローマ人等に親切であつた’.
4. Cum epistulam scripserō, ad tē veniam. ‘私が手紙を書いた時に、汝の所へ來るだらう.’
5. Cum frūmenti cōpia in agris esset, exercitus profectus est. 野に穀物が澤山あつた時に、軍隊は出發した’.
6. Cum haec dixisset, profecti sumus. ‘彼が此の事を言ふた時に、我等は出發した’.
7. Cum ille cantābat, irascēbar. ‘彼が歌ふ時は何時も、私は怒つた.’

【575.】 文章法 LV. cum で引出された時を示す附屬句では、若し其の句の動詞が 現在, 未來, 完了過去, 未來完了の四つの時稱の内の一の時稱の形である時には、直説法の適當な時稱の形を使用する；若し過去か全分過去かの形である時には、接續法の適當な時稱の形を使用する。如何な時稱を使用すべきであるかに就ては §537. を見よ。但し第七例が示すやうに、cum の意義が‘何々の時は何時も’の義である時には、どの時稱でも常に直説法の適當な時稱を使用する。

【576.】 次の羅句文を譯せ.

1. Cum frater dormit domi, in agro laboro.

2. Cum rosam viderat, incipere ver arbitrabatur.
3. Cum ei fabulam narrarem, subito ridebat.
4. Cum epistulam scripseris, servum Romam ad patrem mitte.
5. Milites, cum oppidum ceperunt, omnes incolas interfecerunt.
6. Ea quae secuta est aestate, cum Rhenum flumen transisset, in fines Germanorum iter fecit.
7. Faciam cum amicus veniet.
8. Cum eam videbat, vituperabat.

【577.】 次の文を羅句語に譯せ。

1. 我等が森に居る時に汝等は家に居る。
2. 汝は兄弟を見た時に田舎へ行くだらうか。
3. 汝が書物を讀んでをつた時に私は手紙を書いた。
4. 彼は敵を破つた時に三日間市府に留まつた。
5. 私がこの話をする時にはいつも母は笑ふ。

### CXVIII. 原因又は讓歩を示す cum 句及び qui 句.

【578.】 範例.

1. Cum amici adsint, gaudemus. '友人等が居るから、我等は悦ぶ'.

2. Cum fortiter pugnarent, tamen non vicērunt. '假令、彼等は勇敢に戦ふたけれども、勝たなかつた'.
3. Dux, qui nihil ante prōvidisset, trepidāre coepit. '將軍は前以て何事も氣付かなかつたので、驚き始めた'.

【579.】 文章法 LVI. cum 又は qui で引出された、原因 或は讓歩を示す附屬句の動詞は、其の時稱がどの時稱であるにしても、常に接續法の適當な時稱の形を使用する。

【580.】 次の羅句文を譯せ。

1. Et cum ea ita sint, tamen pacem faciam.
2. Cum hostes vicero, statim in Hispaniam proficiscar.
3. Ceres frumenta invenit, cum antea homines glandibus vescerentur.
4. Cum vita sine amicis metus plena sit, ratio ipsa monet amicitias comparare.
5. Quae cum ita sint, egredere ex urbe.
6. Cum Romae fuisset, hanc epistulam scripsit.
7. Amicus, qui de his rebus nihil novisset, terrebatur.

【581.】 次の文を羅句語に譯せ。

1. 假令此の事はさようであつても我等は彼を愛する。
2. 何事も豫期しなかつたから娘は驚いた。
3. 哲學は吾々に澤山の有益な事を教へるから吾々は哲學者を敬愛する。
4. 私は汝を來るやうにすゝめることが出来ないから私自身が行く。
5. 兵士等は敵を恐れたけれども町に留まつた。

## CXIX. 奪格別句と cum 句.

## 【582.】 範例.

1. 此れをして彼は家に歸つた'. (Having done 'this he returned home.)
2. '彼は此れをした時, 家に歸つた'. (When he had done this, he returned home.)

【583.】 上記二つの日本文或は英文は, 其の文の構成法に多少の差異はあるけれども, 其の意義は兩方共同様である. 之れと同じに次の二つの羅句文は其の意義が同様である.

1. **Hāc rē confectā, domum rediit.** (奪格別句.)
2. **Cum hanc rem confēcisset, domum rediit.** (cum 句.)

## 【584.】 次の羅句文を譯せ.

1. Tullio loquente, tacendum est.
2. Cum Tullius loquitur, clamorem tollere nemo audet.
3. Oratione mea habita, cives bellum diutius gerere nolent.
4. Cum orationem fecero, domum redibo, ut epistulam scribam.
5. Cum urbs capta erit, aliquantum vini militibus dabitur.
6. Urbe capta, milites sperant se aliquid praemi accepturos.
7. Cum viatorem interfecisset, in mediam silvam fugit.

【585.】 次の文を羅句語に譯せ. (cum 句と奪格別句と兩様に).

1. 市府を占領した時に軍隊は伊太利へ歸るだらう.
2. 私の睡眠中に彼等は敵に降参した.
3. 私が執政官である時に市民等は平和を期待する.
4. 將軍が任命された時に戦争の用意をすべきである.
5. 父の留守中弟は田舎へ行くだらう.

【586.】 文例. XX. **Concio Alexandri apud Milites.**

Alexander cum ad Hypasin fluvium processisset, non modo transire voluit, sed ad Gangen, maximum totius Indiae flumen, pergere; postremo totius orbis imperium appetere. Sed, veritus ut longius progredi vellent, vocatis militibus, ad hunc modum disseruit: "Non ignoro, milites, multa quae terrere vos possent ab incolis Indiae per hos dies de industria esse jactata. Sed omnia fama tradit majora vero, neque nos fabulae deterrere possunt. Quamdiu vobiscum in acie stabo, nec mei nec hostium exercitus numero. Vos modo animos mihi plenos alacritatis ac fiduciae adhibete. Non in limine operum laborumque nostrorum, sed in exitu, stamus. Pervenimus ad solis ortum et Oceanum; inde victores, perdomito fine terrarum, revertemur in patriam. Majora sunt periculis praemia; dives eadem et imbecillis regio est. Itaque non tam ad gloriam vos duco quam ad praedam. Per vos gloriamque vestram oro quaesoque, ne humanarum rerum terminos adeuntem alumnum commilitonemque vestrum, ne dicam regem, deseratis. Date hoc precibus meis et tandem obstinatum silentium rumpite. Ubi est ille clamor, alacritatis vestrae index? Ubi ille meorum Macedonum

vultus? Non agnosco vos, milites; nec agnosci videor a vobis. Surdas jamdudum aures pulso; aversos animos et infractos excitare conor". Cum illi in terram demissis capitibus tacere perseverarent, "Nescio quid", inquit, "in vos imprudens deliqui, quod me ne intueri quidem vultis. In solitudine mihi videor esse desertus; destitutus sum; hostibus deditus. Sed solus quoque ire perseverabo. Scythae Bactrianique erunt mecum, hostes paulo ante nunc milites nostri. Mori praestat quam precario imperatorem esse. Ite reduces domos; ite deserto rege ovantes!" Nec sic quidem ulli militum vox exprimi potuit. Stabant oribus in terram defixis lacrimisque manantibus. Rex tandem, victus a militibus, redire constituit.

### CXX. 設 若 文.

【587.】一文で、其の内に二つの異なる部分—即ち **si** ‘若し……なれば’, **nisi** ‘若し……ぬなれば’, ‘にあらねば’ 等で引出された **條件文** と、其の條件の **断定を示す文** とを含む文を **設若文** と稱へる。條件を示す部分を **protasis** (條件文) と稱へ、結果を示す部分を **apodosis** (結題) と稱へる。

【588.】現在と過去.

a. 條件文中に、其の條件で示されてをる事が真であるか否かに就ては、何事も少しも含まれて居ないとき、

範例.

1. **Si hōc facit, bene est.** ‘若し彼が此れをしてをるなればよろしい’. (If he is doing this, it is well.)
2. **Si hōc faciēbat, bene erat.** ‘若し彼が此れをして居たなればよろしかつた’. (If he was doing this, it was well.)
3. **Si hōc fēcit, bene fuit.** ‘若し彼れが此れをしたなればよろしかつた’. (If he did this, it was well.)

【589.】文章法 LVII. 現在又は過去の事に關係してをつて、然かも其の條件文の中には、其の條件が真であるか否かに就ては、何事も包含していない設若文は、其の條件文にも、結題にも、**直説法** (或は時々**命令法**)の動詞の形を使用する。

【590.】現在と過去

b. 條件文中に、其の條件で示されてをる事が真でないことを含んでをるとき:

範例.

1. **Si hōc faceret, bene esset.** ‘若し彼が此れをして居るなればよろしからうが’. (If he were doing this, it would be well.)
2. **Si hōc fēcisset, bene fuisset.** ‘若し彼が此れをしたなればよろしかつたであらうが’. (If he had done this, it would have been well.)

【591.】文章法 LVIII. 現在又は過去の事に關係してをつて、然かも事實に反對の事を示す設若文は、條件文にも結題にも、**接續法**の動詞の形を使用する、而してこのやうな場合で

は過去接続法の形は現在に關係し、全分過去接続法の形は過去に關係する。

【592.】 未來.

a. 未來の事をよほごありありと示すとき, (More vividly, probable):

範例.

1. **Si hōc faciet, bene erit.** ‘若し彼が此れをするなればよろしからう’. (If he does (=shall do) this, it will be well.)
2. **Si hōc fēcerit, bene erit.** ‘若し彼が此れをしたなればよろしからう’. (If he does (=shall have done) this, it will be well.)

【593.】 未來.

b. 未來の事をあまりありありと示なさいとき, (less vividly, possible):

範例.

1. **Si hōc faciat, bene sit.** ‘若し彼が此れをするなればよろしからう’. (If he should do this, it would be well.)
2. **Si hōc fēcerit, bene fuerit.** ‘若し彼が此れをするなればよろしからう’. (If he should do this, it would be well.)

【594.】 文章法 LIX. 未來の事に關係する設若文は、若し其の事をよほど明瞭に、多分ある事として示す場合には、其の時稱の意義に従ふて、條件文では、未來直説法か未來完了直説法 (或は時々命令法) かの動詞の形を、結題では未來直説法

を使用する。若し其の事を不明瞭に、然かもあり得る事として示す場合には、條件文でも結題でも、現在接続法か完了過去接続法かを何れでも殆ど同義で使用する。

【595.】 ‘若し……ぬなれば’ (if……not) は **si……nōn** で譯さずに常に **nisi** で譯する。

【596.】 次の羅句文を譯せ.

1. Dux jubet, miles paret; si non paret, poenam dat.
2. Si frater heri Romam venisset, consulem vidisset.
3. Si qui deus illum moneat, ut hostibus me dedat, deo non pareat.
4. Nisi Gallos vincerem, non laudarer.
5. Si talia scripseris, mecum vespere venire licebit.
6. Si quando multitudinem vidit, orationem habere voluit.
7. Si Athenas venerit, reginam pulchram videris.

【597.】 次の文を羅句語に譯せ.

1. 若し汝等が來ねば私は獨りで市府へ行く.
2. 若し彼が家の内に居れば私は悦ぼうに.
3. 若し農夫が熱心に耕すなれば私は彼を褒めるだらう.
4. 若し私の母が生きて居るなれば私は幸福であらうが.
5. 若し將軍が直ぐ來たなれば我等は勝つたであらうが.

【598.】 文例. XXI. **Alexander et Parmenio.**

Dareus, Persarum rex, decem milia talentorum Alexandro

dare voluit, si Asiam secum dispertire volebat. Alexander autem ei respondit, "Nisi orbis terrarum duos soles tolerare potest, duos reges Asia non tolerabit". Parmenio, qui unus ex amicis Alexandri erat, Darei proposito audito, "Ego", inquit, "si Alexander essem, hoc propositum acciperem". Cui Alexander: "Et ego, si Parmenio essem, acciperem".

### CXXI. 接續詞 *ut* で引出される 句を後にもつ若干の動詞.

#### 【599.】 範例.

1. **Imperō tibi ut faciās.** '私は汝がする事を命ずる'.  
(*Jubeō* は對格と不定法をとる).
2. **Rogō tē ut faciās.** '私は汝がする事を求める'.
3. **Hortor tē ut faciās.** '私は汝がする事を勵ます'.
4. **Moneō tē ut faciās.** '私は汝がする事を忠告する'.
5. **Mihi cūrae est ut faciam.** '私はしようと心掛ける'.

【600.】 文章法 LX. 命令, 乞求, 忠告, 説服, 獎勵等, 又は此れ等と同義の動詞又は短句の後では, 屢々 *ut* 或は *nō* で引出された文を, 目的句として使用する, 而して此の句の動詞はいつも接續法の形である. 時稱の關係は § 537. で示した.

#### 【601.】 次の羅句文を譯せ.

1. Tullio persuadere debuisti, ut Lutetiam nobiscum iret.

2. Postulavit, ne cum Helvetiis aut cum sociis eorum bellum gererent.
3. Mihi curae est, ut tibi persuadeam me duce nihil esse periculi.
4. Illud unum vos oro, judices, ne putetis me haec amore pecuniae fecisse.
5. Ita factum est, ut nemo tibi crederet.
6. Imperator militibus imperat, ut statim veniant.
7. Gajus, unus ex amicis meis, dixit aliquem milites hortatum esse, ut ducem interficerent.

#### 【602.】 次の文を羅句語に譯せ.

1. 私は彼の父が來ないことを心配する.
2. 我等は彼が此の事をする事を命ずる.
3. 私は彼が此の意見を保持することを勵ます.
4. 彼は汝が彼を信ずることを願ふ.
5. 汝は私が汝の書物を讀む事を勧めなかつたか.

### CXXII. 關係代名詞 *quī* (*quae*, *quod*) で引出された句で使はれる接續法.

#### 【603.】 範例.

1. **Galli lēgātōs misērunt quī pācem peterent.** 'ガリア人等が平和を乞ふために使節を送つた'. (= *ut* 句).

2. **Quis est tam ineptus, qui hōc credat?** ‘誰が此の事を信ずる程愚であるか’. (=ut 句).
3. **Nihil est, quod tē dōlectāre possit.** ‘汝を悦ばすことができる物は一つもない’.
4. **Ō quanta vis vērītātis, quae sē defendat.** ‘真理は自分を防禦するから、その力は如何に大きいことよ’. (=cum ea 句).

【604.】 文章法 LXI. 関係代名詞で引出されて、或る動詞又は名詞の目的、結果、性質或は理由等を示す附屬句では、接續法の形の動詞を用ゐる。時稱の関係は §537. で示した。

【605.】 次の羅句文を譯せ。

1. Marcus erat prudens, qui vinum non gustaret.
2. Nihil habeo, quod te moneam; quod tibi optimum videbitur, faciendum erit.
3. Quis est, qui suam domum non amet?
4. Caesar, acie instructa, equitatum misit, qui hostium impetum sustineret.
5. Ennius erat imprudens, qui se non esse domi diceret.
6. Neque erat tantae multitudinis quisquam, qui morari vellet.
7. Cum domo abire constituissem, epistulam scripsi, quam legeres (又は legis).

【606.】 次の文を羅句語に譯せ。

1. 何人でも萬事を知る程賢くはない。
2. 兵士等は戦ふことを欲しなかつたから譴責せられた。

3. 私は汝の書物を讀むために私の子を汝へ送る。
4. ケーサルが伊太利に居つたと信ずる人々もあつた。
5. 太陽の光線をうけない人があるか。

### CXXIII. 目的句を引出すに使用せられる quō.<sup>1)</sup>

【607.】 範例。

1. **Haec lēx dāta est, quō malefici deterrentur.** ‘悪人等が恐れるために、此の法律が與へられた’。
2. **Hōc mihi dixit, quō facilius intellegerem.** ‘私が一層容易く了解するために、彼は此の事を私にいふた’。

【608.】 文章法 LXII. quō (否定は quō nē) は目的句を引出すために、ut eō の代りに使用せられるもので、  
a). ‘それで……ために’、b). 若し比級の副詞と共に使用せられる時には‘それで……(一層)…ために’の義に使用せられる。而して quō で引出された目的句の動詞は接續法の形である。時稱の関係は §537. で示した。

【609.】 この理由で、次の二文は其の意義が同一である。

1. **Hōc mihi dixit, quō facilius intellegerem.**
2. **Hōc mihi dixit, ut eō facilius intellegerem.**

【610.】 次の羅句文を譯せ。

1) 関係代名詞 qui の奪格単数。



1. Multos servos emit, quo pigriorem vitam agat.
2. Caesar milites cohortatus est, quo animo fortiore essent.
3. Pater servum Romam misit, quo ne filius ab oratore deciperetur.
4. Quo facilius intellegere possitis, quid sit faciendum, ea quae vidi dicam.
5. Opera Virgilii oportet te magna cura legere, quo meliora poemata scribas.
6. Domum suam pulchriorem faciendam curavit quo facilius venderet.
7. Puellae reginae rosas multas dant, quo ne ab ea culpentur.

【611.】 次の文を羅句語に譯せ。

1. 私は汝が一層容易く學ぶために汝を助けるだらう。
2. 母は娘が悪くならないために屢々彼女を忠告した。
3. 彼は汝が悪人を罰するために此の事を汝に告げた。
4. 汝は一層長い手紙を書くために三時間家の内に留つた。
5. 我等は一層善良な生涯を送るために此れ等の悪人から去るだらう。

#### CXXIV. Quōminus と Nē に就て。

【612.】 範例。

1. Nihil mē impediit, quōminus scriberem. ‘何事も

私が書く事を妨げなかつた’。(Nothing prevented me from writing. 今少しく文法上の關係を明らかにすれば, Nothing prevented me that so (quō=ut eō) I might not (minus) write.)

2. Nōn recūsābō, quōminus epistulam legās. ‘私は汝が手紙を読む事に反對しないだらう。
3. Tuae lacrimae mē impediunt, nē plūra dicam. ‘汝の涙は私が此れ以上言ふ事を妨げる’。

【613.】 文章法 LXIII. 接續詞 quōminus 又は nē は impediō ‘私が妨げる’, recūsō ‘私が拒む’, 及び此れ等と類義の動詞, 即ち妨害, 拒絶等を示す動詞, 及び此れ等の動詞と類義の句の後に用ひられる, 而して quōminus 又は nē で引出された附屬句の動詞は, 接續法の形である。時稱の關係は § 537. で示した。quōminus は主句に或る否定詞がある場合に使用せられ (上例. 1. 2.), nē は主句に否定詞がない場合に使用せられる (上例. 3.)。

【614.】 quōminus の起りは次の二文を比較すれば明らかである。

1. Quō minus amētis hominem, narrābō ea quae fēcit. ‘私は汝が此の人を一層少し好むために, 彼がした事を汝に告げるだらう’。(That you may like the fellow less, I will tell you what he did.)
2. Nōn recūsō, quōminus amētis hominem. ‘私は汝が此の人を好む事に反對しない’。(I do not make objections in order that you may not like him.)

## 【615.】 次の羅句文を譯せ.

1. Quo minus periculi esset, victis imperavit, ut obsides darent.
2. Magni hostium clamores nostros impediunt, ne impetum facerent.
3. Clamores illorum me non impediunt, quominus amicam defendam.
4. Quo minus admiremini hominem, audite ea quae dico.
5. Verba magistri non talia fuerunt, quominus pueri pigri sint.
6. Quid sapienti potest obstare, ne beatus sit?
7. Aliquid mali eum impedit, ne miles fiet.

## 【616.】 次の文を羅句語に譯せ.

1. 何事が私がローマへ来る事を妨げるか.
2. 父の言が子息が怠惰になる事を妨げた.
3. 私は汝が私の歌を聞く事を拒絶しない.
4. 彼等は私が手紙を書く事に反対する事はできぬだらう.
5. 將軍の死が我等が戦を終る事を妨げるか.

## CXXV. Quin て就に.

## 【617.】 範例.

1. Nēmō est quin hōc sciat. '此れを知らぬ人はない'.  
(There is no one, who does not know this.)

2. Nihil causae est quin abeās. '汝が去らない理由がない'.
3. Nōn dubitō quin fēceris. '私は汝が其の事をした事を疑はない'.
4. Hōc dicere nunquam possum quin rideam. '私は笑はずに決して此の事を云ふことができない'.

【618.】 文章法 LXIV. quin は其の使用せられる場所によつて意義がちがう:

- (1.) 上の第一例が示すやうに、**關係代名詞** (主に主格男性) と**否定詞**との結合に等しい事があり、
- (2.) 外の三つの例が示すやうに**接續詞**であることもある. この (2.) のやうな場合には quin は **quī** (關係代名詞 **quī, quae, quod** の古い奪格の形) + **nē** であつて、'その方法で……ぬ' (in which way……not), 'その理由で……ぬ' (for which reason……not), 'その手段で……ぬ' (for which means……not), '何故に……ぬ' (why……not), 'どうして……ぬ' (how……not), 等のやうな意義をもつ. 而して quin は次に列挙するやうな否定文か、否定の義を含んでをる疑問文の後で使用せられ、其の句の動詞は**接續法**の形である. 時稱の關係は § 537. で示した.

【619.】 quin で引出された句を後にもつ詞或は句の若干を擧げよう:

facere nōn possum; fieri nōn potest.

nōn est; nēmō est; nihil est; nēmō est tam; nullum tempus intermittō.

nihil, nōn multum, paulum abest. (此の場合には quin を '事' (that) と譯する.)

nōn dubitō; nēmō dubitat; quis dubitat?; dubium nōn est. (此の場合にも quin を '事' (that) と譯する.)

【620.】 次の羅句文を譯せ.

1. Non dubito, quin mecum ire velit.
2. Dubium non erat, quin victoriam ex hostibus reportaturi essemus.
3. Fieri non potuit, quin urbs ab hostibus caperetur.
4. Nullum tempus Caesar intermisit, quin legatos mitteret.
5. Hujus orationem nunquam audio, quin admirer.
6. Nemo est, quin probum virum improbo praeferat.
7. Num quid causae est, quin tres dies ruri maneamus?

【621.】 次の文を羅句語に譯せ.

1. 彼は殆ど敵に捕へられようとした.
2. 私は彼を見ると彼の父を褒めずにはをられない.
3. 此の言を聞かなかつた者は一人もなかつた.
4. 私は汝が私の妹を見た事を疑はない.
5. 彼等が春伊太利へ行けない何の理由があるか.

## CXXVI. 恐怖を示す動詞の後の 句にある接續法.

【622.】 範例.

- |                         |                                                       |
|-------------------------|-------------------------------------------------------|
| 1. Timeō ut veniat.     | } '私は彼が來ない事を恐れる'.                                     |
| 2. Timeō nē nōn veniat. |                                                       |
|                         | } (I fear that he is not coming<br>或は will not come.) |
| 3. Timeō nē veniat.     |                                                       |
- '私は彼が來る事を恐れる'. (I fear that he is coming 或は will come.)

【623.】 文章法 LXV. 恐怖の義がある動詞は, ut 或は nē で引出された, 接續法の形の動詞がある附屬句を後にもつのである. 時稱の關係は §537. で示した. かゝる動詞の後では, ut は '.....ぬ事を' (that.....not), nē は '.....事を' (that.....) を意味する. 此の場合に ut の代りに 'nē nōn' を使用する事もできる.

注意 現在接續法は現在か未來か適當な方の時稱で譯する.

【624.】 次の羅句文を譯せ.

1. Vereor, ne hostes nos vincant.
2. Caesar verebatur, ut supplicium captivorum Gallis placeret.
3. Romani magnopere veriti sunt, ne Helvetii iter per provincias facerent.
4. Vereris, ut barbari eis parcent, qui ad oppidum ierunt.

5. Omnes putaverunt fore, ut urbs caperetur; nec quisquam erat, quin timeret, ne nostri vincerentur.
6. Legati timuerunt, ne frumentum toti exercitui praeberi non posset.
7. Timetis, ne malum consilium capiat.

【625.】 次の文を羅句語に譯せ。

1. 私は彼が市府を占領せなかつたであらうと恐れる。
2. 汝等は彼が汝等の計略を敵に告げる事を恐れた。
3. 彼等はあの善良な農夫が田舎へ居ない事を恐れた。(全過)
4. 彼は奴隷が娘を森で發見しない事を恐れるだらう。
5. 汝は女王が汝にアジアへ向けて出發せよと命令することを恐れるか。

### CXXVII. 接續詞 dum, quoad, donec で引出された附屬句に就て。

【626.】 範例。

1. Dum urbem obsidēmus, rex mortuus est. ‘我等が市府を攻圍して居つた間に、王が死んだ。(While we were besieging the city, the king died.)’
2. Dum tū aberās, nihil facere volēbat. ‘汝が不在中、彼は何事もする事を欲しなかつた。(While you were away, he would not do anything.)’

3. Expectāvi, dum abiret. ‘私は彼が去つた迄待つた。(I waited, until he went away.)’
4. Dum ille rediit, putāvimus tē Capuae esse. ‘彼が歸つて來た迄、我等は汝がカプアに居つたと思ふた。(Until he returned, we thought you were at Capua.)’

【627.】 文章法 LXVI. Dum 又は quoad が ‘何々の時の間に’ (While=in the course of the time that) の義である時には、主句の動詞の時稱が何であらうと、このやうな dum 又は quoad で引出された附屬句では常に 現在直説法の形の動詞を用ふる。(上例 1); けれども、若し ‘何々の時の間中 (while=throughout the time that) の義である時には、このやうな dum 又は quoad で引出された附屬句の動詞の時稱は、その意義に依つて 必要な直説法の時稱の形である(上例 2)。

【628.】 文章法 LXVII. ‘何々迄’ (till, until) の義の dum, quoad, donec は ‘其の時迄或事が起つた事’ 即ち ‘單に時の觀念ばかり’ を示す時には、それで引出された附屬句では、現在、完了過去、未來完了の直説法の形の内で、適當な動詞の形を使用する。(第四例); 若し dum 又は quoad (donec はそうでない) が、只時の觀念ばかりでなく、其れに ‘目的の觀念を加味して何々迄’ (till, until) の義で使用せられる時には、それで引出された附屬句では、現在、過去、全分過去の接續法の形の内で適當な動詞の形を使用する。(第三例)。

【629.】 次の羅句文を譯せ。

1. Dum redeas, hic manebo.
2. Cato, quoad vixit, virtutis laude crevit.

3. Cicero omni quiete se abstinuit, quoad Catilinae con-  
jurationem detexisset.
4. Dum haec geruntur, Caesari nuntiatum est hostes  
propius accedere.
5. Epaminondas, quum animadverteret mortiferum se  
vulnus accepisse, ferrum in corpore continiuit, quoad  
renuntiatum est vicisse Boeotos.
6. Patre absente, promittere non poteram.—mercator  
autem exspectare noluit, dum ille rediret.
7. Hoc feci, donec res mihi in manum traditur.

【630.】 次の文を羅句語に譯せ。

1. 父が眠つて居る間に汝は田舎へ行くか。
1. 彼等が王から手紙を受取る迄コリンツスに居れよ。
3. 此の勇敢な男は出来る間橋を防いだ。
4. 私がこの事を言ふて居つた間に彼は逃げんとした。
5. 兄が来る迄私は此の書物を読むだらう。

CXXVIII. Antequam,<sup>1)</sup> priusquam,<sup>2)</sup>  
postquam<sup>3)</sup> で引出された句に就て。

【631.】 範例。

1. **Ea postquam Rōmae audita sunt, timor omnēs**

1) 2) 3) 此れ等の字は時々 ante, prius, post と quam とが分離する事がある。

**invāsīt.** ‘其れ等の事がローマで聞かれた後、恐怖が  
凡ての人々を襲ふた’。

【632.】 文章法 LXVIII. 接續詞 **postquam** で引出され  
た附屬句の動詞は常に **直說法** の形である。

【633.】 範例。

1. **Antequam dē hāc rē dicō, dē mē pauca dicam.** ‘私  
は此の事に就て言ふ以前に、私に就て少し言はう’。
2. **Vir omnēs cruciātūs prius subībit, quam ā virtūtis  
viā dēflectat.** ‘この男は道德の道を離れるより前に、  
凡ての責苦を受けるだらう。(=この男は如何なる責  
苦を受けても徳義を捨てない)’。
3. **Fillōs convocāvit, antequam mortuus est.** ‘彼は  
死ぬる以前に、子息等と呼び集めた’。
4. **Caesar priusquam quidquam conarētur, Divitiacum  
vocāvit.** ‘ケーサルは何事か企てる以前に、ヂウィチ  
アクスを呼んだ’。
5. **Dux prius ad castra vēnit, quam aggerem exstruxis-  
sent.** ‘彼等が壘を築くより以前に、將軍が陣營へ來た’。
6. **Tempestās minātur, antequam surgat.** ‘暴風は起  
るより先に、其の徴候がある’。

【634.】 文章法 LXIX. 接續詞 **antequam** 或は **prius-  
quam** で引出された附屬句の動詞は、時には **直說法** の形の事  
があり、時には **接續法** の形の事がある。大體から見ると此の  
二語の一で引出した附屬句には、

1. 現在の直說法 又は 接續法の形。

- 2. 完了過去の直説法の形.
- 3. 過去又は全分過去の接続法の形.
- 4. 未完了の直説法の形を使用する.

注意 現在の直説法の形と接続法の形との區別は、唯、單に或る事が外の事より先であると云ふ事を示す時には直説法の形である、若し其の事が未來の事であつて、且つ疑はしい時、或は存しない時には接続法の形である。(但し、不定な一般的表示法では、接続法の現在の形を使用する、上例・6.)

【635.】 次の羅句文を譯せ.

- 1. Antequam de his rebus dico, de eo pauca dicam.
- 2. Postquam Caesar aciem instruxit, omnes hostes in unum locum convolverunt.
- 3. Hostes pulsi sunt, antequam urbem obsidione cingerent.
- 4. Cives prius se dediderunt, quam acies murum attigisset.
- 5. Decem post diebus quam Caesar in Italiam pervenit, legiones duae erant conscriptae.
- 6. Prius ad hostium castra pervenit, quam Germani quid ageretur sentire possent.
- 7. Ante videmus fulgurationem, quam sonum audiamus.

【636.】 次の文を羅句語に譯せ.

- 1. 兄が伊太利へ達するより先に凡ての事がせられた.
- 2. 父が手紙を書いた後私は田舎へ行くだらう.
- 3. 彼女が何事も言はない先に私は簡単に彼女の事を述べた.
- 4. 私が此の事を聞いた後直ぐローマへ使を送つた.
- 5. 悪人は悪事をする先に善人らしい風をする.

CXXIX. 願望, 哀求, 命令, 禁止等を示すに使用せられる接続法.

【637.】 範例.

- |                                                  |                                                                                                                                                                                                             |
|--------------------------------------------------|-------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|
| <p>1. (Utinam) pater<br/>mox adsit.</p>          | <p>‘父が直ぐ此處にをらん事を!’<br/>(May father be here (come) soon!)<br/>‘私は父が直ぐ此處にをらん事を望む’. (I hope father may be here (come) soon!)<br/>‘オー, 父が直ぐ此處にをらん事を’.<br/>(Oh, that father may be here (come) soon!)</p>        |
| <p>2. Utinam pater<br/>nunc adesset.</p>         | <p>‘父が今此處に居らん事を!’<br/>(Would that father were here now!)<br/>‘私は父が今此處に居る事を望む’.<br/>(I wish father were here now!)<br/>‘オー, 父が今此處に居らん事を’.<br/>(Oh, that father were here now!)</p>                           |
| <p>3. Utinam pater<br/>heri adfuis-<br/>set.</p> | <p>‘父が昨日此處に居つた事を!’<br/>(Would that father had been here yesterday!)<br/>‘私は父が昨日此處に居つた事を望む’. (I wish father had been here yesterday!)<br/>‘オー, 父が昨日此處に居つた事を’. (Oh, that father had been here yesterday!)</p> |

【638.】 文章法 LXX. 願望を表はすには *utinam* (オー.....事を! oh, that) といふ副詞を伴ふてをる, 又は此の副詞のない接續法の形の動詞を使用する. *utinam* は現在形の動詞では屢々略される事があるが, 他の時稱の動詞では殆ど略される事はない. 願望で使はれる否定詞は *nō* であつて *nōn* でない.

【639.】 文章法 LXXI. (1.) 直ぐか又は多少の時を経てか, 兎に角未來の事に關係のある願望は現在接續法の形の動詞で示される. 此の種類願望は遂げられる事も出来る. (上例. 1.)

(2.) 現在の事に關係のある願望で遂げられずに, 現在の事實に反對してをる願望は, 過去接續法の形の動詞で示される. (上例. 2.)

(3.) 過去の事に關係のある願望で遂げられずに, 過去の事實に反對してをる願望は, 全分過去接續法の形の動詞で示される. (上例. 3.)

【640.】 命令, 哀求, 禁止等の事は已に § 541. で説いたが, 今少し委しうに再出してみると,

		肯 定	否 定
單 數	一人稱	<i>moneam</i> , 私に忠告させよ (let me advise).	<i>nē moneam</i> .
	二人稱	<i>monē</i> , <i>moneās</i> , } 汝が忠告させよ (advise).	<i>nōlī monēre</i> . <i>nē monueris</i> .
	三人稱	<i>moneat</i> , } 彼が忠告させよ (let him advise). <i>monuerit</i> , } 彼が忠告すべきだ (he shall advise).	<i>nē moneat</i> . <i>nē monuerit</i> .

		肯 定	否 定
複 數	一人稱	<i>moneāmus</i> , 我等に忠告させよ (let us advise).	<i>nē moneāmus</i> .
	二人稱	<i>monēte</i> , 汝等が忠告させよ (advise).	<i>nōlite monēre</i> .
	三人稱	<i>moneant</i> , } 彼等が忠告させよ (let them advise). <i>monuerint</i> , } 彼等が忠告すべきだ (they shall advise).	<i>nē moneant</i> . <i>nē monuerint</i> .

注 意 命令, 哀求, 禁止等では命令法か接續法かの形の動詞を使用する. 否定詞は *nō* である. 完了過去接續法の形と現在接續法の形とはこのやうな場合では意義の上には差異はない. 其の他 § 541. を参照せよ.

【641.】 次の羅句文を譯せ.

1. *Valeant, valeant cives mei, sint incolumes, sint beati!*
2. *Utinam Catilina omnes secum suos ex urbe eduxisset!*
3. *Nolite improbum hominem amare, ne ab civibus bonis vituperemini.*
4. *Utinam Romani virorum fortium copiam haberent.*
5. *Ne sic fecerit ut nos deciperet.*
6. *Stet haec urbs praeclara, mihique patria carissima.*
7. *Colitote parentes, legibus paretote, amatote amicos.*

【642.】 次の文を羅句語に譯せ.

1. 汝は夕方此處に居つてはならぬ.
2. 私は彼れの父が昨日ローマに居つた事を欲する.
3. 私の兄が今生きてをつて軍隊を率ゐる事を.
4. 私は汝が明日我等と田野で遊ぶ事を願ふ.
5. 彼等は手紙を父に送る可きである.

## CXXX. 間接説話 (Orātiō Obliqua).

【643.】 吾々が或る人の詞又は思想を他の人に傳へる時に、これに方法が二つある。例へば、‘私は王である’ (I am king) といふ詞を、或る人が使用した事實を他の人に傳へるのに、

1. ‘彼は“私は王である”といつた’。(He said, “I am king.”)
2. ‘彼は彼が王であるといつた’。(He said that he was king.)

の何れでも随意に使用する事ができる。

【644.】 第一文では、此の語を使用した人の詞は、少しの變化もせずに引用されて居る。(通例“ ”の附號を用ふる。)

即ち “*Rex sum*” inquit.

第二文では、其の人の詞は其儘正確に引用されず、只其の詞の内容ばかりが、‘彼は云へり’のやうな句で引出されて、示されてをる。

即ち *Dixit sē regem esse.*

【645.】 次の二つの例を比較すれば明瞭であるやうに、若し或る人の詞が、上の第二文のやうな方法で引用される時には、其の文は殊に其の動詞と代名詞とに變化をうける。

1. ‘私は汝が私に告げた書物を讀むだらう’。(I will read the book which you told me.)
2. ‘彼は彼女が彼に告げた書物を讀もうといふた’。(He

said that he would read the book which she had told him.)

【646.】 (1.) 上の § 643. § 644. § 645. 等の第一文のやうに、或る人の詞又は思想が、其の人が此れ等の詞又は思想を發表したと全く同じ形で繰り返される説話法を直接説話 (*ōrātiō rēcta*) と稱へる。(2.) 上の § 643. § 644. § 645. 等の第二文のやうに、或る人の詞又は思想の内容ばかりが、所謂 *verba sentiendī* 又は *dēclārandī* (感情或は陳述を示す動詞) と稱へられる動詞の附屬句として、發表せられる説話法を間接説話 (*ōrātiō obliqua*) と稱へる。

直接説話を間接説話に變へるには次の變化をする。

【647.】 文章法 LXXII. (1.) 若し直接説話法の主文が單純な表示である時には、此の主文は間接説話法では、已に § 475. で述べたやうに、所謂 *infinitive proposition* といふ文の構成法に従ふて、直接説話法の主文の主格の形の主語は間接説話法では對格の形の主語となり、又主文の定動詞は不定法となつて、*verba sentiendī* 或は *dēclārandī* の後に使用せられる。(不定法の時稱に就ては § 475. を參照せよ。) 例へば、

O. R. *Pāx est composita.* ‘平和が締結された’。(The peace was compacted.)

O. O. *Nuntius allātus est pācem esse compositam.*  
‘平和が締結されたと云ふ報知が來た’。(A message has been brought that the peace was compacted.)

【648.】 文章法 LXXIII. (2.) 若し直接説話法の主文が疑問、命令或は願望を示すものである時には、疑問的主文は



間接説話法では其の動詞を皆 **接續法の形**に變へ、命令的又は願望的主文もこれと同じに、間接説話法では其の動詞を凡て **接續法の形**に變へる、元々から **接續法の形**の動詞は、やはり **接續法の形**である。例へば、

1. O. R. **Tē exspectāvi. Cur nōn vēnisti?** ‘私は汝を期待した。何故に來なかつたか’。

O. O. **Dixit sē illam exspectāvisse. Cur nōn vēnisset?**

2. O. R. “**Omnia periērunt,**” inquit Caesar, “**consulite, militēs, vestrae salūti.**” ‘ケーサルが、“萬事駄目なり、兵士等よ、汝等の安全を計れ”と云ふた’。

O. O. **Caesar dixit omnia periisse; militēs suae salūti consulerent.**

【649.】 **文章法 LXXIV.** (3.) 直接説話法の附屬文で使用される、**直説法**の形の動詞は、間接説話法では、**接續法**の形の動詞に變る、元から **接續法**の形の動詞は、やはり **接續法**の形である。例へば、

O. R. **Lēgi librum quem misisti.** ‘私は汝が送つた書物を讀んだ’。

O. O. **Dixit sē lēgisse librum quem misissem.**

【650.】 **文章法 LXXV.** 已に §645. で述べたやうに、直接説話を間接説話に變へるには、其の代名詞にも副詞にも變化がある。其の變化の方法は、英語を知つてをる人々は英語の變化の方法に従へばよい。即ち大體から見ると、直接説話の **一人稱** 又は **二人稱** の代名詞は、間接説話では通例 **三人稱**

の代名詞に變る。従て動詞も一人稱又は二人稱の形から、三人稱の形に變る。例へば、

O. R. (Ego) **meā manū pallium, quō amictus sum, cōnfēcī.** ‘私は私が着て居る外衣を、私自身の手で作つた’。

O. O. **Hippiās glōriātus est, pallium quō amictus esset, sē suā manū cōnfēcisse.**

O. R. **Pecūniam hic nunc habeo.** ‘私は今金錢を此處に所持する’。

O. O. **Dixit sē illic tunc pecūniam habēre.**

【651.】 間接説話法の動詞の時稱。

**文章法 LXXVI.** (1) 直接説話法の主文で使用せられた直説法の定動詞を、間接説話法で不定法に變へる時に、其の不定法の時稱は直接説話で用ひられた直説法の動詞の時稱と等しいものを使用する。例へば、

O. R. O. O.

**Scribō.** (現在) **Dixit sē scribere.** (現在)

**Scribam.** (未來) **Dixit sē scriptūrum.** (未來)

**Scripsi.** (完了過去) **Dixit sē scripsisse.** (完了過去)

**注意** 間接説話の現在不定法は直接説話の現在直説法を、完了不定法は過去、完了過去、全部過去、未來完了直説法を、未來不定法は未來直説法を示す。

【652.】 **文章法 LXXVII.** (2.) 直接説話法の疑問文の動詞の時稱は間接説話法では、若し其れを引出す動詞の時稱が過去の形の一つである時には(吾々は以下の例題では此の

やうな動詞の時稱ばかりを使用する) 過去又は全分過去の接續法の形に變る。例へば、

O. R. **Nihil videō. Quid est timendum? Cūr fugis?**

‘私は何も見ない。何が恐ろしいか。汝は何故に逃げるか’。

O. O. **Dixit sē nihil vidēre. Quid esset timendum? Cūr fugeret?**

【653.】 文章法 LXXVIII. (3.) 直接説話法の命令法の形の動詞の時稱は間接説話法では、若し其れを引出す動詞の時稱が過去の形の一つである時には(吾々は以下の例題では此のやうな動詞の時稱ばかりを使用する), 過去接續法の形の動詞を使用する。例へば、

O. R. **Jam proficiscor. Venite, nē marātī sitis.** ‘私は今や出發する。來れ、遲滯するな’。

O. O. **Dixit sē jam proficisci. Venirent, nē morarentur.**

【654.】 文章法 LXXIX. (4.) 直接説話法の附屬句の動詞の時稱は間接説話で如何な時稱となるかと云ふに、若し間接説話を引出す動詞の時稱が、過去の形の一つである時には(吾々は以下の例題では此のやうな動詞の時稱ばかりを使用する), 過去又は全分過去接續法の形に變へる。即ち直接説話法の附屬句にある現在, 過去, 未來直説法の形の動詞は, 間接説話法では過去接續法の形になり, 完了過去, 全分過去, 未來完了直説法の形の動詞は, 間接説話法では全分過去接續法の形になる。

1. O. R. **Scripsī id quod legis.** ‘私は汝が読んで居るものを書いた’。

O. O. **Dixit sē scripsisse id quod legerem.**

2. O. R. **Gaia veniet tēcum, si opus confecerit.** ‘Gaia は若し仕事を終れば、汝と一所に來るだらう’。

O. O. **Dixerunt Gaiam cum illō ventūram, si opus confecisset.**

【655.】 次の羅句文を譯せ。

1. Caesar dixit hostes adventare; proinde milites ex castris exirent.

Hostes, inquit Caesar, adventant; proinde, o milites, ex castris exite.

2. Si matrem amas, epistulam scribere debuisti.

Magister dixit puerum, si matrem amaret, epistulam scribere debuisse.

3. Cur talem equum emisti? Unde pecuniam accepisti? Putavi te nihil habere.

Me rogavit. Cur talem equum emissem? Unde pecuniam accepissem? Se putavisse me nihil habere?

4. Eum monuit. Ne crederet homini; nonne certior factus esset eum regem decepisse?

Ne credideris homini; nonne certior factus es eum regem decepisse.

5. Milites, qui me duce vicerunt, summo honore digni sunt.

Imperator putavit milites, qui se duce vicissent, summo honore dignos esse.

6. Librum, quem amicus mihi dedit, ad te mittam.  
Promisit se librum, quem sibi amicus dedisset, ad me missurum.
7. Nihil novi scripsit: quam accepi epistulam, lege.  
Dixit fratrem nihil novi scripsisse; quam accepisset epistulam, legerem.

【656.】 次の文を羅句語に譯せ。

1. 私は汝が命じた事をした。  
彼は私が彼に命じた事をしたといふた。
2. 汝は私が手に持つ物を見ようと欲するか。  
彼は私に彼れが手に持つ物を見ようと欲するかと問ふた。
3. 技術は長く、生涯は短い、時間を空費するな。  
彼は技術は長く、生涯は短い、時間を空費するなと其の子供等にいふた。
4. 私は私が書いた書物を汝に贈物に送るであらう。  
彼女は自分が書いた書物を私に贈物に送ると云ふた。
5. 私は汝を許す事は出来ぬ、汝は誰か、何處から來たか。  
彼は私を許す事は出来ない、私は誰か、何處から來たといふた。

【657.】 次の羅句文を譯し、且つ直接説話を間接説話に、間接説話を直接説話に變へよ。

1. Te nescio. Quis es? Unde venisti?
2. Dixit se ad urbem rediturum, qua in urbe natus esset.
3. Interficiendus est dux, qui talia fecit.
4. Negavit se facere posse ea, quae rogavissem.
5. Dixit se milites, quos ad gloriam saepe duxisset, ad praedam tunc ducere.
6. Dixit se jam facere. Adjuvarent, ne pigri essent.
7. Veni cras et mitte epistulam ad matrem, quae ruri est.

【658.】 次の文を羅句語に譯し、且つ各文を亦其の反對の説話法に譯せ。

1. 彼は王を助けた人々を褒めようといふた。
2. 私は彼が云ふた事を眞實と思ふた。
3. 行け、我が兵士等よ。故國のために戦へ。
4. 汝が彼れの父であるか。何故に此の手紙を持つて來たか。
5. 此の事が眞實なれば兄はローマへ行かねばならんと云ふた。

【659.】 XXII. *Oratio Ambiorigis.*

Apud quos Ambiorix "Ego", inquit, "pro Caesaris in me beneficiis plurimum ei confiteor me debere, quod ejus opera stipendio liberatus sum, quod Aduatucis, finitimis meis, pendere consuevi, quodque mihi et filius et fratris filius a Caesare remissi sunt, quos Aduatuci obsidum numero missos apud se in servitute et catenis tenuerant; neque id quod feci de oppugnatione castrorum aut judicio aut voluntate mea feci, sed coactu

civitatis : meaque sunt ejus modi imperia, ut non minus habebat juris in me multitudo quam ego in multitudinem. Civitati porro haec fuit belli causa, quod repentinae Gallorum conjurationi resistere non potuit. Id facile ex humilitate mea probare possum, quod non adeo sum imperitus rerum, ut meis copiis populum Romanum superari posse confidam. Sed est Galliae commune consilium : omnibus hibernis Caesaris oppugnandis hic est dictus dies, ne qua legio alteri legioni subsidio venire possit..... Moneo, oro te pro hospitio, ut tuae<sup>1)</sup> ac militum saluti consulas. Magna manus Germanorum conducta Rhenum transiit ; haec aderit biduo. Vestrum ipsorum est consilium, velitisne, priusquam finitimi sentiant, eductos ex hibernis milites aut ad Ciceronem aut ad Labienum deducere..... Illud polliceor et jure jurando confirmo, tutum me iter per meos fines daturum." (cf. B. G. V, 27.)

**[660.] XXIII. Oratio Titurii.**

Contra ea Titurius sero facturos clamitabat, cum majores manus hostium adjunctis Germanis convenissent, aut cum aliquid calamitatis in proximis hibernis esset acceptum. Brevem consulendi esse occasionem. Caesarem se arbitrari profectum in Italiam ; neque aliter Carnutes interficiendi Tesgetii consilium fuisse capturos, neque Eburones, si ille adesset, tanta contempione nostri ad castra venturos. Sese non hostem auctorem, sed rem spectare : subesse Rhenum ; magno esse

1) Titurius.

Germanis dolori Ariovisti mortem et superiores nostras victorias ; ardere Galliam tot contumeliis acceptis sub populi Romani imperium redactam, superiore gloria rei militaris exstincta. Postremo quis hoc sibi persuaderet, sine certa spe Ambiorigem ad ejus modi consilium descendisse ? Suam sententiam in utramque partem esse tutam : si nihil esset durius, nullo cum periculo ad proximam legionem perventuros ; si Gallia omnis cum Germanis consentiret, unam esse in celeritate positam salutem. Cottae quidem atque eorum, qui dissentirent, consilium quem habere exitum ? In quo si non praesens periculum, at certe longinqua obsidione fames esset timenda. (B. G. V, 29.)

## 附 錄 I.

## 雜 多 文 例.

**[661.] I. Rusticus et Filii.**

Inter filios rustici cujusdam grave discidium ortum erat. Diu frustra operam impenderat pater hortans, ut pacem atque concordiam colerent. Tandem filiis: "Virgulas", inquit, "mihi afferte decem et considite". Tum omnes virgulas in unum fasciculum colligavit, eumque constrictum singulis filiis obtulit hortans, ut frangerent. Illi autem, quamquam vim omnem adhibebant, frustra laborarunt nec quicquam profecerunt. Tum pater nodum discidit et illis singulas virgulas dedit, quas sine ullo labore confregerunt. Quo facto, rusticus filios ita allocutus est: "Haec res vobis exemplo sit. Tuti eritis ab inimicorum injuriis, quamdiu concordēs eritis; at simulac facta erit dissensio atque discordia, inimici securi in vos irrumpent".

**[662.] II. Formica et Columba.**

Formica sitiens descenderat ad fontem; sed undae eam abriperunt, nec multum aberat, quin misere periret. Quum autem columba sortem ejus videret, misericordia tacta ramulum in aquam iniecit. Hunc assecuta est formica, in eoque natans effugit mortem. Paulo post venator, arcu instructus, illuc venit columbamque telo suo transfixurus fuit. Periculum sensit

formica et, ut piae columbae opem ferret, accurrit atque venatoris talum momordit. Dolore impeditus ille telum non recte misit, et columba incolumis avolavit.—Juva et juvabere: raro beneficium perit.

**[663.] III. Ludus.**

**Carolus.** -Veni, mi Ludovice! **Ludovicus.** Quo tandem?  
**C.** In hortum; satis jam legimus et scripsimus; ludamus quoque! **L.** Ego pensum meum ante absolvam. **C.** Nondumne absolvisti? **L.** Nondum omnia. Tunc jam omnia didicisti et scripsisti, quae praeceptor nos discere et scribere jussit? **C.** Non omnia. **L.** Ergo nondum licet ludere. **C.** Cur non liceat? Reliqua discam et scribam post ludum. **L.** Sed praestat primum discere, deinde ludere. **C.** Quam morosum sodalem habeo! **L.** Non sum morosus, sed facere volo, quae jussa sunt. **C.** Ergo una ediscamus! Ego tibi recitabo, tu mihi. Deinde quum omnia didicerimus, statim ad ludum properabimus. **L.** Placet; nam peracti labores jucundi sunt.

**[664.] IV. Ambulatio.**

**Fredericus.** Age, mi frater, ambulemus; tempestas serena est. **Augustus.** Placet; sed ubi ambulabimus? In pratisne?  
**F.** Minime; prata enim pluvia inundavit, et viae lutulentae sunt. Placetne ascendere in montem, quem e fenestra prospicimus? **A.** Placet; jam pridem enim in monte non fuimus.  
**F.** Hiems nos prohibuit; hieme enim mons glacie et nive tectus erat. Quid stas autem? **A.** Duae viae ducunt ad

montem: altera recta, altera flexuosa. Utram eligamus? **F.** Flexuosam censeo, est enim umbrosior, et sol fervet. Descendentes altera ibimus et ambulationem variabimus. Vesperi enim sol minus fervet. **A.** Proinde eamus.

**[665.] V. Festina Lente.**

**Albertus.** Quis clamat? **Bruno.** Parvus Ludovicus clamat.  
**A.** Quid clamas, Ludovice? **Ludovicus.** De gradibus decidi.  
**A.** Quid laesum est? **L.** Nasus et frons; e naso sanguis destillat. **A.** Tace, nihil est, quod timeas; frigidam quis mihi porrigat aquam et linteum. Accede, abluam te. **B.** Tuber habes in fronte. **A.** Lintei frustum pete idemque vino tinge; id imponemus. Tibi vero quotiens dixi, ne nimium curreres; si lento gradu incessisses, certe non esses lapsus. In posterum cautius ingredi; serva memoria diligenter hoc praeceptum: Festina lente. **L.** Fiet.

**[666.] VI. Lacedaemonii.**

Quum Athenis ludis quidam in theatrum grandis natu venisset, in magno consessu locus ei a civibus nusquam est datus. Quum autem ad Lacedaemonios accessisset, qui, legati quum essent, certo in loco consederant, consurrexerunt omnes et senem illum sessum receperunt. Quibus quum a cuncto consessu plausus esset multiplex datus, dixit ex eis quidam: Athenienses sciunt, quae recta sunt; sed facere nolunt.

**[667.] VII. Sabini et Romani.**

Propter raptarum mulierum injuriam Sabini Romanis bellum

intulerunt. Res venit ad pugnam. Utrunque accerrime decertatur. In media acie repente raptae mulieres crinibus passis scissaque veste ausae sunt se inter tela volantia inferre et precibus infestas acies dirimere. Rebus compositis, Romulus centum ex senioribus legit, quorum cosilio omnia ageret, quos senatores nominavit propter senectutem. Anno regni tricesimo septimo, quum orta subito tempestate non comparuisset, ad deos transisse creditus est.

**[668.] VIII. Tarquinius.**

Etiam secundo anno iterum Tarquinius, ut reciperetur in regnum, bellum Romanis intulit, auxilium ferente Porsena, Etruscorum rege. Is, ne Tiberin transiret, virtute Horatii Coclitis prohibitus est, qui, dum alii pontem rescindunt, unus Etruscos sustinuit et, ponte rupto, armatus se in flumen misit et ad suos transnavit. Quum Porsena urbem obsideret, Gajus Mucius Scaevola, adulescens nobilis, in castra hostium se contulit, ut Porsenam regem occideret. At pro rege scribam obtruncat, qui propter eum sedebat pari fere ornatu indutus. Tum a regiis satellitibus comprehensus ante tribunal regis constitutus est. Qui quum tormenta minitaretur, Mucius, dextra accesso ad sacrificium foculo injecta: "En tibi", inquit, "quam vile corpus sit eis, qui magnam gloriam vident". Qua animi virtute percussus rex juvenem intactum inviolatumque dimisit. Tum Mucius, quasi renumerans beneficium, trecentos principes juventutis Romae in ejus vitam conjurasse

ait. Qua re territus Porsena pacem cum Romanis fecit. Tarquinius autem Tusculum abiit ibique privatus cum uxore consenuit.

**[669.] IX. C. Fabricius Luscinus.**

Interjecto anno, contra Pyrrhum, Epiri regem, Fabricius est missus, qui prius inter legatos sollicitari non potuerat quarta parte regni promissa. Tum, cum vicina castra ipse et rex haberent, medicus Pyrrhi ad eum nocte venit, promittens se veneno Pyrrhum occisurum, si sibi aliquid polliceretur: quem Fabricius vinctum reduci jussit ad dominum Pyrrhoque dici, quae contra caput ejus medicus spondisset. Tunc rex, admiratus eum, dixisse fertur: Ille est Fabricius, qui difficilius ab honestate quam sol a cursu suo averti potest. Tum rex in Siciliam profectus est; Fabricius, victis Samnitibus et Lucanis, triumphavit. Consules deinde, Curius Dentatus et Cornelius Lentulus, adversus Pyrrhum missi sunt; Curius contra eum pugnavit, exercitum ejus cecidit, ipsum Tarentum fugavit, castra cepit. Eo die caesa sunt hostium viginti tria milia. Curius in consulatu triumphavit: primus Romam elephantos quattuor duxit. Pyrrhus etiam a Tarento mox recessit et apud Argos, Graeciae urbem, occisus est.

**[670.] X. Hannibal.**

Hannibal, relicto in Hispania fratre Hasdrubale, Pyrenaeum transiit; Alpes, adhuc ea parte invias, sibi patefecit. Traditur in Italiam octoginta milia peditum et viginti milia equitum

septem et triginta elephantos adduxisse. Interea multi Ligures et Galli Hannibali se conjunxerunt. Publius Cornelius Scipio Hannibali primus occurrit; commisso ad Ticinum proelio, fugatis suis, ipse vulneratus in castra rediit. Tum Sempronius Gracchus confligit apud Trebiam amnem. Is quoque vincitur. Hannibali multi se in Italia dediderunt. Inde in Etruriam veniens Hannibal Flaminium consulem ad Trasimenum lacum acie devicit. Ipse Flaminius interemptus est; Romanorum viginti quinque milia caesa sunt, ceteri diffugerunt. Jamjam, exercitibus Romanis devictis, Hannibal ipsam urbem Romam aggressurus videbatur; at praeter omnem expectationem transduxit copias in Italiam inferiorem. Missus adversus Hannibalem est Quintus Fabius Maximus dictator, qui differendo pugnam Hannibalem debilitavit et cunctando res Romanas restituit.

**[671.] XI. Leonidas.**

Ut introitus Xerxis in Graeciam terribilis fuit, ita turpis ac foedus discessus. Nam quum Leonidas, rex Lacedaemoniorum, cum quattuor milibus militum angustias Thermopylarum occupasset, Xerxes, contempta paucitate, eos pugnam capessere jubet, quorum cognati Marathonia pugna interfecti fuerant: qui, dum ulcisci suos cupiunt, principium cladis fuere; succedente deinde inutili turba, major caedes editur. Triduum ibi cum dolore et indignatione Persarum dimicatum est; quarto die, quum nuntiatum esset Leonidae a viginti milibus hostium summum cacumen teneri, tunc hortatur socios, recedant et se

ad meliora patriae tempora reservent; sibi cum Lacedaemoniis fortunam experiendam esse; plura se patriae quam vitae debere; ceteros ad praesidia Graeciae servandos esse. Audito regis imperio, discessere ceteri, soli Lacedaemonii remanserunt. Initio hujus belli Delphis oraculum erat datum aut regi Lacedaemoniorum aut urbi cadendum esse.

**[672.] XII. Amicus Infidelis.**

Duo amici una iter faciunt atque, solitudinem peragrantes, ursum ingentem vident advenientem. Alter celeriter in arborem adscendit; alter recordatus illam bestiam cadavera non attingere nisi fame efferatam, humi se prosternit animamque continet, simulans se esse mortuum. Accedit ursus, contrectat jacentem, os suum ad hominis os et aures admovet et cadaver esse ratus discedit. Tum ambo, metu liberati, inceptum iter persequuntur. Inter eundem autem interrogat is, qui in arborem adscenderat, alterum, quidnam ursus ei in aurem insusurrasset. "Multa", inquit ille, "quae non recordor; sed imprimis hoc praeceptum dedit, ne quem pro amico haberem, cujus fidem adverso tempore non essem expertus".

**[673.] XIII. Demosthenes.**

Demosthenes, causam orans, quum iudices parum attentos videret: "Paulisper", inquit, "aures mihi praebete; rem vobis novam et jucundam narrabo". Quum aures arrexissent: "Juvenis", inquit, "quispiam asinum conduxerat, quo Athenis Megaram profecturus uteretur. In itinere quum sol flagraret,



neque esset umbraculum, deposuit clitellas et sub asino consedit, cujus umbra tegeretur. Id vero agaso vetabat, clamans asinum locatum esse, non umbram asini. Alter quum contra contendere, tandem in jus ambulat". Haec locutus Demosthenes, ubi homines diligenter auscultantes videt, abiit. Tum revocatus a iudicibus rogatusque, ut reliquam fabulam enarraret: "Quid?" inquit. "Ergo de asini umbra audire libebit; causam hominis de vita periclitantis non audietis?"

**[674.] XIV. Cyri mors.**

Cyrus, postquam Asiam subegit, Scythis bellum intulit, quibus eo tempore Tomyris regina praeerat. Rex aliquantum in Scythia progressus, quasi refugiens, castra deseruit atque in iis vini affatim et quae epulis erant necessaria reliquit. Tum regina filium adulescentem cum tertia parte copiarum ad hostes insequendos misit; is vero, rei militaris ignarus, omissis hostibus, milites in castris Cyri vino se onerare patitur. Cyrus autem noctu redit omnesque Scythas cum ipso reginae filio in castris interficit. Sed Tomyris, poenam meditata, hostes, recenti victoria exsultantes, pari fraude decipit. Quippe simulato timore refugiens Cyrum ad angustias pertraxit ibique in insidiis regem cum innumerabilibus Persarum copiis occidit. Tum caput Cyri amputatum in utrem, sanguine humano repletum, conjecit, crudelitatem his verbis exprobrans: Satia te sanguine, quem sitisti et quo nunquam satiari potuisti!

**[675.] XV. Cleobis et Bitō.—Trophonius et Agamedes.**

Argivae sacerdotis, Cleobis et Bitō, filii, praedicantur. Nota fabula est. Quum enim illam ad solemne et statum sacrificium curru vehi jus esset satis longe ab oppido ad fanum, morarenturque jumenta, tunc juvenes ii, quos modo nominavi, veste posita, corpora oleo perunxerunt, ad jugum accesserunt. Ita sacerdos advecta in fanum, quum currus esset ductus a filiis, precata a dea dicitur, ut illis praemium daret pro pietate, quod maximum homini dari posset a deo. Postea epulatos cum matre adulescentes somno se dedisse, mane inventos esse mortuos.—Simili precatione Trophonius et Agamedes usi dicuntur, qui quum Apollini Delphis templum exaedificavissent, venerantes deum petierunt mercedem non parvam quidem operis et laboris sui, nihil certi, sed quod esset optimum homini. Quibus Apollo se id daturum ostendisse dicitur post ejus diei diem tertium: qui ut illuxit, mortui sunt reperti. (Cicero. Tusc. I. 47, 113, 114).

**[676.] XVI. Iphigenia.**

Multos dies Graeca classis apud Aulidem tempestate tenebatur. Agamemnon, impatiens morae, augures omnes ad se convocat causamque tempestatis exquirat. Tum Calchas, augur praeclarus, ita respondet. "Dianam tu ipse offendisti; nuper enim in silvis cervum deae sacrum occidisti; neque hoc scelus expiari potest, nisi filiam tuam Iphigeniam in ara Dianae immolaveris". Primo Agamemnon a sacrificio abhorret. Tum Menelaus "Rex es", inquit; "tu peccas, si privatam caritatem

utilitati publicae praeponis". His verbis patri invitissimo persuadet. Ulixes igitur Argos ad Clytaemnestram, Iphigeniae matrem, mittitur. "Agamemnonis jussu", inquit, "huc veni; is enim filiam Iphigeniam Achilli in matrimonium spondit". His verbis Clytaemnestram fallit Iphigeniamque Aulidem deducit. Tum pater infelix filiam in ara Dianae immolare parat. Diana autem, quam sors iniqua tam pulchrae virginis ad misericordiam commoverat, aram densis nubibus involvit, cervumque pro virgine supponit. Iphigeniam per nubes in terram Tauricam deportat, eamque templi sui sacerdotem facit.

**[677.] XVII. De Litera.**

Nemo est tam adversus a Musis, qui non mandari versibus aeternam suorum factorum laudem velit. Themistocles ille, summus Athenis vir, cum ex eo quaereretur 'cujus vocem libentissime audiret?' respondisse dicitur, 'ejus a quo sua virtus optime praedicaretur'. Itaque C. Marius item eximie L. Plotium dilexit, cujus ingenio putabat ea, quae gesserat, posse celebrari. Multos scriptores rerum suarum ille Alexander secum habuisse dicitur. Atque idem, cum in Sigeo ad Achillis tumulum adstisset, "O fortunate", inquit, "adolescens, qui tuae virtutis praeconem Homerum inveneris". Et vere. Nam nisi Homeri Ilias exstisset, idem tumulus, qui corpus ejus contexerat nomen etiam obruisset. (Cicero, Pro Archia 10. 24.)

**[678.] XVIII. Mors Hannibalis.**

Hannibal, postquam est nuntiatum milites regios in vestibulo

esse, postico fugere conatus, ut id quoque occursum militum obsaeptum sensit et omnia circa clausa custodiis dispositis esse, venenum, quod multo ante praeparatum ad tales habebat casus, poposcit. "Liberemus", inquit, "diuturna cura populum Romanum, quando mortem senis exspectare longum censent. Nec magnam nec memorabilem ex inermi proditoque Flaminio victoriam feret. Mores quidem populi Romani quantum mutaverint, vel hic dies argumento erit. Horum patres Pyrrho regi, hosti armato, exercitum in Italia habenti, ut a veneno caveret, praedixerunt; hi legatum consularem, qui auctor esset Prusiae per scelus occidendi hospitis, miserunt". Exsecratus deinde in caput regnumque Prusiae, et hospitales deos violatae ab eo fidei testes invocans, poculum exhaustit. Hic vitae exitus fuit Hannibalis. (Livius, XXXIX, 51.)

**[679.] XIX. Gens Aliqua Germaniae.**

Agri culturae non student, majorque pars eorum victus in lacte, caseo, carne consistit. Neque quisquam agri modum certum aut finis habet proprios; sed magistratus ac principes in annos singulos gentibus cognationibusque hominum, qui cum una coierunt, quantum et quo loco visum est agri attribunt atque anno post alio transire cogunt. Ejus rei multas adferunt causas: ne assidua consuetudine capti studium belli gerendi agri cultura commutent; ne latos finis parare studeant, potentioresque humiliores possessionibus expellant; ne accuratius ad frigora atque aestus vitandos aedificent; ne qua oriatur pe-

cuniae cupidas, qua ex re factiones dissensionesque nascuntur ut animi aequitate plebem contineant, cum suas quisque opes cum potentissimis aequari videat. (Caesar, B. G. VI, 22.)

【680.】 XX. **Finis Conjuratonis Catilinae.**

Sed confecto proelio tum vero cernebas, quanta audacia quantaque animi vis fuisset in exercitu Catilinae. Nam fere quem quisque vivus pugnando locum ceperat, eum amissa anima corpore tegebat: pauci autem, quos medios cohors praetoria disjecerat, paulo diversius sed omnes tamen adversis vulneribus conciderant. Catilina vero longe a suis inter hostium cadavera repertus est, paululum etiam spirans, ferociamque animi, quam habuerat vivus, in vultu retinens. Postremo ex omni copia neque in proelio neque in fuga quisquam civis ingenuus captus est; ita cuncti suae hostiumque vitae juxta pepercerant. Neque tamen exercitus populi Romani laetam aut incruentam victoriam adeptus erat. Nam strenuissimus quisque aut occiderat in proelio aut graviter vulneratus discesserat. Multi autem, qui e castris visendi aut spoliandi gratia processerant, volventes hostilia cadavera amicum alii, pars hospitem aut cognatum reperiebant: fuere item qui inimicos suos cognoscerent. (Sallustius, de Con. Cat. 61.)

## 附 録 II.

### Ⅰ 年 代

【681.】 羅馬の著作家は其の年代を記するのに、通例其の年の執政官の名を使用した。けれども、若し **A. U. C.** (*annō urbis conditae*) の年代の記載法を使用する時には、吾々は **754** から其の年代の數を減せば、西曆 **B. C.** (紀元前) の年代の數を知る事ができる; 其の年代數から **753** を減せば西曆 **A. D.** (紀元後) の年代の數を知る事ができる。例へば、

**A. U. C. 710** は **B. C. 44.**

**A. U. C. 762** は **A. D. 9.**

### Ⅱ 曆.

【682.】 西曆紀元前 45 年以後使用せられるやうになつたケーサルが改正した曆は、一年を  $365\frac{1}{4}$  日としてをる。此の分數を避けるために、各四年宛で三年は各々 **365** 日を一年にし、第四年目の年 (閏年, *annus bisextilis*) は **366** 日を一年とするやうになつた。これは大體吾々の使用してをるものである。

【683.】 羅匈語の月の名は次のやうである。

一月	Jānuārius 31日,	二月	Februārius 28日,
			(但し閏年には 29日)
三月	Martius 31日,	四月	Aprilis 30日,
五月	Māius 31日,	六月	Jūnius 30日,
七月	Quintilis 31日,	八月	Sextilis 31日,
九月	September 30日,	十月	Octōber 31日,
十一月	November 30日,	十二月	December 31日,

注 意 イ. 但し上の **Quintilis** と云ふ月の名稱は、西暦紀元前 44 年以後 **Jūlius** (*Jūlius Caesar* を紀念するため) と改稱せられ、**Sextilis** は西暦紀元前 8 年以來 **Augustus** (*Augustus* 帝を紀念するため) と改稱せられた。古暦(ケーサルが暦を制定せし以前の暦)は一年を十ヶ月に別けて、現今の三月から數へ始めたから **Quintilis** (*quintus*) は五月 **October** (*Octo*) は八月等のやうに名と實と一致するけれども、ケーサル暦は十二ヶ月となし三月の前に二ヶ月の名稱を増しながら、月の名を變へなかつたから名と實の不一致ができた。

注 意 ロ. 羅甸語の月の名は總て形容詞であるから、若しそれが名詞のやうに使用せられる時には、**Mensis** (月) と云ふ語が省かれてゐるものと思ふべきである。

【684.】月の最初の日を **Kalendae** と稱へる。

三月、五月、七月、十月では其の第七日目の日を **Nōnae** と稱へ、其の他の八ヶ月では其の第五日目の日を **Nōnae** と稱へる；三月、五月、七月、十月では其の第十五日目の日を **Idūs** と稱へ、其の他の八ヶ月では其の第十三日目の日を **Idūs** と稱へる。

【685.】それであるから、

‘一月一日に’	の羅甸語は	<b>Kalendis Jānuāriis,</b>
‘二月五日に’	”	<b>Nōnis Februāriis,</b>

‘二月十三日に’	の羅甸語は	<b>Idibus Februāriis,</b>
‘三月七日に’	”	<b>Nōnis Martiis,</b>
‘三月十五日に’	”	<b>Idibus Martiis,</b>
‘四月五日に’	”	<b>Nōnis Aprilibus</b>

のやうな風である。

其の外の日を數へるには、其の月の **Nōnae** 又は **Idūs**、又は翌月の **Kalendae** を起點にして、其れから後退きに何日目と云ふやうな風に計算するのである。但し、此處に特に注意をす可きは、羅馬人は其の日數の計算では、其の起點の日も終結の日も共に計へ込むといふ事である。(但し **Kalendae**、**Nōnae**、**Idūs** の直ぐ前日は **prīdie** と稱へる)。

それであるから、

‘十一月四日に’	の羅甸語は	<b>Prīdie Nōnās Novembrēs,</b>
‘十一月十二日に’	”	<b>Prīdie Idūs Novembrēs,</b>
‘十一月九日に’	”	<b>Ante diem quintum Idūs</b>
		<b>Novembrēs (A. D. V. Id. Nov.)</b>

‘十一月二十九日に’の羅甸語は **Ante diem tertium Kalendās Decembrēs (A. D. III. Kal. Dec.)**

閏年の二月は、其の二十四日目 (**ante diem sextum Kalendās Martiās**) が二度數へられるから、日數が二十九日になるのである。亦閏年の事を **annus bisextilis** と稱へるのも此處に原因してをるのである。

注 意 上記 **Prīdie Nōnās Novembrēs**、**Prīdie Idūs Novembrēs** 等では意義上からは、**Prīdie ante Nōnās Novembrēs**、**Prīdie ante Idūs Novembrēs** のやうであるべきであるが、**Prīdie** と云ふ語が、

已に其の中に‘前’(Prae)といふ義を含有してゐるから、*Prīdie* の場合には *ante* と書くことをしない。けれども、*ante diem quintum Idūs Novembrēs*, *ante diem tertium Kalendās Decembrēs* 等では、意義上から見ると、*die quartō ante Idūs Novembrēs*, *die tertiō ante Kalendās Decembrēs* となる可きであつて、又實際此の様を書く事もあるが、此れよりは上のやうに *ante* を先頭に出して、其れで他の語を總て支配するやうな書方が普通である。

【686.】 晝の時間に就て、

晝といふのは日出から日没迄を稱へる。其の間を十二時間に等分する。これで同じ晝の一時間といふても、其の一時間の長さには長短があつて、短かいものになると、冬至の四十五分から、長いものになると夏至の 75 分もある。只春分と秋分とにばかり、一時間が六十分である。

【687.】 夜の區分に就て、

夜といふのは日没から日出までをいふ。其の間を四等分して、其の各々を *Vigilia* (當直時間) と名付ける。順序によつて、*Prima*, *Secunda*, *Tertia*, *Quarta* と稱へる。

### (3). 羅馬の貨幣.

【688.】 極く昔では、羅馬の貨幣は鑄造されたものではなかつたので、一封度の重量であつたと現今から思推せられる青銅 (*aes*) の貨錠であつた (*as librālis*)、常に重量を秤つて支拂をしてをつた。其の後、貨幣を鑄造したが、其の *as* は ‘10 *unciae*’ の重量であつた (1 *uncia* は 7 匁 56)。

西曆紀元前 269 年迄は、青銅の外の金屬は貨幣に鑄られなかつたが、此の年に羅馬人は銀貨を鑄つた。其の内主なものは *sēstertius* = ‘2½ *assēs*’ と *dēnārius* = ‘10 *assēs*’ 又は ‘4 *sēstertii*’ とである。青銅貨 *as* は 4 *unciae* に下落した。

それで *sēstertius* は 10 *unciae* の價であつた古き *as* と同じ價になつた。其の後銀の輸入益々増加したために、青銅貨は愈々其の重量を減して、西曆紀元前 217 年には 1 *uncia* となり、*sēstertius* は 4 *assēs*, *dēnārius* は 16 *assēs* の價となつた。西曆紀元前 49 年に *Jūlius Caesar* が *aureus* といふ金貨を造つた。其の以後は *sēstertius* は青銅で鑄造することになつた。

*Aureus* (金) = ‘100 *sēstertii*’ = 1 磅 (九圓七十六錢三厘),

*Dēnārius* (銀) = ‘4 *sēstertii*’ = 9⅔ ペンス (38 錢餘),

*Sēstertius* (青銅) = 2⅔ ペンス (9 錢餘),

*As* = ‘¼ *sēstertius*’ = ⅔ ペンス (2.4 錢).

【689.】 羅馬人が金高を計算するには、上の *sēstertius* を基本命數にして、其の *sēstertius* の數で、其の何程の金高であるかを知つた。

次の表はし方に注意せよ。

1. *duo sēstertii*, ‘2 セーステルチウス’.

*centum sēstertii*, ‘100 セーステルチウス’.

2. *duo milia sēstertiōrum* 又は *sēstertium*, ‘2,000 セーステルチウス’, (直譯はセーステルチウスの二千. § 283. 參照). *sēstertium* は *sēstertius* の屬格複數の古い形である).

【690.】 *duo sēstertia*, '2,000 セーステルチウス'.

此の表示法では屬格複數 *sēstertium* は § 689. 2 で示したやうな表示法の自分が屬しをる語から、分離して、中性單數名詞として取扱はれてをる。従て其の複數の形は *sēstertia* である。

【691.】 *deciēns centēna milia sēstertium*, '1,000,000 セーステルチウス', (直譯: セーステルチウスの十萬を十度, *ten times a hundred thousands of sēstertii*).

*viciēns centēna milia sēstertium*, '2,000,000 セーステルチウス'. 上のやうに長い表示法では, *centēna milia* といふ二語を省いて, 次のやうな簡単な形式で表はすのが通例である。 *deciēns sēstertium* = '1,000,000 セーステルチウス'.

時々, 屬格複數の形の *sēstertium* は上のやうな表示法から分れて, 100,000 セーステルチウスの義の中性の單數名詞として用ひられる事がある。例へば

*ēmī fundum sēstertiō undeciens*. '私は 1,100,000 セーステルチウスの代價で一地面を買ふた'.

#### (4.) 羅馬市民の姓名に就て.

【692.】 家柄の羅馬市民は少なくとも三つの名をもつてゐた。1. *Praenōmen* (又は *first name*), 此れは個人 (*persōna*) を示す名。2. *Nōmen* (又は *second name*), 此れは氏族 (*gens*)

を示す名。3. *cognōmen* (又は *third name*), 此れは家系 (*familia*) を示す名である。此の三つの名の順序は一番が *Praenōmen*, 二番が *nōmen*, 三番が *cognōmen* である。

それであるから, *L. Jūnius Brūtus* は 'Jūnia 族の Brūtus 家の Lūcius' と云ふ人を示すのである。此の三つの名の外に時々 *agnōmen* といふ名が加はる事がある。此れは名譽の表象のため, 又は其の外の事情のために出来たものである。

例へば, *P. Cornēlius Scipiō Africānus*.

【693.】 個人名は外の名と合して用ひられる時には其の頭字ばかりを書いて, 外を省く事がある。

A. = Aulus,	N. 又は Num = Numerius,
C. = Gāius,	P. = Pūblius,
Cn. = Gnaeus,	Q. = Quintus,
D. = Decimus,	S. 又は Sex = Sextus,
K. = Kaesō,	Ser. = Servius,
L. = Lūcius,	Sp. = Spurius,
M. = Marcus,	T. = Titus,
M.' = Mānius,	Ti. = Tiberius.
Mam. = Mamerus,	

【694.】 若し羅馬市民の名に, 只二つの名ばかり書いてある時にはこれは大抵個人の名と家族の名とであつて, 氏族の名は略されてをるのである。 *Marcus Cicerō* も實は *Marcus Tullius Cicerō* である。

(5.) 重要な省略字.

【695.】

- |                                       |                                                  |
|---------------------------------------|--------------------------------------------------|
| <b>A. D.</b> =ante diem,              | <b>P. R.</b> =populus Rōmānus,                   |
| <b>A. U. C.</b> =annō urbis conditae, | <b>Proc.</b> =prō-cōnsul,                        |
| <b>Cos.</b> =cōnsul,                  | <b>S.</b> =senātus,                              |
| <b>Coss.</b> =cōsulēs,                | <b>S. C.</b> =senātūs cōnsultum,                 |
| <b>F. C.</b> =faciendum cūrāvit,      | <b>S. P. D.</b> =salūtem plūrimam dicit,         |
| <b>Id.</b> =Idūs,                     | <b>S. P. Q. R.</b> =senātus populus-que Rōmānus, |
| <b>K.</b> 又は <b>Kal.</b> =Kalendae,   | <b>Tr. Pl.</b> =tribūnus plēbis.                 |
| <b>Non.</b> =Nōnae,                   |                                                  |
| <b>P. C.</b> =patrēs cōscripti,       |                                                  |

附 録 III.

轉尾及び活用表.

A. 名 詞.

【696.】 已に § 89. で述べたやうに、羅句語の名詞はその幹特徴又は其の屬格單數の語尾で次の五種類の轉尾法に區別せられる.

- 第一種轉尾, **Ā**-幹, 屬格單數の語尾 **-ae**.
- 第二種轉尾, **O**-幹, 屬格單數の語尾 **-i**.
- 第三種轉尾, 子音幹 又は **I**-幹, 屬格單數の語尾 **-is**.
- 第四種轉尾, **U**-幹, 屬格單數の語尾 **-ūs**.
- 第五種轉尾, **E**-幹, 屬格單數の語尾 **-ēi**.

【697.】 第一種轉尾 **Ā**-幹.

**mēnsa**, f., 机. 幹 **mēnsā**-, 根 **mēns-**.

	單 數	複 數
	語尾	語尾
主 格 <sup>1)</sup>	<b>mēnsa -a</b>	<b>mēnsae -ae</b>
對 格	<b>mēnsam -am</b>	<b>mēnsās -ās</b>
屬 格	<b>mēnsae -ae</b>	<b>mēnsārum -ārum</b>
與 格	<b>mēnsae -ae</b>	<b>mēnsis -is</b>
奪 格	<b>mēnsā -ā</b>	<b>mēnsis -is</b>

注 意 **dea** と **filia** は與格と奪格複數で、語尾 **-is** の代りに語尾 **-ābus** を取る.

1) 以下特に注意する所の外は主格と呼格は常に同形であるから呼格の形を表はさない.

第二種轉尾 O-幹.

【698.】 (1.) -us で終る男性名詞.

dominus, m., 主人. 幹 domino-, 根 domin-.

	單 數	語尾	複 數	語尾
主 格	dominus	-us	domini	-i
對 格	dominum	-um	dominōs	-ōs
屬 格	domini	-i	dominōrum	-ōrum
與 格	dominō	-o	dominis	-is
奪 格	dominō	-o	dominis	is

注意イ. -us で終る第二種轉尾の名詞は、呼格單數で -e の語尾を取る.  
例. domine.

注意ロ. -ius で終る固有名詞と、filius とは呼格單數で -i (-ie の節約せられたもの) の語尾を取る、而して音調はペヌルト (最後から第二番の音節) (假令此の音節が短かうても) の上にある. (§130. 参照).

例. Virgili (Virgilius), fili (filius).

注意ハ. -ius で終る第二種轉尾の男性普通名詞と、-ium で終る第二種轉尾の中性普通名詞とは、其の屬格單數で -i (-ii の節約せられたもの) を語尾にする、而して音調はペヌルト (最後から第二番目の音節) の上に、(其れの音量の長短の區別なしに) ある. (§129. 参照).

例. fili (filius), ingeni (ingenium).

【699.】 (2.) -um で終る中性名詞.

bellum, n., 戰爭. 幹 bello-, 根 bell-.

	單 數	語尾	複 數	語尾
主 格	bellum	-um	bella	-a
對 格	bellum	-um	bella	-a
屬 格	belli	-i	bellōrum	-ōrum

與 格	bello	-o	bellis	-is
奪 格	bello	-o	bellis	-is

【700.】 (3) -er, -ir で終る男性名詞.

puer, m., 男小供. ager, m., 田野. vir, m., 男.

幹 puero- agro viro-  
根 puer- agr- vir-

	單	數	語尾	
主 格	puer	ager	vir	-um
對 格	puerum	agrum	virum	-i
屬 格	pueri	agri	viri	-o
與 格	puerō	agrō	virō	-o
奪 格	puerō	agrō	virō	-o

	複	數	語尾	
主 格	pueri	agri	viri	-i
對 格	pueros	agros	viros	-os
屬 格	puerorum	agrorum	virorum	-orum
與 格	pueris	agris	viris	-is
奪 格	pueris	agris	viris	-is

【701.】 第三種轉尾.

- |    |                                   |                                                       |
|----|-----------------------------------|-------------------------------------------------------|
| 分類 | 第一類——屬格複數で -um を語尾にする子音幹の名詞       | (1) 主格單數が語尾をもたない男性名詞, 女性名詞.                           |
|    |                                   | (2) 第二類の (3) でない中性名詞.                                 |
| 分類 | 第二類——屬格複數で -ium を語尾にする母音幹 (I) の名詞 | (3) 主格單數が語尾 s をもつ男性名詞, 女性名詞 (中性名詞はない).                |
|    |                                   | (1) 主格單數が -ēs 又は is で終つて、屬格單數が主格單數と同數の音節をもつ男性名詞, 女性名詞 |
|    |                                   | (2) 屬格單數の語尾前に二つの子音をもつ男性名詞, 女性名詞                       |
|    |                                   | (3) -e, -al, -ar で終る中性名詞                              |



【702.】 第三種轉尾名詞第一類の内 (1).

victōr, m., nātiō, f., cōnsul, m., pater, m., homō, c.

勝利者. 種族. 執政官. 父. 人間.

根又は幹 victōr- nātiōn- cōnsul- patr- homin-

單 數

						語尾
主格	victōr	nātiō	cōnsul	pater	homō	—
對格	victōrem	nātiōnem	cōnsulem	patrem	hominem	-em
屬格	victōris	nātiōnis	cōnsulis	patris	hominis	-is
與格	victōri	nātiōni	cōnsuli	patri	homini	-i
奪格	victōre	nātiōne	cōnsule	patre	homine	-e

複 數

						語尾
主格	victōres	nātiōnes	cōsules	patres	homines	-es
對格	victōres	nātiōnes	cōsules	patres	homines	-es
屬格	victōrum	nātiōnum	cōsulum	patrum	hominum	-um
與格	victōribus	nātiōnibus	cōsulibus	patribus	hominibus	-ibus
奪格	victōribus	nātiōnibus	cōsulibus	patribus	hominibus	-ibus

【703.】 第三種轉尾名詞第一類の内 (2).

nōmen, n., tempus, n., vulnus, n., caput, n.

名. 時. 傷. 頭.

根又は幹 nōmin- tempor- vulner- capit-

單 數

						語尾
主格	nōmen	tempus	vulnus	caput		—
對格	nōmen	tempus	vulnus	caput		—
屬格	nōminis	temporis	vulneris	capitis		-is

與格	nōmina	tempora	vulnera	capita	-i
奪格	nōmine	tempore	vulnere	capite	-e

複 數

						語尾
主格	nōmina	tempora	vulnera	capita		-a
對格	nōmina	tempora	vulnera	capita		-a
屬格	nōminum	temporum	vulnerum	capitum		-um
與格	nōminibus	temporibus	vulneribus	capitibus		-ibus
奪格	nōminibus	temporibus	vulneribus	capitibus		-ibus

【704.】 第三種轉尾名詞第一類の内 (3).

rēx, m., 王. hiems, f., 冬. virtūs, f., 勇らしき

根又は幹 rēg- hiem- virtūt- 性質.

princeps, m., miles, m., lapis, m.,

主公. 兵士. 石.

,, princip- milit- lapid-

單 數

						語尾	
主格	rēx	hiems	virtūs	princeps	miles	lapis	-s
對格	rēgem	hiemem	virtūtem	principem	militem	lapidem	-em
屬格	rēgis	hiemis	virtūtis	principis	militis	lapidis	-is
與格	rēgi	hiemi	virtūti	principi	militi	lapidi	-i
奪格	rēge	hieme	virtūte	principe	milite	lapide	-e

複 數

							語尾
主格	rēges	hiemes	virtutes	principes	milites	lapides	-es
對格	rēges	hiemes	virtutes	principes	milites	lapides	-es
屬格	rēgum	hiemum	virtutum	principum	militum	lapidum	-um
與格	rēgibus	hiemibus	virtutibus	principibus	militibus	lapidibus	-ibus
奪格	rēgibus	hiemibus	virtutibus	principibus	militibus	lapidibus	-ibus

【705.】 第三種轉尾名詞第二類の内 (1).

	<b>ignis, m.,</b>	<b>nāvis, f.,</b>	<b>hostis, c.,</b>	<b>nūbēs, f.,</b>	<b>caedēs, f.</b>
	火	舟	敵	雲	殺戮
幹	igni-	nāvi-	hosti-	nūbi-	caedi-
根	ign-	nāv-	host-	nūb-	caed-

			單	數		語尾
主格	ignis	nāvis	hostis	nūbēs	caedēs	-is, -es
對格	ignem	nāvem	hostem	nūbem	caedem	-em (-im)
屬格	ignis	nāvis	hostis	nūbis	caedis	-is
與格	igni	nāvi	hosti	nūbi	caedi	-i
奪格	igne(又は-i)	nāve(又は-i)	hoste(又は-i)	nūbe	caede	-e (-i)

			複	數		語尾
主格	ignēs	nāvēs	hostēs	nūbēs	caedēs	-ēs
對格	ignēs (-is)	nāvēs (-is)	hostēs (-is)	nūbēs (-is)	caedēs (-is)	-ēs, -is
屬格	ignium	nāvium	hostium	nūbium	caedium	-ium
與格	ignibus	nāvibus	hostibus	nūbibus	caedibus	-ibus
奪格	ignibus	nāvibus	hostibus	nūbibus	caedibus	-ibus

【706.】 第三種轉尾名詞第二類の内 (2).

	<b>cliēns, c.,</b>	<b>urbs, f.,</b>	<b>gens, f.,</b>	<b>arx, f.,</b>	<b>nox, f.,</b>
	受保護者	市府	氏族	城砦	夜
幹	clienti-	urbi-	genti-	arci-	nocti-
根	client-	urb-	gent-	arc-	noct-

  

			單	數		語尾
主格	cliēns	urbs	gens	arx	nox	-s

對格	cliēntem	urbem	gentem	arcem	noctem	-em (-im)
屬格	cliētis	urbis	gentis	arcis	noctis	-is
與格	cliēnti	urbi	genti	arci	nocti	-i
奪格	cliēnte	urbe	gente	arce	nocte	-e (-i)

複 數

						語尾
主格	cliētēs	urbēs	gentēs	arcēs	noctēs	-ēs
對格	cliētēs (-is)	urbēs (-is)	gentēs (-is)	arcēs (-is)	noctēs (-is)	-ēs, -is
屬格	cliētium	urbium	gentium	arcium	noctium	-ium
與格	cliētibus	urbibus	gentibus	arcibus	noctibus	-ibus
奪格	cliētibus	urbibus	gentibus	arcibus	noctibus	-ibus

【707.】 第三種轉尾名詞第二類の内 (3).

	<b>mare, n.,</b> 海.	<b>animal, n.,</b> 動物.	<b>calcar, n.,</b> 拍車.
幹	mari-	animāli-	calcāri-
根	mar-	animāl-	calcār-

單 數

				語尾
主格	mare	animal	calcar	-e 又は—
對格	mare	animal	calcar	-e 又は—
屬格	maris	animālis	calcāris	-is
與格	marī	animālī	calcārī	-ī
奪格	marī	animālī	calcārī	-ī

數 數

				語尾
主格	maria	animālia	calcāria	-ia
對格	maria	animālia	calcāria	-ia
屬格	(marium)	animālium	calcārium	-ium
與格	maribus	animālibus	calcāribus	-ibus
奪格	maribus	animālibus	calcāribus	-ibus

【708.】 第四種轉尾, u- 幹名詞.

exercitus, m., 軍隊. cornū, n., 角. domus, f., 家.  
 幹 exercitu- cornu- domu-  
 根 exercit- corn- dom-

		單		數		語尾	
				m.	n.		
主格	exercitus	cornū	-us	-a	domus		
對格	exercitum	cornū	-um	-a	domum		
屬格	exercitus	cornū	-us	-us	domus		
與格	exercitui (ū)	cornū	-ui (-ū)	-a	domui (-o)		
奪格	exercitu	cornū	-ū	-a	domo (-a)		

		複		數		語尾	
				m.	n.		
主格	exercitus	cornua	-ūs	-ua	domus		
對格	exercitus	cornua	-ūs	-ua	domūs (ūs)		
屬格	exercituum	cornuum	-uum	-uum	domōrum (-uum)		
與格	exercitibus	cornibus	-ibus	-ibus	domibus		
奪格	exercitibus	cornibus	-ibus	-ibus	domibus		

注意 domi '家の内に' domum '家へ', domo '家より'.

【709.】 第五種轉尾 ē- 幹名詞.

rēs, f., 事物. diēs, m., 日.

幹 rē-                      幹 diē-  
 根 r-                        根 di-

		單		數		語尾	
主格	rēs	diēs	-es				
對格	rem	diem	-em				

屬格	rēi	diēi	-ei
與格	rēi	diēi	-ei
奪格	rē	diē	-e

		複		數		語尾	
主格	rēs	diēs	-es				
對格	rēs	diēs	-es				
屬格	rērū	diērū	-erū				
與格	rēbus	diēbus	-ebus				
奪格	rēbus	diēbus	-ebus				

B. 希臘語風の名詞の轉尾.

【710.】 第一種轉尾の名詞で ē, ās, 又は ēs で終つてをるものは希臘語起源である. このやうな名詞は複數では § 697. の mēnsa の複數のやうに轉尾をするが, 單數では次のやうである.

epitomē, f., 撮要. Aenēās, m., 人名. pyritēs, m., 燧石.

(ἐπιτομή)                      (Αἰνεάς)                      (πυρίτης)

		單		數	
主格	epitomē	Aenēās	pyritēs		
呼格	epitomē	Aenēā	pyritē, pyrita		
對格	epitomēn	Aenēam, Aenēan	pyritēn		
屬格	epitomēs	Aenēae	pyritae		
與格	epitomae	Aenēae	pyritae		
奪格	epitomē	Aenēā	pyritē, pyrita		

【711.】 第二種轉尾の名詞で *os*, 又は *ōs* で終つてをるものは一般に男性(稀に女性)であり, *on* で終つてをるものは中性であつて, 何れも希臘語起源である. このやうな名詞は複數では一般に規則的で即ち *os* 又は *ōs* で終るものは § 698. の *dominus* の複數のやうに, *on* で終るものは § 699. の *bellum* の複數のやうに轉尾をするが, 單數では次のやうである. (但し, 屬格複數で語尾 *ōrum* の代りに *ōn* をもつことがある.)

	<b>Dēlos, f.,</b> (島の名) ( <i>Δῆλος</i> )	<b>Androgeōs, m.,</b> (人の名) ( <i>Ἀνδρόγεως</i> )	<b>Ilion, n.,</b> (都邑の名) ( <i>Ἴλιον</i> )
		單	數
主格	Dēlos	Androgeōs	Ilion
呼格	Dēle	Androgeōs	Ilion
對格	Dēlon	Androgeōn, Androgeō	Ilion
屬格	Dēli	Androgeō, Androgei	Ilii
與格	Dēlo	Androgeō	Iliō
奪格	Dēlo	Androgeō	Iliō

【712.】 第三種轉尾の多くの希臘名詞は羅句語ではその轉尾の方法は全く規則的即ち § 701. で説明した諸名詞の轉尾のやうである.

但し, 或る名詞は上に云ふたやうな規則的轉尾方法の語尾の外に, 尙希臘語の特有の語尾を保存してをるものがある. これは次の形で殊に著しい.

- 呼格單數の形が語幹と等しい:  
**Paris (人名), Pari;**    **Orpheus (人名), Orphen.**

- 對格單數の形が *a* で終る:  
**Pallas (女神の名), Pallada.**
- 屬格單數の形が *os* で終る:  
**Pallas (女神の名), Palladis, Pallados.**
- 主格複數の形が *es* で終る:  
**Arcas (アルカチア人), Arcades.**
- 對格複數の形が *as* で終る:  
**Arcas (アルカチア人), Arcadas.**

【713.】 次の例を見れば明白になる.

**lampas, f.** 炬火.    **Phryx, m. f.** フリギア人.    **hērōs, m.** 勇士.  
(*λαμπάς*)                      (*Φρύξ*)                      (*ἥρως*)

	單		數	
主格	lampas	Phryx	hērōs	
呼格	lampas	Phryx	hērōs	
對格	lampadem, lampada	Phrygem, Phryga	hērōem, hērōā,	
屬格	lampadis, lampados	Phrygis	hērōis	
與格	lampadi	Phrygi	hērōi	
奪格	lampade	Phryge	hērōe	
		複	數	
主格	lampades, lampades	Phrygēs, Phryges,	hērōēs, hērōes	
呼格	lampadēs, lampades	Phrygēs, Phryges,	hērōēs, hērōes	
對格	lampadēs, lampadas	Phrygēs, Phrygas,	hērōēs, hērōas	
屬格	lampadum	Phrygum	hērōum	
與格	lampadibus	Phrygibus	hērōibus	
奪格	lampadibus	Phrygibus	hērōibus	

注 震イ. *ō* で終る第三種轉尾の女性希臘名詞は, 屬格單數で *ūs* を,

その外の単数の格で *ō* を語尾として: **Didō** (女の名), **Didūs**, **Didō** etc. のやうに轉尾することがあり, 或は **on** で終る幹から規則的に造られて: **Didō**, **Didōnem**, **Didōnis**, **Didōni**, **Didōne** のやうに轉尾することもある.

注意口. 主格単数が **a**, 屬格單數が **atis** 又は **atos** で終つてゐる中性希臘名詞は, 屢々與格及び奪格の複數で **is** を語尾とし, 屬格複數で時々 **ōrum** を語尾とする: **poēma** (詩), **poēmatīs** 又は **poēmatibus**, **poēmatōrum** 又は **poēmatum**.

### C. 形 容 詞.

#### 第一種及び第二種轉尾の形容詞.

##### o- 及び ā- 幹.

【714.】(1) 男性主格單數が **-us** で終る形容詞.

**bonus**, 善良な. 幹 **bono-** m., n., **bonā-** f., 根 **bon-**

	單 數		
	男性	女性	中性
主 格	bonus	bona	bonum
對 格	bonum	bonam	bonum
屬 格	boni	bonae	boni
與 格	bonō	bonae	bonō
奪 格	bonō	bonā	bonō
	複 數		
主 格	boni	bonae	bona
對 格	bonōs	bonās	bona

屬 格	bonōrum	bonārum	bonōrum
與 格	bonis	bonis	bonis
奪 格	bonis	bonis	bonis

【715.】(2) 男性主格單數が **-er** で終る形容詞.

**liber**, 自由な. 幹 **libero-** m., n., **liberā-** f., 根 **liber-**  
**pulcher**, 美しい. 幹 **pulchro-** m., n., **pulchrā-** f., 根 **pulchr-**

	單 數					
	男 性		女 性		中 性	
主格	liber	pulcher	libera	pulchra	liberum	pulchrum
對格	liberum	pulchrum	liberam	pulchram	liberum	pulchrum
屬格	liberi	pulchri	liberae	pulchrae	liberi	pulchri
與格	liberō	pulchrō	liberae	pulchrae	liberō	pulchrō
奪格	liberō	pulchrō	liberā	pulchrā	liberō	pulchrō
	複 數					
主格	liberi	pulchri	liberae	pulchrae	libera	pulchra
對格	liberōs	pulchrōs	liberās	pulchrās	libera	pulchra
屬格	liberōrum	pulchrōrum	liberārum	pulchrārum	liberōrum	pulchrōrum
與格	liberīs	pulchrīs	liberīs	pulchrīs	liberīs	pulchrīs
奪格	liberīs	pulchrīs	liberīs	pulchrīs	liberīs	pulchrīs

#### 第三種轉尾の形容詞 I-幹.

【716.】(1.) 主格單數で男, 女性と中性と異なる語尾をもつもの,

**fortis**, **forte**, 勇敢な. 幹 **forti-** 根 **fort-**

	單 數		複 數	
	男性, 女性	中性	男性, 女性	中性
主 格	fortis	forte	fortēs	fortia
對 格	fortem	forte	fortēs	fortia
屬 格	fortis	fortis	fortium	fortium
與 格	forti	forti	fortibus	fortibus
奪 格	forti	forti	fortibus	fortibus

【717.】 (2.) 主格單數で三性共皆同一の語尾のもの,  
 audāx, 大膽な. 幹 audāci- 根 audāc-  
 sapiens, 賢い. 幹 sapienti- 根 sapient-

	單 數		複 數	
	男性	女性	男性	女性
主 格	audāx	sapiens	audāx	sapiens
對 格	audācem	sapientem	audāx	sapiens
屬 格	audācis	sapientis	audācis	sapientis
與 格	audāci	sapienti	audāci	sapienti
奪 格	audāci (-ē)	sapienti (-e)	audāci (-e)	sapienti (-e)

	複 數		中 性	
	男性	女性	男性	女性
主 格	audāces	sapientes	audācia	sapientia
對 格	audāces	sapientes	audācia	sapientia
屬 格	audācium	sapientium	audācium	sapientium
與 格	audācibus	sapientibus	audācibus	sapientibus
奪 格	audācibus	sapientibus	audācibus	sapientibus

【718.】 (3.) 主格單數で三性各々異なる語尾のもの,  
 a. ācer, ācris, ācre, 烈しい. 幹 ācri- 根 ācr-

	單 數			複 數		
	男性	女性	中性	男性	女性	中性
主 格	ācer	ācris	ācre	ācrēs	ācrēs	ācria
對 格	ācrem	ācrem	ācre	ācrēs (-is)	ācrēs (-is)	ācria
屬 格	ācris	ācris	ācris	ācrium	ācrium	ācrium
與 格	ācri	ācri	ācri	ācribus	ācribus	ācribus
奪 格	ācri	ācri	ācri	ācribus	ācribus	ācribus

b. celer, celeris, celere, 速かな. 幹 celeri- 根 celer-

	單 數			複 數		
	男性	女性	中性	男性	女性	中性
主 格	celer	celeris	celere	celerēs	celerēs	celeris
對 格	celerem	celerem	celere	celerēs	celerēs	celeris
屬 格	celeris	celeris	celeris	celorum	celorum	celorum
與 格	celeri	celeri	celeri	celeribus	celeribus	celeribus
奪 格	celeri	celeri	celeri	celeribus	celeribus	celeribus

【719.】 現在能相分詞の轉尾.

amāns, 愛する. 幹 amanti- 根 amanti-  
 iēns, 行く. 幹 ienti-, eunti- 根 ient-, eunt-

	單 數		複 數	
	男性, 女性	中性	男性, 女性	中性
主 格	amāns	iēns	amāns	iēns
對 格	amantem	euntem	amāns	iēns
屬 格	amantis	euntis	amantis	euntis
與 格	amanti	eunti	amanti	eunti
奪 格	amante	eunte	amante	eunte

	複 數			中 性	
	男性	女性			
主 格	amantēs	euntēs	amantia	euntia	
對 格	amantēs (-is)	euntēs (-is)	amantia	euntia	
屬 格	amantium	euntium	amantium	euntium	
與 格	amantibus	euntibus	amantibus	euntibus	
奪 格	amantibus	euntibus	amantibus	euntibus	

## D. 代名詞的形容詞.

【720.】 (1.) **tōtus**, 全くの. 幹 **tōto-** (男性, 中性),  
**tōtā-** (女性), 根 **tōt-**

	單 數			複 數		
	男性	女性	中性	男性	女性	中性
主 格	tōtus	tōta	tōtum	tōti	tōtae	tōta
對 格	tōtum	tōtam	tōtum	tōtōs	tōtās	tōta
屬 格	tōtius	tōtius	tōtius	tōtōrum	tōtārum	tōtōrum
與 格	tōti	tōti	tōti	tōtis	tōtis	tōtis
奪 格	tōtō	tōtā	tōtō	tōtis	tōtis	tōtis

【721.】 (2.) **alius**, 他の. 幹 **alio-** (男性, 中性),  
**aliā-** (女性), 根 **ali-**

	單 數			複 數		
	男性	女性	中性	男性	女性	中性
主 格	alius	alia	aliud	alii	aliae	alia
對 格	alium	aliam	aliud	alios	alias	alia

屬 格	alius	alius	alius	aliorum	aliarum	aliorum
與 格	alii	alii	alii	aliis	aliis	aliis
奪 格	alio	alia	alio	aliis	aliis	aliis

【722.】 (3.) **uter**, 何れの. 幹 **utro-** (男性, 中性),  
**utrā-** (女性), 根 **utr-**

	單 數			複 數		
	男性	女性	中性	男性	女性	中性
主 格	uter	utra	utrum	utri	utrae	utra
對 格	utrum	utram	utrum	utrōs	utrās	utra
屬 格	utrius	utrius	utrius	utrōrum	utrārum	utrōrum
與 格	utri	utri	utri	utris	utris	utris
奪 格	utrō	utra	utrō	utris	utris	utris

【723.】 (4.) **alter**, 他の方の. 幹 **altero-** (男性, 中性),  
**alterā-** (女性), 根 **alter-**

	單 數			複 數		
	男性	女性	中性	男性	女性	中性
主 格	alter	altera	alterum	alteri	alterae	altera
對 格	alterum	alteram	alterum	alterōs	alterās	altera
屬 格	alterius	alterius	alterius	alterōrum	alterārum	alterōrum
與 格	alteri	alteri	alteri	alteris	alteris	alteris
奪 格	alterō	alterā	alterō	alteris	alteris	alteris

## E. 形容詞及び副詞の比較法.

【724.】 形容詞の規則的比較法.

準 級	比 級		優 級			
	男性	男性, 女性	中性	男性	女性	中性
cārus (屬格單數 cārī), 親しい	cārīor	cārīus	cārīssimus,	-a,	-um	
liber (屬格單數 liberī), 自由な	liberīor	liberīus	liberrīmus,	-a,	-um	
pulcher (屬格單數 pulchrī), 美しい	pulchrīor	pulchrīus	pulcherrīmus,	-a,	-um	
brevis (屬格單數 brevis), 短かい	brevīor	brevīus	brevīssimus,	-a,	-um	
audāx (屬格單數 audācis), 大膽な	audācīor	audācīus	audācīssimus,	-a,	-um	
ācer (屬格單數 ācis), 烈しい	ācīor	ācīus	acerrīmus,	-a,	-um	
facilis (屬格單數 facilis), 容易な	facilīor	facilīus	facillīmus,	-a,	-um	

### 形容詞比級の轉尾.

【725.】 (1.) **brevior**, (何々)より短かい.

	單 數		複 數	
	男性, 女性	中性	男性, 女性	中性
主 格	brevior	brevius	breviores	breviora
對 格	breviorem	brevius	breviores	breviora
屬 格	brevioris	brevioris	breviorum	breviorum
與 格	breviori	breviori	brevioribus	brevioribus
奪 格	breviore	breviore	brevioribus	brevioribus

【726.】 (2.) **plus**, (何々)より多い.

	單 數		複 數	
	男性, 女性	中性	男性, 女性	中性
主 格	—	plūs	plūres	plūra
對 格	—	plūs	plūres (-is)	plūra
屬 格	—	plūris	plūrium	plūrium
與 格	—	—	plūribus	plūribus
奪 格	—	plūre	plūribus	plūribus

### 【727.】 形容詞の不規則的比較法.

	準 級		比 級		優 級			
	男性	女性	中性	男性, 女性	中性	男性	女性	中性
bonus, 善い	-a,	-um,	mellior	melius,	optimus,	-a,	-um	
malus, 悪い	-a,	-um,	pējor	pējus,	pessimus,	-a,	-um	
magnus, 大きな	-a,	-um,	mājor	mājus,	maximus,	-a,	-um	
parvus, 小さな	-a,	-um,	minor	minus,	minimus,	-a,	-um	
multus, 澤山な	-a,	-um,	—	plus,	plurimus,	-a,	-um	
multi, 多数の	-ae,	-a,	plūrēs	plūra,	plūrimi,	-ae,	-a	
juvenis (m. f.) 若い			jūnior	—	minimus,	-a,	-um	natū
senex (m. f.) 老いた			senior	—	maximus,	-a,	-um	natū
novus, 新しい	-a,	-um,	recentior	recentius	novissimus,	-a,	-um	
vetus, 古い	-a,	-um,	vetustior	vetustius	veterrimus,	-a,	-um	
exterus, 外部の	-a	-um,	exterior	exterius	extremus,	-a,	-um	extimus, -a, -um



inferus, -a, -um, 内部の	inferior	inferius	infimus, -a, -um	imus, -a, -um
posterus, -a, -um, 次の	posterior	posterius	postrēmus, -a, -um	postumus, -a, -um
superus, -a, -um, 上の	superior	superius	suprēmus, -a, -um	summus, -a, -um
propinquus, -a, -um, 近い	propior	propius	proximus, -a, -um	
(cis, citrā, 此の側に)	citerior	citerius	citimus, -a, -um	
(in, intrā, 中に)	interior	interius	intimus, -a, -um	
(prae, prō, 前に)	prior	prius	primus, -a, -um	
(prope, 附近に)	propior	propius	proximus, -a, -um	
(ultrā, 越へて)	ulterior	ulterius	ultimus, -a, -um	

【728.】 副詞の規則的比較法.

準 級	比 級	優 級
vērē (vērus), 眞實に	vērius	vērissimē
pulchrē (pulcher), 美しく	pulchrius	pulcherrimē
crēbrō (crēber), 屢々	crēbrius	crēberrimē
facile (facilis), 容易に	facilius	facilimē
brevitē (brevis), 簡単に	brevius	brevissimē

【729.】 副詞の不規則的比較法.

準 級	比 級	優 級
bene (bonus), 善く	melius	optimē
male (malus), 悪しく	pējus	pessimē
magnopere, 大いに	magis	maximē
multum (multus), 澤山に	plūs	plūrimum
{ nōn multum parum, 少し	minus	minimē
diū, 長き間 (時に就て)	diūtius	diūtissimē
nūper, 近頃	(欠)	nūperrimē

(欠)	potius	potissimum
prope, 傍に	propius	proximē
saepe, 屢々	saepius	saepissime

F. 數 詞.

【730.】 基本數詞 序數詞 箇別數詞 數詞的副詞

アラビ ア數字	羅馬 數字
1. ūnus, -a, -um	I.
2. duo, -ae, -o	II.
3. trēs, -ia	III.
4. quattuor	IV.
5. quīnque	V.
6. sex	VI.
7. septem	VII.
8. octō	VIII.
9. novem	IX.
10. decem	X.
11. ūndecim	XI.
12. duodecim	XII.
13. tredecim	XIII.
14. quattuordecim	XIV.
15. quīndecim	XV.
16. sēdecim	XVI.
17. septendecim	XVII.

















【758.】 不定法.

現在 monēre, 忠告する (to advise).	monēri, 忠告される (to be advised).
完了 monuisse, 忠告した (to have advised).	monitus, -a, -um esse, 忠告された (to have been advised).
未来 monitūrus, -a, -um esse, 將に忠告する (to be about to advise).	monitum iri, 將に忠告されんとす (to be about to be advised).

【759.】 分詞.

現在 monēns, -entis, 忠告する (advising).	現在 —
未来 monitūrus, -a, -um, 將に忠告しようとする (about to advise).	所相的形容詞 monendus, -a, -um, 忠告されるべき (to be advised).
完了 —	完了 monitus, -a, -um, 忠告された (having been advised, advised).

【760.】 動詞的中性名詞.

主格 —
對格 monendum, 忠告する事な (advising).
屬格 monendi, 忠告することの (of advising).
與格 monendō, 忠告する事に (for advising).
奪格 monendō, 忠告する事で (by advising).

【761.】 目的分詞(能相).

對格 monitum, 忠告するために (to advise).
奪格 monitū, 忠告するに (to advise, in the advising).

【762.】 (3.) 第三種活用. Ĕ-動詞. REGŌ, 私が支配する (I rule).

主要部 regō, regere, rēxi, rēctus.
現在幹 rege- 完了幹 rēx- 完了分詞幹 rēct-
能 相 所 相

【763.】 直說法.

	現	在	
	私が支配する (I rule, etc.)	私が支配される (I am ruled, etc.)	
regō (rege+ō)	regimus	regor	regimur
regis	regitis	regeris, -re	regimini
regit	regunt	regitur	reguntur

過 去

	私が支配した (I was ruling, etc.)	私が支配された (I was ruled, etc.)	
regēbam	regēbāmus	regēbar	regēbāmur
regēbās	regēbātis	regēbaris, -re	regēbāmini
regēbat	regēbant	regēbātur	regēbantur

未 來

	私が支配するだらう (I shall rule, etc.)	私が支配されるだらう (I shall be ruled, etc.)	
regam	regēmus	regar	regēmur
regēs	regētis	regēris, -re	regēmini
reget	regent	regētur	regentur

完了過去

	私が支配した (I have ruled, etc.)	私が支配された (I have been ruled, etc.)								
rēxi	rēximus	rēctus, -a, -um	<table border="0"> <tr> <td>sum</td> <td rowspan="3">rēcti, -ae, -a</td> <td>sumus</td> </tr> <tr> <td>es</td> <td>estis</td> </tr> <tr> <td>est</td> <td>sunt</td> </tr> </table>	sum	rēcti, -ae, -a	sumus	es	estis	est	sunt
sum	rēcti, -ae, -a	sumus								
es		estis								
est		sunt								
rēxisti	rēxistis									
rēxit	rēxerunt -re									

全分過去

私が支配した (I had ruled, etc.)      私が支配された (I had been ruled, etc.)

rēxeram	rēxerāmus	rēctus, -a, -um	erā erās erat	rēcti, -ae, -a	erāmus erātis erant
rēxerās	rēxerātis				
rēxerat	rēxerant				

未來完了

私が支配したたらう (I shall have ruled, etc.)      私が支配されたたらう (I shall have been ruled, etc.)

rēxerō	rēxerimus	rēctus, -a, -um	erō eris erit	rēcti, -ae, -a	erimus eritis erunt
rēxeris	rēxeritis				
rēxerit	rēxerint				

【764.】 接續法.

現在

regam	regāmus	regar	regāmur
regās	regātis	regāris, -re	regāmini
regat	regant	regātur	regantur

過去

regerem	regerēmus	regerer	regerēmur
regerēs	regerētis	regerēris, -re	regerēmini
regeret	regerent	regerētur	regerentur

完了過去

rēxerim	rēxerimus	rēctus, -a, -um	sim sis sit	rēcti, -ae, -a	simus sitis sint
rēxeris	rēxeritis				
rēxerit	rēxerint				

全分過去

rēxissem	rēxissemus	rēctus, -a, -um	essem essēs esset	rēcti, -ae, -a	essēmus essētis essent
rēxisse	rēxissetis				
rēxisset	rēxisset				

【765.】 命令法.

現在

rege (二人稱單數), 汝が支配せよ (rule thou).      regere (二人稱單數), 汝が支配されよ (be thou ruled).  
 regite (二人稱複數), 汝等が支配せよ (rule ye).      regimini (二人稱複數), 汝等が支配されよ (be ye ruled).

未來

regitō (二人稱單數), 汝が支配せよ (thou shalt rule).      regitor (二人稱單數), 汝が支配されよ (thou shalt be ruled).  
 regitō (三人稱單數), 彼が支配せよ (he shall rule).      regitor (三人稱單數), 彼が支配されよ (he shall be ruled).  
 regitōte (二人稱複數), 汝等が支配せよ (ye shall rule).  
 reguntō (三人稱複數), 彼等が支配せよ (they shall rule).      reguntor (三人稱複數), 彼等が支配されよ (they shall be ruled).

【766.】 不定法.

現在 regere, 支配する (to rule).      regi, 支配される (to be ruled).  
 完了 rēxisse, 支配した (to have ruled).      rēctus, -a, -um esse, 支配された (to have been ruled).  
 未來 rēcturus, -a, -um esse, 將に支配しようとする (to be about to rule).      rēctum iri, 將に支配されんとする (to be about to be ruled).

【767.】 分詞.

現在 regēns, -entis, 支配する (ruling).	現在 ———
未來 rēcturus, -a, -um 將に支配しようとする (about to rule).	所相的形容詞 regendus, -a, -um, 支配されるべき (to be ruled).
完了 ———	完了 rēctus, -a, -um, 支配された (having been ruled, ruled).

【768.】 動詞的中性名詞.

主格 ———
對格 regendum, 支配する事な (ruling).
屬格 regendi, 支配する事の (of ruling).
與格 regendō, 支配する事に (for ruling).
奪格 regendō, 支配する事で (by ruling).

【769.】 目的分詞(能相).

對格 rēctum, 支配するために (to rule).
奪格 rēctū, 支配するに (to rule, in the ruling).

【770.】 (4.) 第四種活用. ī-動詞. AUDIŌ, 私が聞く (I hear).

主要部 audiō, audire, audivi, auditus.  
 現在幹 audi- 完了幹 audiv- 完了分詞幹 audit-  
 能 相 所 相

【771.】 直說法.

現在	現在
私が聞く (I hear, etc.)	私が聞かれる (I am heard, etc.)
audio audīmus	audior audīmur

audis	auditis	audiris, -re	audimini
audit	audiunt	auditur	audiuntur

過 去

私が聞いた (I was hearing, etc.)	私が聞かれた (I was heard, etc.)
audiebam audiebamus	audiebar audiebamur
audiebas audiebatis	audiebaris, -re audiebamini
audiebat audiebant	audiebatur audiebantur

未 來

私が聞くだらう (I shall hear, etc.)	私が聞かれるだらう (I shall be heard, etc.)
audiam audiemus	audiar audiemur
audies audietis	audieris, -re audiemini
audiet audient	audietur audientur

完了過去

私が聞いた (I have heard, etc.)	私が聞かれた (I have been heard, etc.)
audivi audivimus	auditus, { sum } { sumus
audivisti audivistis	{ es } { estis
audivit audiverunt, -re	{ -a, -um } { est } { sunt

全分過去

私が聞いた (I had heard, etc.)	私が聞かれた (I had been heard, etc.)
audiveram audiveramus	auditus, { eram } { eramus
audiverās audiverātis	{ erās } { erātis
audiverat audiverant	{ -a, -um } { erat } { erant

未 來 完 了

私が聞いただらう 私が聞かれただらう  
(I shall have heard, etc.) (I shall have been heard, etc.)

audiverō	audiverimus	auditus, -a, -um	{	erō	auditi, -ae, -a	{	erimus
audiveris	audiveritis			eris			eritis
audiverit	audiverint			erit			erunt

【772.】 接續法.

現 在

audiam	audiamus	audiar	audiamur
audiās	audiātis	audiāris, -re	audiāmini
audiat	audiant	audiātur	audiantur

過 去

audirem	audirēmus	audirer	audirēmur
audirēs	audirētis	audirēris, -re	audirēmini
audiret	audirent	audiretur	audirentur

完 了 過 去

audiverim	audiverimus	auditus, -a, -um	{	sim	auditi, -ae, -a	{	simus
audiveris	audiveritis			sis			sitis
audiverit	audiverint			sit			sint

全 分 過 去

audivissem	audivissemus	auditus, -a, -um	{	essem	auditi, -ae, -a	{	essemus
audivissēs	audivissētis			essēs			essētis
audivisset	audivissent			esset			essent

【773.】 命令法.

現 在

audi (二人稱單數), 汝が聞けよ (hear thou).	audire (二人稱單數), 汝が聞かれよ (be thou heard).
-------------------------------------	--------------------------------------------

audite (二人稱複數), 汝等が聞  
けよ (hear ye).

audimini (二人稱複數), 汝等が聞  
かれよ (be ye heard).

未 來

auditō (二人稱單數), 汝が聞け  
よ (thou shalt hear).

auditor (二人稱單數), 汝が聞かれ  
よ (thou shalt be heard).

auditō (三人稱單數), 彼が聞け  
よ (he shall hear).

auditor (三人稱單數), 彼が聞かれ  
よ (he shall be heard).

audītōte (二人稱複數), 汝等が  
聞けよ (ye shall hear).

—

audiunto (三人稱複數), 彼等が  
聞けよ (they shall hear).

audiuntor (三人稱複數), 彼等が聞  
かれよ (they shall be heard).

【774.】 不定法.

現在 audire, 聞く (to hear).

audiri, 聞かれる (to be heard).

完了 audivisse, 聞いた (to  
have heard).

auditus, -a, -um esse, 聞かれた (to  
have been heard).

未 來 auditurus, -a, -um  
esse, 將に聞かうとする (to  
be about to hear).

auditam iri, 將に聞かれようとする  
(to be about to be heard).

【775.】 分詞.

現在 audiens, -entis, 聞く  
(hearing).

現 在 —

未 來 auditurus, -a, -um, 將に  
聞かうとする (about to hear).

所相的形容詞 audiendus, -a, -um, 聞  
かれるべき (to be heard).

完了 —

完 了 auditus, -a, -um, 聞か  
れた (having been heard, heard).

【776.】 動詞的中性名詞.

主 格 —

對 格

audiendum, 聞く事を (hearing).



完了過去

cēperim, cēperis, cēperit, etc. captus, -a, -um sim, sis, sit, etc.

全分過去

cēpisse, cēpissēs, cēpisset, etc. captus, -a, -um essem, essēs, esset, etc.

【781.】 命令法.

現在

cape (二人稱單數), 汝が捕へよ (catch thou). capere (二人稱單數), 汝が捕へられよ (be thou caught). capite (二人稱複數), 汝等が捕へよ (catch ye). capimini (二人稱複數), 汝等が捕へられよ (be ye caught).

未來

capitō (二人稱單數), 汝が捕へよ (thou shalt catch). capitor (二人稱單數), 汝が捕へられよ (thou shalt be caught). capitō (三人稱單數), 彼が捕へよ (he shall catch). capitor (三人稱單數), 彼が捕へられよ (he shall be caught). capitote (二人稱複數), 汝等が捕へよ (ye shall catch). capiuntō (三人稱複數), 彼等が捕へよ (they shall catch). capiuntor (三人稱複數), 彼等が捕へられよ (they shall be caught).

【782.】 不定法.

現在 capere, 捕へる (to catch). captus, -a, -um esse, 捕へられた (to have been caught). 完了 cēpisse, 捕へた (to have caught). captus, -a, -um esse, 捕へられた (to have been caught). 未來 capturus, -a, -um esse, 將に捕へんとする (to be about to catch). captum iri, 將に捕へられんとする (to be about to be caught).

【783.】 分詞.

現在 capiens, -ientis, 捕へる (catching). 現在 ——— 所相的形容詞 capiendus, -a, -um, 捕へられるべき (to be caught). 未來 capturus, -a, -um, 將に捕へる (about to catch). 完了 captus, -a, -um, 捕へられた (having been caught, caught).

【784.】 動詞的中性名詞.

對格 capiendum, etc. 捕へる事 (catching).

【785.】 目的分詞(能相).

對格 captum, 捕へるために (to catch). 奪格 captu, 捕へるに (to catch, in the catching).

I. 形式所相動詞.

【786.】 主要部

- I. hortor, hortāri, hortātus sum, 私が勵ます (I urge). II. vereor, verēri, veritus sum, 私が恐れる (I fear). III. sequor, sequi, secūtus sum, 私が隨ふ (I follow). IV. partior, partiri, partitus sum, 私が分ける (I divide).

注意 形式所相動詞では, 所相的の活用の形の外に若干の能相の形を使ふ事がある. 此の種類形には下の表で \* で標がつけてある. 第三種活用の -iō で終る形式所相動詞は上の capiō の所相の形のやうに活用する.

【787.】直說法.

	現	在	
私が勵ます (I urge.)	私が恐れる (I fear.)	私が隨ふ (I follow.)	私が分ける (I divide.)
hortor,	vereor,	sequor,	partior,
hortāris, -re,	verēris, -re,	sequeris -re,	partiris, -re,
hortātur	verētur	sequitur	partitur
hortāmur	verēmur	sequimur	partimur
hortāmini	verēmini	sequimini	partimini
hortantur	verentur	sequuntur	partiuntur
	過	去	
hortābar, etc.	verēbar, etc.	sequēbar, etc.	partēbar, etc.
	未	來	
hortābor, etc.	verēbor, etc.	sequar, etc.	partiar, etc.
	完	了	過去
hortātus sum, etc.	veritus sum, etc.	secūtus sum, etc.	partitus sum, etc.
	全	分	過去
hortātus eram, etc.	veritus eram, etc.	secūtus eram, etc.	partitus eram etc.
	未	來	完了
hortātus erō, etc.	veritus erō, etc.	secūtus erō, etc.	partitus erō, etc.

【788.】接續法.

	現	在	
horter, etc.	verear, etc.	sequar, etc.	partiar, etc.
	過	去	
hortārer, etc.	verērer, etc.	sequerer, etc.	partirer, etc.
	完	了	過去
hortātus sim, etc.	veritus sim, etc.	secūtus sim, etc.	partitus sim, etc.

全分過去

hortātus essem, etc. veritus essem, etc. secūtus essem, etc. partitus essem, etc.

【789.】命令法.

	現	在	
hortāre, etc.	verēre, etc.	sequere, etc.	partire, etc.
	未	來	
hortātor, etc.	verētor, etc.	sequitor, etc.	partitor, etc.

【790.】不定法.

	現	在	
hortārī	verēri	sequi	partiri
	完	了	
hortātus,	veritus,	secūtus,	partitus,
-a, -um esse	-a, -um esse	-a, -um esse	-a, -um esse
	未	來	
*hortātūrus,	*veritūrus,	*secūtūrus,	*partitūrus,
-a, -um esse	-a, -um esse	-a, -um esse	-a, -um esse

【791.】分詞.

	現	在	
*hortāns	*verēns	*sequēns	*partiēns
	未	來	
*hortātūrus,	*veritūrus,	*secūtūrus,	*partitūrus,
-a, -um	-a, -um	-a, -um	-a, -um
	完	了	
hortātus, -a, -um	veritus, -a, -um	secūtus, -a, -um	partitus, -a, -um
	所相的	形容詞	
hortandus,	verendus,	sequendus,	partiendus,
-a, -um	-a, -um	-a, -um	-a, -um

【792.】 動詞的中性名詞.

\*hortandum, etc. \*verendum, etc. \*sequendum, etc. \*partiendum, etc.

【793.】 目的分詞.

\*hortatum, -ū \*veritum, -ū \*secutum, -ū \*partitum, -ū

J. 不規則動詞.

【794.】 (I.) sum, 私がある (I am).

主要部 sum, esse, fui, futurus.

現在幹 es- 完了幹 fu- 完了分詞幹 fut-

【795.】 直說法.

	現	在	
	單	數	複
	數		數
sum, 私がある (I am).			sumus, 我等がある (we are).
es, 汝がある (thou art).			esitis, 汝等がある (you are).
est, 彼がある (he, she, it is).			sunt, 彼等がある (they are).
	過	去	
eram, 私があつた (I was).			eramus, 我等があつた (we were).
erās etc.			erātis etc.
erat			erant
	未	來	
erō, 私があるだらう (I shall be).			erimus, 我等があるだらう (we shall be).
eris etc.			eritis etc.
erit			erunt

完了過去

fui, 私があつた (I have been, was).	fuimus, 我等があつた (we have been, were).
fuisti etc.	fuistis etc.
fuit	fuērunt, fuere

全分過去

fueram, 私があつた (I had been).	fuērāmus, 我等があつた (we had been).
fuērās etc.	fuērātis etc.
fuerat	fuērāt

未來完了

fuero, 私があつただらう (I shall have been).	fuērimus, 我等があつただらう (we shall have been).
fuēris etc.	fuēritis etc.
fuērit	fuērint

【796.】 接續法.

	現	在		過	去
sim	simus	essem	essēmus		
sis	sitis	essēs	essētis		
sit	sint	esset	essent		

完了過去

fuērim	fuērimus	fuissem	fuissēmus
fuēris	fuēritis	fuissēs	fuissētis
fuērit	fuērint	fuisset	fuissent

全分過去

【797.】 命令法.

	現	在
es (二人稱單數), 汝があれ (be thou).		
este (二人稱複數), 汝等があれ (be ye).		



未 來

estō (二人稱單數), 汝があれ (thou shalt be).  
 estō (三人稱單數), 彼があれ (he shall be).  
 estōte (二人稱複數), 汝等があれ (ye shall be).  
 suntō (三人稱複數), 彼等があれ (they shall be).

【798.】不定法.

現在 esse, ある (to be).  
 完了 fuisse, あつた (to have been).  
 未來 futurus, -a, -um esse, 或は fore, 將にあらんとする (to be about to be).

【799.】分詞.

futurus, -a, -um, 將にある (about to be).

【800.】(2.) Possum, 私ができる (I can, am able).

主要部 possum, posse, potui, ——

【801.】直說法.

	單 數	複 數
現 在	possum, 私ができる (I can).	possumus, 我等ができる (we can).
	potes etc.	potestis etc.
	potest	possunt
過 去	poteram, etc.	poterāmus, etc.
未 來	poterō, etc.	poterimus, etc.
完了過去	potui, etc.	potuimus, etc.
全分過去	potueram, etc.	potuerāmus, etc.
未來完了	potuerō, etc.	potuerimus, etc.

【802.】接續法.

	單 數	複 數
現 在	possim	possimus

	possis	possitis
	possit	possint
過 去	possem, etc.	possēmus, etc.
未 來	——	——
完了過去	potuerim, etc.	potuerimus, etc.
全分過去	potuissem, etc.	potuissēmus, etc.
未來完了	——	——

【803.】不定法.

現在 posse 完了 potuisse

【804.】分詞.

現在 potēns, -entis. (形容詞として‘勢のある’の義に用ひられる).

【805.】(3.) prōsum, 私に役立つ (I benefit).

主要部 prōsum, prōdesse, prōfui, prōfuturus.

現在幹 prōdes- 完了幹 prōfu- 完了分詞幹 prōfut-

【806.】直說法.

	單 數	複 數
現 在	prōsum, 私に役立つ (I benefit).	prōsumus, 我等に役立つ (we benefit).
	prōdes etc.	prōdestis
	prōdest	prōsunt
過 去	prōderam, etc.	prōderāmus, etc.
未 來	prōderō, etc.	prōderimus, etc.
完了過去	prōfui, etc.	prōfuimus, etc.
全分過去	prōfueram, etc.	prōfuerāmus, etc.
未來完了	prōfuerō, etc.	prōfuerimus, etc.

【807.】接續法.

	單 數	複 數
現 在	prōsim	prōsimus

	prōsis	prōsitis
	prōsiit	prōsint
過去	prōdessem, etc.	prōdessemus, etc.
未來	—	—
完了過去	prōfuerim, etc.	prōfuerimus, etc.
全分過去	prōfuissem, etc.	prōfuissemus, etc.
未來完了	—	—

【808.】 命令法.

現在	prōdes (二人稱單數), 汝が役立てよ (benefit thou).
	prōdeste (二人稱複數), 汝等が役立てよ (benefit ye).
未來	prōdestō (二人稱單數), 汝が役立てよ (thou shalt benefit).
	prōdestōte (二人稱複數), 汝等が役立てよ (ye shall benefit).

【809.】 不定法.

現在	prōdesse,	完了	prōfuisse,	未來	prōfuturus, -a, -um.
----	-----------	----	------------	----	----------------------

【810.】 分詞.

未來	prōfuturus, -a, -um.
----	----------------------

【811.】 (4.) volō, nōlō, mālō.

主要部	{	volō, velle, volui, —, 私が欲する (I wish, will, am willing).
		nōlō, nōlle, nōlui, —, 私が欲せぬ (I am unwilling, will not).
		mālō, malle, mālui, —, 私がもつと欲する (I am more willing, prefer).

【812.】 直說法.

	單 數		
現在	volō, 私が欲する (I wish, will, am willing).	nōlō, 私が欲せぬ (I am unwilling, will not).	mālō, 私がもつと欲する (I am more willing, I prefer).

vīs etc.	nōn vīs	māvīs
vult	nōn vult	māvult

複 數

volumus	nōlumus	mālumus
vultis	nōn vultis	māvultis
volunt	nōlunt	mālunt

過去	volēbam, etc.	nōlēbam, etc.	mālēbam, etc.
未來	volam, volēs, etc.	nōlam, nōlēs, etc.	mālam, mālēs, etc.
完了過去	volui, etc.	nōlui, etc.	mālui, etc.
全分過去	volueram, etc.	nōlueram, etc.	mālueram, etc.
未來完了	voluerō, etc.	nōluerō, etc.	māluerō, etc.

【813.】 接續法.

單 數

現在	velim	nōlim	mālim
	velis	nōlis	mālis
	velit	nōlit	mālit

複 數

	velimus	nōlimus	mālimus
	velitis	nōlitis	mālitis
	velint	nōlint	mālint
過去	veliem, etc.	nōliem, etc.	māliem, etc.
完了過去	voluerim, etc.	nōluerim, etc.	māluerim, etc.
全分過去	voluissem, etc.	nōluissem, etc.	māluissem, etc.

【814.】 命令法.

現在	—	nōli (二人稱單數), 汝が欲するな (be thou unwilling).	—
		nōlite (二人稱複數),	
未來	—	nōlitō (二人稱單數),	—
		nōlitō (三人稱單數),	

nōlitōte (二人稱複數),  
nōluntō (三人稱複數),

【815.】 不定法.

現在	velle, 欲する (to wish),	nōlie, 欲せぬ (to be unwilling),	mālie, もつと欲する (to be more willing.)
完了	voluisse, 欲した (to have wished),	nōluisse, 欲しなかつた (to have been unwilling),	māluisse, もつと欲した (to have been more willing).

【816.】 分詞.

現在	volēns, -entis 欲する (wishing),	nōlēns, -entis 欲せぬ (being unwilling),	—
----	----------------------------------	------------------------------------------	---

【817.】 (5.) ferō, 私が運ぶ (I bear, carry, endure).

主要部 ferō, ferre, tuli, lātus.

現在幹 fer- 完了幹 tul- 完了分詞幹 lāt-

【818.】 直説法.

	能 相	所 相
現在	ferō, 私が運ぶ, 忍ぶ (I bear, carry, endure).	ferimus feror, 私が運ば れる (I am carried).
	fers fert	fertis ferunt fertur feruntur
過去	ferēbam, etc.	ferēbar, etc.
未來	ferām, ferēs, etc.	ferar, ferēris, etc.
完了過去	tulī, etc.	lātus, -a, -um sum, etc.
全分過去	tuleram, etc.	lātus, -a, -um eram, etc.
未來完了	tulerō, etc.	lātus, -a, -um erō, etc.

【819.】 接續法.

現在	feram, ferās, etc.	ferar, ferāris, etc.
過去	ferrem, etc.	ferrer, etc.

完了過去	tulerim, etc.	lātus, -a, -um sim, etc.
全分過去	tulissem, etc.	lātus, -a, -um essem etc.

【820.】 命令法.

現在	二人稱 fer, 汝が運 べよ (carry thou).	ferre, 汝が運ばれよ (be thou carried).	ferimini
未來	二人稱 fertō 三人稱 fertō	featōte feruntō fertor feruntor	fertor feruntor

【821.】 不定法.

現在	ferre, 運ぶ (to carry).	ferri, 運ばれる (to be carried).
完了	tulisse etc.	lātus, -a, -um esse etc.
未來	lāturus, -a, -um esse	lātum iri

【822.】 分詞.

現在	ferēns, -entis, 運 ぶ (carrying).	現在 ——— 所相的形容詞 ferendus, -a, -um
未來	lāturus, -a, -um.	運ばれるべき (to be carried).
完了	———	完了 lātus, -a, -um 運 ばれる (carried).

【823.】 動詞的中性名詞.

主 格	———
對 格	ferendum, 運ぶ事を (carrying).
屬 格	ferendi etc.
與 格	ferendō
奪 格	ferendō

【824.】 分詞.

對 格	lātum, 運ぶために (to carry).
奪 格	lātu, 運ぶに (to carry, in the carrying).

【825.】 (6.) eō, 私が行く (I go).

主要部 eō, ire, īi (ivī), itum (目的分詞).

現在幹 i- 完了幹 i- 又は iv- 完了分詞幹 it-

【826.】 直説法.

	單 數		複 數			
現 在	eō, 私が行く (I go).	is	it	imus	itis	eunt
過 去	ibam etc.	ibās	ibat	ibāmus	ibātis	ibant
未 來	ibō	ibis	ibit	ibimus	ibitis	ibunt
完了過去	ii	istī	iit	imus	istis	ierunt 又 (iere)
全分過去	ieram	ierās	ierat	ierāmus	ierātis	ierant
未來完了	iero	ieris	ierit	ierimus	ieritis	ierint

【827.】 接續法.

現 在	eam	eās	eat	eāmus	eātis	eant
過 去	irem	irēs	iret	irēmus	irētis	irent
完了過去	ierim	ieris	ierit	ierimus	ieritis	ierint
全分過去	issem	issēs	isset	issēmus	issētis	issent

【828.】 命令法.

現 在	i (二人稱單數), 汝が行け (go thou).	ite (二人稱複數),
未 來	itō (二人稱單數), etc. itō (三人稱單數),	itōte (二人稱複數), euntō (三人稱複數),

【829.】 不定法.

現 在	ire, 行く (to go).
完 了	isse etc.
未 來	iturus, -a, -um esse.

【830.】 分詞.

iens, 行く (going), 屬格 euntis.

所相的形容詞 eundum, 行かれるべき (to be gone).

未 來 iturus, -a, -um

【831.】 動詞的中性名詞.

主 格	—
對 格	eundum, 行く事な (going).
屬 格	eundi etc.
與 格	eundo
奪 格	eundo

【832.】 目的分詞.

對 格 itum, 行くために (to go).

奪 格 itū, 行くに (to go, in the going).

注 意イ. 動詞 eō は所相形の三人稱單數で非人稱的に用ひられる,  
itur, itum est, etc

注 意ロ. 完了過去の形では v は通常落される.

【833.】 (7.) fiō, 私になる, えられる, 起る (I become,  
am made, happen).

主要部 fiō, fieri, factus sum.

【834.】 直説法.

	單 數	複 數
現 在	fiō, fis, fit, 私になる (I become). etc.	(fimus), (fitis), fiunt
過 去	fiebam, etc.	fiebamus, etc.
未 來	fiam, etc.	fiemus, etc.
完了過去	factus, -a, -um sum, etc.	facti, -ae, -a sumus, etc.
全分過去	factus, -a, -um eram, etc.	facti, -ae, -a eramus, etc.
未來完了	factus, -a, -um erō, etc.	facti, -ae, -a erimus, etc.

## 【835.】 接続法.

現在	fiam, etc.	fiāmus, etc.
過去	fierem, etc.	fierēmus, etc.
完了過去	factus, -a, -um sim, etc.	facti, -ae, -a simus, etc.
全分過去	factus, -a, -um essem, etc.	facti, -ae, -a essēmus, etc.

## 【836.】 命令法.

現在	fi (二人稱單數), 汝がなれ (become thou).
	fite (二人稱複數), 汝等がなれ (become ye).

## 【837.】 不定法.

現在	feri, なる (to become).
完了	factus, -a, -um esse, etc.
未來	factum iri

## 【838.】 分詞.

完了	factus, -a, -um, なつた (to have become), なされた (to have been made).
所相的形容詞	faciendus, -a, -um, なるべき (to become), なさるべき (to be made).

## 附 録 IV.

## 【839.】 動詞の主要部.

注 意 次の表は各種の活用の大切な不規則動詞 (即ち各種の活用の標準的のもの——以下の表で黒字で示す——と異なる方法で完了過去と完了分詞を作るもの) と, 不規則動詞となを包含する. (處々に標準的の動詞と同じ風の活用をするものも入れてある).

## A.

abdō, -ere, abdid-ī, abdit-us,	除く.
abigō, -ere, abēg-ī, abact-us,	驅逐する.
abnuō, -ere, abnu-ī, abnuit-us 又は abnūt-us,	拒む.
aboleō, -ēre, abolēv-ī, abolit-us,	毀つ.
accendō, -ere, accend-ī, accēns-us,	燃す.
accumbō, -ere, accubu-ī, accubit-us,	横になる (食卓で).
acuō, -ere, acu-ī, acūt-us,	尖らす.
addō, -ere, addid-ī, addit-us,	加へる.
adimō, -ere, adēm-ī, adempt-us,	取り去る.
adipiscor, -ī, adept-us sum,	獲得する.
adolēscō, -ere, adolēv-ī, adult-us,	成長する.
adstō, -āre, adstit-ī, —,	側に立つ.
affligō, -ere, afflix-ī, afflicto-us,	打つ.
āgnōscō, -ere, āgnōv-ī, āgnit-us,	認識する.
agō, -ere, ēgī, act-us,	驅る.
algeō, -ēre, als-ī, —,	寒い.

alō, -ere, alu-ī, alt-us 又は alit-us, 育てる.  
 amiciō, -ire, amicu-ī 又は amix-ī, amict-us, 包む.  
**amō, -āre, amāv-ī, amāt-us, 愛する.**  
 amplector, -ī, amplex-us sum, 抱く.  
 aperiō, -ire, aperu-ī, apert-us, 開く.  
 arceō, -ēre, arcu-ī, arct-us, 防ぐ.  
 arcēssō, -ere, arcēssiv-ī, arcēssit-us, 召喚する.  
 ārdeō, -ēre, ārs-ī, ārs-us, 燃やす.  
 arguō, -ere, argu-ī, argūt-us, 告訴する.  
 āscendō, -ere, āscend-ī, āscēns-us, 登る.  
 assentior, -īrī, assēns-us sum, 同意する.  
 audeō, -ēre, aus-us sum, 敢てする.  
**audiō, -ire, audiv-ī, audīt-us, 聞く.**  
 augeō, -ēre, aux-ī, auct-us, 増す.

## B.

bibō, -ere, bib-ī, (pōt-us), 飲む.

## C.

cadō, -ere, cecid-ī, cās-us, 落ちる.  
 caedō, -ere, cecid-ī, caes-us, 切る.  
 calleō, -ēre, call-uī, —, 巧である.  
 canō, -ere, cecin-ī, cant-us, 歌ふ.  
 capessō, -ere, capessiv-ī, capessit-us, 掴む.

capiō, -ere, cēp-ī, capt-us, 捕へる.  
 carpō, -ere, carps-ī, carpt-us, 摘む.  
 caveō, -ēre, cāv-ī, caut-us, 用心する.  
 cēdō, -ere, cēss-ī, cēss-us, 譲る.  
 cēnsēō, -ēre, cēnsu-ī, cēns-us, 評価する.  
 cernō, -ere, crēv-ī, crēt-us, 識別する.  
 cieō, -ēre, civ-ī, cit-us, 動かす.  
 cingō, -ere, cīnx-ī, cinct-us, 帯びる.  
 circumdō, -āre, circumded-ī, circumdat-us, 圍む.  
 claudō, -ere, claus-ī, claus-us, 閉ぢる.  
 cōgnōscō, -ere, cōgnōv-ī, cōgnit-us, 認める.  
 cōgō, -ere, coēg-ī, coact-us, 強ひる.  
 colligō, -ere, collēg-ī, collēct-us, 集める.  
 colō, -ere, colu-ī, cult-us, 耕やす.  
 comminiscor, -ī, comment-us sum, 考案する.  
 cōmō, -ere, cōmps-ī, cōmpt-us, 飾る.  
 comperiō, -ire, comper-ī, compert-us, 學ぶ.  
 compēscō, -ere, compēscu-ī, —, 制限する.  
 compingō, -ere, compēg-ī, compāct-us, 束ねる.  
 compleō, -ēre, complēv-ī, complēt-us, 充たす.  
 compungō, -ere, compūnx-ī, compunct-us, 刺す.  
 concinō, -ere, concinu-ī, —, 合唱する.  
 conciō, -ire, conciv-ī, concit-us, 召集する.  
 concutiō, -ere, concuss-ī, concuss-us, 激しく振ふ.  
 condō, -ere, condid-ī, condit-us, 一所に置く.

cōficiō, -ere, cōfēc-ī, cōfect-us, 完成する。  
 cōfiteor, -ērī, cōfess-us sum, 告白する。  
 congruō, -ere, congru-ī, —, 一致する。  
 cōniveō, -ēre, cōnix-ī, —, 目くばせする。  
 cōnserō, -ere, cōnsēv-ī, cōnsit-us, 蒔く。  
 cōnserō, -ere, cōnseru-ī, cōnsert-us, 纏ふ。  
 cōnspiciō, -ere, cōnspex-ī, cōnspect-us, 見る。  
 cōnstituō, -ere, cōnstitu-ī, cōnstitūt-us, 決定する。  
 cōnstō, -āre, cōnstit-ī, cōnstāt-us, 成り立つ。  
 cōnsulō, -ere, cōnsulu-ī, cōnsult-us, 相談する。  
 contemnō, -ere, contemps-ī, contempt-us, 輕蔑する。  
 coquō, -ere, cox-ī, coct-us, 煮る。  
 corrigō, -ere, corrēx-ī, corrēct-us, 校正する。  
 crēdō, -ere, crēdid-ī, crēdit-us, 信する。  
 crepō, -āre, crepu-ī, crepit-us, 軋む。  
 crēscō, -ere, crēv-ī, crēt-us, 成長する。  
 cubō, -āre, cubu-ī, cubit-us, 横になる。  
 cūdō, -ere, cūd-ī, cūs-us, 打つ。  
 cupiō, -ere, cupiv-ī, cupit-us, 欲する。  
 currō, -ere, cucurr-ī, curs-us, 走る。

## D.

dēdicō, -āre, dēdicāv-ī, dēdicāt-us, 奉獻する。  
 dēfendō, -ere, dēfend-ī, dēfens-us, 防ぐ。

dēfeticor, -i, dēfess-us sum, 疲れる。  
 dēleō, -ēre, dēlēv-ī, dēlēt-us, 毀つ。  
 dēligō, -ere, dēlēg-ī, dēlēt-us, 選ぶ。  
 dēmō, -ere, dēmps-ī, dēmpit-us, 取り去る。  
 dēsiliō, -ire, dēsilu-ī, dēsult-us, 跳び下る。  
 dicō, -ere, dixi, dictus, 言ふ。  
 diligō, -ere, dilēx-ī, dilēct-us, 愛する。  
 diripiō, -ere, diripu-ī, dirept-us, 引裂く。  
 discō, -ere, didic-ī, —, 學ぶ。  
 dividō, -ere, divis-ī, divis-us, 分つ。  
 dō, -āre, ded-ī, dat-us, 與へる。  
 doceō, -ēre, docu-ī, doct-us, 教へる。  
 domō, -āre, domu-ī, domit-us, 馴らす。  
 dūcō, -ere, dūx-ī, duct-us, 導く。

## E.

edō, -ere, ēd-ī, ēs-us, 食ふ。  
 ēdō, -ere, ēdid-ī, ēdit-us, 公にする。  
 ēducō, -āre, ēducāvī, ēducāt-us, 教へる。  
 ēducō, -ere, ēdūx-ī, ēduct-us, 導き出る。  
 egeō, -ēre, egu-ī, —, 缺く。  
 ēliciō, -ere, ēlicu-ī, ēlicit-us, 誘ひだす。  
 emō, -ere, em-ī, empt-us, 買ふ。  
 eō, ire, ivi 又は ii, (itūrus), 行く。

ēvādō, -ere, ēvās-ī, ēvās-us, 出る。  
 exciō, -ire, exciv-ī, excit-us, 呼び出す。  
 expergiscor, -ī, experrēct-us sum, 醒める。  
 exper-ior, -iri, expert-us sum, 試みる。  
 exstinguō, -ere, exstinx-ī, extinct-us, 消す。  
 exuō, -ere, exu-ī, exūt-us, 脱ぐ。

## F.

facessō, -ere, facessiv-ī, facessit-us, 熱中する。  
 faciō, -ere, feci, fact-us, 作る。  
 fallō, -ere, fefell-ī, fals-us, 欺く。  
 farciō, -ire, fars-ī, fart-us, 填充する。  
 fateor, -ēri, fass-us sum, 白状する。  
 favēō, -ēre, fāv-ī, faut-us, 惠愛する。  
 feriō, -ire, (percuss-ī), (percuss-us), 打つ。  
 ferō, ferre, tuli, lātus, 運ぶ。  
 ferveō, -ēre, ferv-ī 又は ferbu-ī, —, 沸騰する。  
 fidō, -ere, fis-us sum, 信賴する。  
 figō, -ere, fix-ī, fix-us, 定める。  
 findō, -ere, fid-ī, fiss-us, 裂く。  
 fingō, -ere, finx-ī, fict-us, 造る。  
 fiō, fieri, fact-us sum, なる。  
 flectō, -ere, flex-ī, flex-us, 曲げる。  
 fleō, -ēre, flēv-ī, flēt-us, 泣く。  
 flōreō, -ēre, flōru-ī, —, 榮へる。

fluō, -ere, flūx-ī, flūx-us, 流れる。  
 fodiō, -ere, fōd-ī, foss-us, 堀る。  
 foveō, -ēre, fōv-ī, fōt-us, 撫育する。  
 frangō, -ere, frēg-ī, frāct-us, 破碎する。  
 fremō, -ere, fremu-ī, fremit-us, 唸る。  
 fricō, -āre, fricu-ī, frict-us, 摩る。  
 frigeō, -ēre, frix-ī, —, 寒くある。  
 fruor, -ī, frūct-us 又は fruit-us sum, 享ける。  
 fugiō, -ere, fūg-ī, fugit-us, 逃げる。  
 fulciō, -ire, fuls-ī, fult-us, 支へる。  
 fulgeō, -ēre, fuls-ī, —, 閃く。  
 fundō, -ere, fūd-ī, fūs-us, 注ぐ。  
 fungor, -ī, fūct-us sum, 果す。  
 furō, -ere, furu-ī, —, 發狂する。

## G.

gaudeō, -ēre, gāvis-us sum, 悦ぶ。  
 gemō, -ere, gemu-ī, gemit-us, 嘆息する。  
 gerō, -ere, gess-ī, gest-us, 運ぶ。  
 gignō, -ere, genu-ī, genit-us, 生れる。  
 gradior, -ī, gress-us sum, 歩む。

## H.

haereō, -ēre, haesi, haes-us, 密着する。



hauriō, -īre, haus-ī, haust-us, 排水する。  
 horreō, -ēre, horru-ī, — 戦慄する。  
**hortor, -ārī, hortāt-us sum, 勵ます。**

## I.

icō, -ere, ic-ī, ict-us, 打つ。  
 illiciō, -ere, illex-ī, illect-us, 誘惑する。  
 imbuō, -ere, imbu-ī, imbūt-us, 濕ふ。  
 inclūdō, -ere, inclūs-ī, inclūs-us, 閉ぢ込む。  
 incumbō, -ere, incubu-ī, incubit-us, 上に横になる。  
 indicō, -āre, indicāv-ī, indicāt-us, 示す。  
 indicō, -ere, indix-ī, indict-us, 告示する。  
 indō, -ere, indid-ī, indit-us, 挿入れる。  
 indulgeō, -ēre, induls-ī, indult-us, 放縱である。  
 induō, -ere, indu-ī, indūt-us, 着る。  
 injiciō, -ere, injēc-ī, inject-us, 投げ込む。  
 intellegō, -ere, intellēx-ī, intellēct-us, 理解する。  
 irāscor, -ī, (succensu-ī), 怒る。

## J.

jaciō, -ere, jēc-ī, jact-us, 投げる。  
 jubeō, -ēre, juss-ī, juss-us, 命ずる。  
 jungō, -ere, jūnx-ī, jūct-us, 結ぶ。  
 juvō, -āre, jūvī, jūt-us, 助ける。

## L.

lābor, -ī, lāps-us sum, 滑る。  
 lacessō, -ere, lacessiv-ī, lacessit-us, 怒らす。  
 laedō, -ere, laes-ī, laes-us, 害する。  
 lambō, -ere, lamb-ī, lambit-us, 嘗める。  
 lateō, -ēre, latu-ī, —, 隠れる。  
 lavō, -āre, lāvī, laut-us 又は lōt-us 又は lavāt-us, 洗ふ。  
 legō, -ere, lēg-ī, lēct-us, 集める, 讀む。  
 lēgō, -āre, lēgāv-ī, lēgāt-us, 使節を送る。  
 linō, -ere, lēv-ī, lit-us, 塗る。  
 loquor, -ī, locūt-us sum, 言ふ。  
 lūceō, -ēre, lūx-ī, —, 輝く。  
 lūdō, -ere, lūs-ī, lūs-us, 遊ぶ。  
 lūgeō, -ēre, lūx-ī, —, 悲しむ。  
 luō, -ere, lu-ī, lūt-us, 洗ふ。

## M.

madeō, -ēre, madu-ī, —, 濡れる。  
 mālō, mālī, mālūī, —, むしろ欲する。  
 mandō, -ere, mand-ī, māns-us, 咬む。  
 maneō, -ēre, māns-ī, māns-us, 留る。  
 mergō, -ere, mers-ī, mers-us, 浸す。  
 mētior, -īrī, mēnsus sum, はかる (量目, 尺度等を)。

metō, -ere, messu-ī, mess-us, 收穫する。  
 metuō, -ere, metu-ī, metūt-us, 恐れる。  
 micō, -āre, micu-ī, —, 輝く。  
 minuō, -ere, minu-ī, minūt-us, 減する。  
 misceō, -ēre, miscu-ī, mixt-us, 混する。  
 mittō, -ere, mis-ī, miss-us, 送る。  
**moneō, -ēre, monu-ī, monit-us, 忠告する。**  
 mordeō, -ēre, momord-ī, mors-us, 噛む。  
 morior, -ī, mortuus sum, 死する。  
 moveō, -ēre, mōvī, mōt-us, 動く。  
 mulceō, -ēre, muls-ī, muls-us, 宥める。  
 mulgeō, -ēre, muls-ī, muls-us, 乳搾る。

## N.

nanciscor, -ī, nact-us 又は nānct-us sum, 獲得する。  
 nāscor, -ī, nāt-us sum, 生れる。  
 nectō, -ere, nex-ī 又は nexu-ī, nex-us, 結ぶ。  
 neglegō, -ere, neglēx-ī, neglēct-us, 忽にする。  
 neō, -ēre, nēv-ī nēt-us, 紡ぐ。  
 ningō, -ere, nīnx-ī, —, 雪が降る。  
 niteō, -ēre, nitu-ī, —, 輝く。  
 nitor, -ī, nīs-us 又は nīx-us sum, 倚る。  
 nōlō, nōlle, nōlui, 欲せぬ。

nōscō, -ere, nōv-ī, nōt-us, 知る。  
 nūbō, -ere, nūps-ī, nūpt-us, 結婚する。

## O.

oblivīscor, -ī, oblit-us sum, 忘れる。  
 obsideō, -ēre, obsēd-ī, obsess-us, 包圍する。  
 obsistō, -ere, obstit-ī, obstit-us, 反對する。  
 obsolēscō, -ere, obsolēvī, obsolet-us, 廢れる。  
 obstō, -āre, obstit-ī, obstāt-us, 反對する。  
 occidō, -ere, occid-ī, occās-us, 倒れる。  
 occidō, -ere, occid-ī, occis-us, 殺す。  
 occulō, -ere, occulu-ī, occult-us, 隠す。  
 oleō, -ēre, olu-ī, —, 香ふ。  
 operiō, -īre, operu-ī, opert-us, 覆ふ。  
 opprimō, -ere, oppress-ī, oppress-us, 壓する。  
 ordior, -īri, ōrs-us sum, 始める。  
 orior, -īri, ort-us sum, 昇る。

## P.

pacisc-or, -ī, pact-us sum, 約定する。  
 palleō, -ēre, pallu-ī, —, 青くある。  
 pandō, -ere, pand-ī, pass-us, 擴げる。  
 pangō, -ere, pānx-ī, pānct-us, 定める。  
 pangō, -ere, pepig-ī, pact-us, 定める。

parcō, -ere, peperc-ī, pars-us, 宥す。  
 pariō, -ere, peper-ī, part-us, 生む。  
**partior, -īri, partit-us sum, 分つ。**  
 pāscō, -ere, pāv-ī, pāst-us, 養ふ。  
 pāscor, -ī, pāst-us sum, (草を) 食ふ。  
 pateō, -ēre, patu-ī, —, 開いてをる。  
 patior, -ī, pass-us sum, 蒙る。  
 paveō, -ēre, pāvī, —, 恐れる。  
 pectō, -ere, pex-ī, pex-us, 梳る。  
 pellic-iō, -ere, pellēx-ī, pellect-us, 誘惑する。  
 pell-ō, -ere, pepul-ī, puls-us, 推す。  
 pendeō, -ēre, pepend-ī, pēns-us, 掛かる。  
 pendō, -ere, pepend-ī, pēns-us, 掛ける。  
 percellō, -ere, percul-ī, percuss-us, 投げ倒す。  
 perdō, -ere, perdid-ī, perdit-us, 毀つ。  
 pergō, -ere, perrēx-ī, perrēct-us, 進む。  
 petō, -ere, petiv-ī, petit-us, 求める。  
 pingō, -ere, pinx-ī, pict-us, 彩色する。  
 plangō, -ere, plānx-ī, plānct-us, 打つ。  
 plaudō, -ere, plaus-ī, plaus-us, 拍つ。  
 plectō, -ere, plex-ī 又は plexu-ī, plex-us, 編む。  
 pluit, -ere, plū-it, —, 雨が降る。  
 pōnō, -ere, posu-ī, posit-us, 置く。  
 pōscō, -ere, popōsci, —, 要求する。  
 possideō, -ēre, possēd-ī, possess-us, 所有する。

possum, posse, potu-ī, 能ふ。  
 pōtō, -āre, pōtāvī, pōt-us, 飲む。  
 prandeō, -ēre, prand-ī, prāns-us, 朝食する。  
 prehendō, -ere,prehend-ī,prehēns-us, 掴む。  
 premō, -ere, press-ī, press-us, 推す。  
 prōdō, -ere, prōdid-ī, prōdit-us, 裏切る。  
 proficiscor, -ī, profect-us sum, 出發する。  
 prōfligō, -āre, prōfligāvī, prōfligāt-us, 打ち倒す。  
 prōmō, -ere, prōmps-ī, prōmpt-us, 取り出す。  
 pungō, -ere, pupug-ī, punct-us, 刺す。

## Q.

quaerō, -ere, quaesiv-ī, quaesit-us, 問ふ。  
 quatiō, -ere, (-quass-ī), quass-us, 振ふ。  
 queror, -ī, quest-us sum, 悲しむ。  
 quiēscō, -ere, quiēv-ī, quiēt-us, 休息する。

## R.

rādō, -ere, rās-ī, rās-us, 剃る。  
 rapiō, -ere, rapu-ī, rapt-us, 奪ふ。  
 recipiō, -ere, recēp-ī, recept-us, 取り返す。  
 reddō, -ere, reddid-ī, reddit-us, 返却する。  
 referō, referre, rettul-ī, relāt-us, 持ち歸る。  
**regō, -ere, rēx-ī, rēct-us, 支配する。**

relinquo, -ere, reliqu-i, relict-us, 遺す.  
 reminiscor, -i, —, 回想する.  
 reor, -ēri, rat-us sum, 考ふ.  
 repellō, -ere, reppul-i, repuls-us, 退ける.  
 reperiō, -ire, repper-i, repert-us, 見出す.  
 rēpō, -ere, rēps-i, rept-us, 這ふ.  
 requirō, -ere, requisiv-i, requisit-us, 要する.  
 respondeō, -ēre, respond-i, respōns-us, 答へる.  
 retineō, -ēre, retinu-i, retent-us, 抑留する.  
 rideō, -ēre, ris-i, ris-us, 笑ふ.  
 rigeō, -ere, rigu-i, —, 硬くある.  
 rōdō, -ere, rōs-i, rōs-us, 齧る.  
 rubeō, -ēre, rubu-i, —, 赤面する.  
 rūdō, -ere, rudiv-i, rudīt-us, 吼へる.  
 rumpō, -ere, rūp-i, rupt-us, 裂く.  
 ru-ō, -ere, ru-i, rut-us, 倒れる.

## S.

saepiō, -ire, saeps-i, saept-us, 塙で圍む.  
 saliō, -ire, salu-i, salt-us, 跳ぶ.  
 sancio, -ire, s̄anx-i, sanct-us, 崇むる.  
 sapiō, -ere, sapiv-i, —, 味がする.  
 sarcio, -ire, sars-i, sart-us, 補綴する.  
 scandō, -ere, scand-i, scāns-us, 登る.

scindō, -ere, scid-i, sciss-us, 引裂く.  
 sciscō, -ere, sciv-i, scit-us, 制定する.  
 scribō, -ere, scrips-i, script-us, 書く.  
 sculpō, -ere, sculps-i, sculpt-us, 刻む.  
 secō, -āre, secu-i, sect-us, 切る.  
 sedeō, -ēre, sēd-i, sess-us, 座る.  
 sentiō, -ire, sēns-i, sēns-us, 感ずる.  
 sepeliō, -ire, sepeliv-i, sepult-us, 埋める.  
**sequor, -i, secūt-us sum, 従ふ.**  
 serō, -ere, sēv-i, sat-us, 蒔く.  
 serō, -ere, -seru-i, sert-us, 纏ふ.  
 serpō, -ere, serps-i, serpt-us, 這ふ.  
 sidō, -ere, sid-i, 又は sēd-i, 坐る.  
 sileō, -ēre, silu-i, —, 静である.  
 sinō, -ere, siv-i, sit-us, 許す.  
 sistō, -ere, -stit-i, stat-us, 立たす.  
 soleō, -ēre, solit-us sum, —, 慣れる.  
 solvō, -ere, solv-i, solūt-us, 解く.  
 sonō, -āre, sonu-i, sonit-us, 音がする.  
 sorbeō, -ēre, sorbu-i, —, 呑み込む.  
 spargō, -ere, spars-i, spars-us, 散らす.  
 spernō, -ere, sprēv-i, sprēt-us, 侮る.  
 splendeō, -ēre, splendu-i, —, 輝く.  
 spondeō, -ēre, spopond-i, spōns-us, 誓約する.  
 statuō, -ere, statu-i, statūt-us, 建てる.

sternō, -ere, strāv-i, strāt-us, 撒く。  
 stō, -āre, stet-i, stat-us, 立つ。  
 strepō, -ere, strepu-i, strepit-us, 音をたてる。  
 strideō, -ēre, strid-i, —, シウシウと音をする。  
 stringō, -ere, strinx-i, strict-us, しつかりと縛る。  
 struō, -ere, strūx-i, strūct-us, 積む。  
 studeō, -ēre, studu-i, —, 熱心である。  
 stupcō, -ēre, stupu-i, —, 驚呆する。  
 suādeō, -ēre, suās-i, suās-us, 説き勧める。  
 subdō, -ere, subdid-i, subdit-us, 下に置く。  
 suēscō, -ere, suēv-i, suēt-us, 常とする。  
 sūgō, -ere, sūx-i, sūct-us, 吸ふ。  
 sum, esse, fu-i, (futūrus), ある。  
 sūmō, -ere, sūmps-i, sūmpt-us, 取る。  
 surgō, -ere, surrēx-i, surrēct-us, 起きる。

## T.

tangō, -ere, tetig-i, tact-us, 觸れる。  
 tegō, -ere, tēx-i, tēct-us, 覆ふ。  
 tendō, -ere, tetend-i, tent-us 又は tēns-us, 擴げる。  
 teneō, -ēre, tenu-i, tent-us, 保持する。  
 tergeō, -ēre, ters-i, ters-us, 拭ふ。  
 terō, -ere, triv-i, trit-us, 摩る。  
 texō, -ere, texu-i, text-us, 織る。

timeō, -ēre, timu-i, —, 恐れる。  
 tingō, -ere, tinx-i, tinct-us, 浸す。  
 tollō, -ere, sustul-i, sublāt-us, 擧げる。  
 tondeō, -ēre, totond-i, tōns-us, 剪る。  
 tonō, -āre, tonu-i, —, 雷鳴する。  
 torqueō, -ēre, tors-i, tort-us, 振る。  
 torreō, -ēre, torru-i, tōst-us, 烘る。  
 trādō, -ere, trādid-i, trādit-us, 渡す。  
 trahō, -ere, trāx-i, tract-us, 曳く。  
 tremō, -ere, tremu-i, —, 震ふ。  
 tribuō, -ere, tribu-i, tribūt-us, 割りあてる。  
 trūdō, -ere, trūs-i, trūs-us, 衝く。  
 tumeō, -ēre, tumu-i, —, 脹れる。  
 tundō, -ere, tutud-i, tūns-us, 撞く。  
 turgeō, -ēre, turs-i, —, 腫れる。 *puerum*

## U.

ulcīscor, -i, ult-us sum, 復讐する。  
 ungō, -ere, ūnx-i, ūnct-us, 油を塗る。  
 urgeō, -ēre, urs-i, —, 勵ます。  
 ūrō, -ere, ūss-i, ūst-us, 燃やす。  
 ūtor, -i, ūs-us sum, 使ふ。

## V.

vehō, -ere, vēx-i, vect-us, 運ぶ。

vell-ō, -ere, vell-i, vuls-us, 引き抜く.  
 vēndō, -ere, vēndid-i, vēndit-us, 賣る.  
 veniō, -īre, vĕn-i, vent-us, 來る.  
**vereor, -ēri, verit-us sum, 恐れる.**  
 verrō, -ere, verr-i, vers-us, 掃く.  
 vertō, -ere, vert-i, vers-us, 轉ずる.  
 vēscor, -ī, (ēd-i), 食ふ.  
 vetō, -āre, vetu-i, vetit-us, 禁ずる.  
 videō, -ēre, vid-i, vis-us, 見る.  
 vigeō, -ēre, vīgu-i, —, 繁榮する.  
 vinciō, -īre, vīnx-i, vinct-us, 縛る.  
 vincō, -ere, vīc-i, vict-us, 征服する.  
 vireō, -ēre, viru-i, —, 緑である.  
 vīsō, -ere, vīs-i, vīs-us, 訪問する.  
 vivō, -ere, vīx-i, vict-us, 生活する.  
 volō, velle, volu-i, 欲する.  
 volvō, -ere, volv-i, volūt-us, 轉ぶ.  
 vomō, -ere, vomu-i, vomit-us, 吐く.  
 voveō, -ēre, vōv-i, vōt-us, 誓ふ.

# 羅 日 辭 彙



**注意** 以下の辭書には此の文典の練習及び文例で用ゐてある羅句語を網羅する。而して其の譯語は重に此の文典で用ひた意義ばかりをつけてある。動詞の主要部の内缺けて居るものは擧げてない。形容詞は屢々只男性主格單數の形ばかりあげてある。一文字の中にある — は其の文字の構成を示す。母音の上にある — は其の母音の音量が長いを示し、何もないものは短かいのである。各語の後の ( ) の内にある文字に就ては、

(名)は名詞, (男)は男性名詞, (女)は女性名詞, (共)は男性、女性共通名詞, (中)は中性名詞, (形)は形容詞, (副)は副詞, (疑、副)は疑問副詞, (前)は前置詞, (接)は接續詞, (間)は間投詞, (基)は基本數詞, (順)は順序數詞, (數、副)は數詞的副詞, (箇、數)は箇別數詞, (代)は代名詞, (代、形)は代名詞的形容詞, (人、代)は人稱代名詞, (再、代)は再歸代名詞, (所、代)は所有代名詞, (指、代)は指示代名詞, (強、代)は強意的代名詞, (關、代)は關係代名詞, (疑、代)は疑問代名詞, (不、代)は不定代名詞, (一般、關代)は一般の關係代名詞, (動)は動詞, (所)は所相動詞, (半、所)は半所相動詞, (不、動)は不人稱動詞, (不、完、動)は不完全動詞, (現、分)は現在分詞, (現、分、形)は現在分詞的形容詞, (過、分)は過去分詞, (過、分、形)は過去分詞的形容詞, (主)は主格, (呼)は呼格, (對)は對格, (屬)は屬格, (與)は與格, (奪)は奪格, (地)は地格, (單)は單數, (複)は複數, (原)は原級, (比)は比級, (優)は優級, (古曆)はケーサル以前の Rōma の曆, (ヶ曆)はケーサルが制定した曆.

## A.

ā, ab, abs (前、奪格を支配する), から, より(分離を示す), 依つて(行爲者を示す).  
 ab-dō, -ere, -didī, -ditus (動), 隠す.  
 ab-dūcō, -ere, -dūxī, -ductus (動), 導き去る.

ab-eō, -īre, -iī, -itus (動), 去る, (屢々, ā, ab, ē, ex と共に).  
 ab-horreō, -ēre, -uī (動), 恐れる, 畏縮する, (屢々 ā 又は ab と共に用ひられる).  
 ab-luō, -ere, -luī, -lūtus (動), 洗ひ去る.  
 ab-ripiō, -ere, -ripiū, -reptus [ab-rapiō] (動), 奪ひ去る.

absēns, -sentis (absum の現、分), 不在の。  
 ab-solvō, -ere, -solvī, -solūtus (動), 仕遂げる, 終る。  
 abs-tineō, -ēre, -tinuī, -tentus [abs + teneō]  
 (動), 去る, 戒める, 控へる, 節する。  
 ab-sum, -esse, āfui (āfutūrus) (動), 居ない, 不在である, 距離に居る。  
 ab-ūtor, -ī, -ūsus sum (所、奪格を支配する), 乱用する。  
 āc (接), (atque を見よ)。  
 Acastus, -ī (男), (Ἀκάστος), 昔 Thessalia の王, Pelias の子, Astydamia の夫, Lāodamia の父。  
 ac-cēdō, -ere, -cēssi, -cēssus [ad-cēdō]  
 (動), 近寄る, (屢々 ad と共に)。  
 ac-cidō, -ere, -cidi, — [ad-cadō] (動), 起る。  
 ac-cipiō, -ere, -cēpi, -ceptus [ad-capiō]  
 (動), 受ける, 得る, 蒙る。  
 accipiter, -tris (男), 鷹。  
 accūrātus (形), 念を入れて。  
 ac-currō, -ere, -curri 又は -cucurri, -cursus [ad-currō] (動), (方へ)走り来る, (屢々 ad 又は in)。  
 ac-cūsō, -āre, -āvī, -ātus [ad-causa] (動), 訴訟する, 非難する, (被訴訟者の對格と罪等の屬格を支配する)。  
 ācer, ācris, ācre (形), 鋭い, 烈しい。  
 acerbus (形), 烈しい。  
 ācerrimē (副), (ācriter の優級)。  
 Achillēs, -is (男), (Ἀχιλλεύς), Peleus 王の子, トロヤ戦争で希臘軍の大勇士。  
 aciēs, -ēī (女), 陣立, 戦列。  
 ācriter (副), 鋭く, 烈しく。  
 ācrius [ācriter の比級]。

acuō, -ere, -uī, -ītus (動), 尖らす。  
 acūtus (形), 尖れる。  
 ad (前、對格を支配する), へ, 方へ, 迄, に於て, 附近で, 對して。  
 ad-dūcō, -ere, -dūxī, -ductus (動), (へ)導く, (へ)誘ふ, (屢々 ad 又は in と共に)。  
 adeō (副), 實に, かくまで。  
 ad-eō, -īre, -iī, -ītus (動), 近寄る, (へ)行く, (屢々 ad と共に)。  
 adfectus, (afficiō を見よ)。  
 ad-ferō (afferō), -ferre, attulī, allātus (動), (へ)運ぶ, 運ぶ, 持來たす。  
 ad-hibeō, -ēre, -uī, -ītus (動), 適用する, 従事する, 加へる, 致す, (屢々 ad 又は in)。  
 ad-hortor, -ārī, -ātus sum (所), 激勵する。  
 ad-hūc (副), 未だ, 尙今迄。  
 ad-imō, -ere, -ēmī, -emptus (動), 取り去る, 奪ふ, (被奪者の奪格を支配する)。  
 ad-ipiscor, -ī, -eptus sum (所), 達する, 得る。  
 ad-jungō, -ere, -jūnxī, -jūnctus (動), 縛り付ける, 聯合さす。  
 ad-juvō, -āre, -jūvī, -jūtus (動), 助ける。  
 ad-ministrō, -āre, -āvī, -ātus (動), 處理する。  
 ad-mīror, -ārī, -ātus sum (所), 嘆稱する。  
 ad-moveō, -ēre, -mōvī, -mōtus (動), (へ)動かす, (屢々 ad と共に)。  
 ad-orior, -irī, -ortus sum (所), 攻撃する。  
 ad-scendō (āscendō), -ere, -scendī, -scēnsus (動), 登る, 上る, (屢々 ad 又は in と共に)。  
 ad-stō (āstō) -āre, -stitī (動), 傍へ立つ, 侍る。

ad-sum, -esse, -fui, (-fore) (動), 居る, 近くに在る。  
 Aduātucī, -ōrum (男), Gallia Belgica に居つた一つのゲルマン種族。  
 ad-lescēns, -entis (共), 青年。  
 ad-vehō, -ere, -vexī, -vēctus (動), (方へ)運ぶ, 持來たす。  
 ad-veniō, -īre, -vēnī, -ventus (動), (へ)来る, 近よる, (屢々 ad 又は in)。  
 ad-ventō, -āre, -āvī, -ātus (動), 進む, 近 adventus, -ūs (男), 到着。 [寄る]。  
 adversus (advertō の過、分、形), 面する, 逆の, 向ふの; (副、前), 面して, 反して, 向つて。  
 aedēs (aedīs), -is, (女), 殿堂, (複數形は家の義もある)。  
 aedificium, -ī, (中), 建物。  
 aedificō, -āre, -āvī, -ātus (動), 建てる。  
 Aeduī, (Haeduī), -ōrum (男), Gallia に居つた一ケルト種族。  
 aegrē (副), 骨折つて, 辛ふじて。  
 aequitās, -ātis (女), 平安, 平靜。  
 aequō, -āre, -āvī, -ātus (動), 平等にする, 平坦にする。  
 aequor, -oris (中), 平面, 海。  
 aestās, -ātis (女), 夏。  
 aestus, -ūs (男), 熱, 暑氣。  
 aeternus (形), 永久の。  
 affatim [ad-fatim] (副), 充分に。  
 af-ferō (= adferō)。  
 af-ficiō, -ere, -fēcī, -fectus [ad-faciō] (動), 攻める, 惱ます, 苦しめる。  
 af-figō, -ere, -fixī, -fixus [ad-figō] (動), 結び付ける, (屢々 ad)。  
 Agamēdēs, -ae (男), (Ἀγαμέδης), Trophōnius の兄弟で彼と共に Delphī に Apollō の神殿を建立した。

Agamemnon, -onis (男), (Ἀγαμέμνων), Mycēnae の王でトロヤ戦争で希臘軍の總大將。  
 agāsō, -ōnis (男), 馬丁, 騾馬屋。  
 age (間), さー! いざ! (實は他動詞 agō の命令形であつて, agite と等しく間投詞として用ひられる)。  
 ager, -grī (男), 畑, 領地。  
 agrī cultura, 農業。  
 agger, -eris (男), 城壘。  
 ag-gredior, -ī, -gressus sum [ad-gradior] (所), 攻撃する。  
 agitō, -āre, -āvī, -ātus (動), 激動さす, 驅る。  
 ā-gnōscō, -ere, -gnōvī, -gnitus [ad-(g) nōscō] (動), 認識する。  
 agō, -ere, -ēgī, -actus (動), 動かす, 運ぶ, 驅る, 導く, vitam agō, 私が生活する。  
 agricola, -ae (男), 百姓, 農夫。  
 Agrippa, -ae (男), 人名。  
 āiō (動), 云ふ。  
 alacritās, -ātis (女), 活潑, 元氣。  
 Albertus, -ī (男), 人名。  
 albus (形), 白い。  
 āles, ālitis (屬格複數 ālitum, (詩形) ālituum) (共), 鳥, 兆候。  
 Alexander, -drī (男), Macedonia の有名な王。  
 aliquandō (副), 或る時, 嘗て, 何時か。  
 aliquantum, -ī (中), 若干量, 大量。  
 aliquantum (副), 幾らか, 著しく。  
 aliquantus (形), 若干の, 著しい。  
 aliquī, aliqua, aliquod, 屬格 alicūjus (代、形), 或る。  
 aliquis, aliqua, aliquid, 屬格 alicūjus, (不、代), 或る人, 或る物。  
 aliter (副), 他の方法で, 然らずば。

alius, alia, aliud, 屬格 alius (代、形), 他の, 異なる, (代) 他の人, 他の者, alii .....alii, 或る人々は.....他の人々は.  
al-loquor, -ī, allocūtus sum [ad-loquor] (所), 話し掛ける, 呼びかける.  
alō, -ere, aluī, altus 又は alitus (動), 養ふ, 扶持する.  
Alpēs, -ium (男), 北部伊太利の山脉, (アルプス山脉).  
alter, altera, alterum, 屬格 alterius (代、形), 今一つの.  
altus (形), 高い, 深い.  
alumnus, -ī (男), 養兒.  
amāns, -antis (amō の現、分、形), 愛らしい.  
Ambiorix, -igis (男), Gallia Belgica に居つた Eburōnēs 族の首領.  
ambō, ambae, ambō (形), 二つの, 両方の, (名), 兩者, 兩物.  
ambulātiō, -ōnis (女), 散歩.  
ambulō, -āre, -āvī, -ātus (動), 散歩する, 行く.  
amīcitiā, -ae (女), 友情.  
amīcus (形), 仲好い, 親切な, 都合よい.  
amīcus, -ī (男), amīca, -ae (女), 友人.  
amnis, -is (男), 河, 川.  
amō, -āre, -āvī, -ātus (動), 愛する, 好む.  
amor, -ōris (男), 愛, 情愛.  
ā-moveō, -ēre, -mōvī, -mōtus (動), 動かす, 除く.  
am-putō, -āre, -āvī, -ātus (動), 切り去る.  
Andromeda, -ae (女), (Ἀνδρομέδη) Ethiopia の王 Cepheus の娘で Perseus の妻.  
angustiae, -ārum (女), 山狭, 狹路.  
anima, -ae (女), 氣息.

anim-advertō, -ere, -advertī, -adversus [animum-advertō] (動), 氣をつける.  
animal, -ālis (中), 動物.  
animus, -ī (男), 理性, 智, 心, 情, 勇氣.  
an-nuō, -ere, -nuī, -nūtus [ad-nuō] (動), うなづく, 同意する, 許可する.  
annus, -ī (男), 年.  
ante (副、前、對格を支配する), 前に, 以前に, 先に.  
anteā (副), 以前, 往日.  
antequam (ante quam) (副), の前に, の先に, や否や.  
antīquus (形), 昔時の, 以前の, 古い.  
Antōnius, -iī (男), 人名.  
anxius (形), 心配な, 配慮する.  
aperiō, -īre, aperuī, apertus (動), 開く.  
Apollō, -inis (男), (Ἀπόλλων), 詩歌, 音樂, 醫療, 豫言等の神.  
ap-pellō, -āre, -āvī, -ātus [ad-pellō] (動), 稱する.  
ap-petō, -ere, -petivī 又は -petiī, -petitus [ad-petō] (動), 求める.  
ap-portō, -āre, -āvī, -ātus [ad-portō] (動), (へ)持來たす.  
ap-propinquō, -āre, -āvī, -ātus [ad-propinquō], (動), (へ)近寄る.  
aptus (形), 適合する.  
apud (前、對格を支配する), の家に, の内に, 所で, 附近で, 於て, 前に(人を示す詞と共に用ゐる時).  
aqua, -ae (女), 水.  
aquila, -ae (女), 鷲.  
āra, -ae (女), 神壇.  
arātrum, -ī (中), 鋤.  
arbitror, -ārī, -ātus sum (所), 考へる.  
arbor, -oris (女), 木.  
arcus, -ūs (男), 弓.

ārdeō, -ēre, ārsī, ārsus (動), 燃へる, 熱する.  
arēna (harēna), -ae (女), 砂.  
argentum, -ī (中), 銀.  
Argīvus (形), Argos (都市名)の, (名), Argos 人.  
Argos (中), (Ἄργος) (通常複數形 Argī, -ōrum を用ふる) ペロポネネース半島の Argolis 國の首府.  
argūmentum, -ī (中), 證明, 證據.  
Ariovistus, -ī (男), Germānia の一王.  
arma, -ōrum (中), 武具.  
Arminius, -iī (男), Germānia の有名な將軍.  
armō, -āre, -āvī, -ātus (動), 武裝する.  
arō, -āre, -āvī, -ātus (動), 耕す.  
ar-rigō, -ere, -rēxī, -rēctus [ad-regō] (動), 起す, 勵ます.  
ar-ripiō, -ere, -ripiū, -reptus [ad-rapiō] (動), 攫む, 捕へる.  
ar-rogo, -āre, -āvī, -ātus [ad-rogo] (動), 要求する(不正に).  
ars, artis (女), 技術.  
arx, arcis (女), 城, 城堡.  
ā-scendō, -ere, -scendī, -scēnsus [ad-scandō] (動), 登る, 乗る [屢々 ad, in と共に].  
Āsia, -ae (女), 大陸の名(亞細亞).  
asinus, -ī (男), 驢馬.  
as-sequor, -ī, -secūtus sum [ad-sequor] (所), 追附く, 達する.  
assiduus (形), 倦まない, 勤勉な.  
at (接), 然し.  
āter, ātra, ātrum (形), 黒色の, 暗い, 悲しい.  
Athēnae, -ārum (女), (Ἀθήναι), Graecia の都市の名.

Athēniēnsis, -e (形), Athēnae の, (名), Athēnae 人.  
Atlās, -antis (男), (Ἄτλας), 天を肩上に支へて居る神.  
atque (ac) (接), 而して, 且, 而して實に.  
ātrāmentum, -ī (中), 黒汁, インク.  
at-tendō, -ere, -tendī, -tentus [ad-tendō] (動), 注意する.  
at-tingō, -ere, -tigī, -tāctus [ad-tangō], (動), 觸れる, 達する.  
at-tribuō, -ere, -uī, -ūtus [ad-tribuō], (動), 割與へる.  
auctor, -ōris (男, 稀に女), 發起人, 原動者.  
audācia, -ae (女), 大膽, 勇氣.  
audācter (副), 大膽に.  
audāx, -ācis (形), 大膽な, 勇敢な.  
audeō, -ēre, ausus sum (半、所), (自), 敢てする.  
audiō, -īre, -ivī (-iī), -ītus (動), 聞く.  
augeō, -ēre, auxī, auctus (動), 増加する, 擴げる.  
augur, -uris (共), 占者, 豫言者.  
augurium, -ī (中), 微占, 占考.  
Augustus, -ī (男), Rōma の帝王にして Octāvius Caesar の異名.  
Aulis, -is 又は -idis (女), (Αὔλις), Boeōtia にある港で此處にトロヤ遠征のギリヤ艦隊が集合した.  
aureus (形), 金の.  
auris, -is (女), 耳.  
aurum, -ī (中), 金.  
auscultō, -āre, -āvī, -ātus (動), 耳を傾く, 注意する.  
autem (接), 然し, 之に反して.  
auxilium, -ī (中), 助力, 援助.  
avārus (形), 貪欲な.



aversus (āvertō の過、分、形), わきむける, 後の, 不利の, 反對の, 敵意の.  
ā-vertō, -ere, -vertī, -versus (動), そむく, 移す, 避く, (屢々 ā 又は ab と共に).  
avidus (形), 慾張れる.  
avis, -is (女), 鳥, 兆.  
ā-volō, -āre, -āvī, ātus (動), 飛び去る.  
avus, -ī (男), 祖父.

**B.**

bacca (bāca), -ae (女), 圓い小さい果實, いちご.  
Bacchus, -ī (男), (Bάκχος), Jūpiter と Semelē との子で酒の神.  
Bactriānī, -ōrum (男), Bactria 人等.  
Baebus, -ī (男), 人名.  
Balbus, -ī (男), 人名.  
barba, -ae (女), 髭.  
barbarus (形), (βάρβαρος), 外國の, 未開の, 野蠻の, (名), 外人, 未開人, 野蠻人.  
beātus (形), 幸福な.  
Belgae, -ārum (男), 北部 Gallia に居つた勇敢なケルトとゲルマン系の一種族.  
bellum, -ī (中), 戦争, bellī (地格), 戦争中に (in war 又は during war), bellō (奪格) 戦時に (in war-time).  
bene (副), melius (比), optimē (優), 善く, 正しく.  
beneficium, -ī (中), 恩惠, 親切.  
bēstia, -ae (女), 野獸.  
bibō, -ere, bibī, bibitus (動), 飲む.  
bīdnum, -ī (中), 二日の日時, 二日.  
bis (數、副), 二度.

Bitō (Bitōn), -ōnis (男), (Bίτων), Argos 市の一尼の孝行な息子.  
Boeōtī, -ōrum (男), Boeōtia 人等.  
bonus (形), melior (比), optimus (優), 善い, 美しい, 適した.  
bōs, bovis (共), (屬、複 boum 又は bovum, 與、奪、複 bōbus, būbus) 牛.  
brevis, -e (形), 短かい, 近い.  
Britannia, -ae (女), 國の名, (英國).  
Brūnō (男), 人名.  
Brūtus, -ī (男), 人名, 初めて Rōma の執政官となつた人; 又は Caesar を殺した人.

**C.**

cacūmen, -inis (中), 先端, 頂, 尖頭.  
cadāver, -eris (中), 屍, 死體.  
cadō, -ere, cecidī, cāsus (動), 落ちる, 倒れる, 死する.  
caedēs, -is (女), 殺戮.  
caedō, -ere, cecidī, caesus (動), 殺す.  
caelum, -ī (中), 天.  
caena (cēna), -ae (女), 正餐, 食事.  
caeruleus (形), 空色の, 淡青の.  
Caesar, -is (男), Rōma の有名な將軍政治家; 時々は彼れの著作物 Dē Bellō Gallicō の義に用ひられる.  
Cāius, -ī (男), 人名.  
Cājus Fabricius Luscinus (男), Rōma の有名な執政官.  
Cājus Marius (男), Rōma の有名な將軍.  
calamitās, -ātis (女), 不幸, 災難.  
calcar, -āris (中), 拍車.  
Calchās, -antis (男), (Κάλχας), Graecia の有名な豫言者.

calculus, -ī (男), 小石.  
campus, -ī (男), 平野.  
canis, -is (共), 犬.  
canō, -ere, cecinī, cantus (動), 歌ふ.  
Cantium, -īi (中), Britannia の州の名.  
capessō, -ere, -īvī (ii), -ītus (動), 従事する, 着手する.  
capillus, -ī (男), 毛髮. [む.  
capiō, -ere, cēpī, captus (動), 捕へる, 攫  
capra, -ae (女), 牝山羊.  
captivus, (男), 捕虜.  
caput, -itis (中), 頭.  
carmen, -inis (中), 歌.  
cāritās, -ātis (女), 親愛.  
Carnūtēs, -um (男), 中部 Gallia に居つた一種族.  
carō, carnis (女), 肉.  
Carolus, -ī (男), 人名.  
carpō, -ere, carpsī, carptus (動), 摘む.  
Carthāginiēnsis, -is (共), Carthāgō 人.  
Carthāgō, -inis (女), 亞弗利加にあつた有名な都市, (地), Carthāgini (-e).  
cārus (形), 親しい, 高價の, 大切な.  
casa, -ae (女), 小屋.  
cāseus, -ī (男), 乾酪.  
castra, -ōrum (中、複), 陣營.  
cāsus, -ūs (男), 機會, 死.  
catēna, -ae (女), 羈絆物, 枷.  
caterva, -ae (女), 群集.  
Catilīna, -ae (男), 屢々反逆を企てた Rōma の一貴族.  
Catō, -ōnis (男), Rōma の一偉人.  
Caucasus, -ī (男), 裏海附近にある山脈.  
causa, -ae (女), 理由, 動機, 訴訟; causā (前、屬格を支配する, 實は causa の奪格である, 通例屬格の後に位置をとる) ために.

cautus (caveō の過、分、形), 用心深い, 思慮ある.  
caveō, -ēre, cāvī, cautus (動), 用心する.  
cēdō, -ere, cēssī, cēssus (動), 去る, 退く, (奪格を支配する).  
celebrō, -āre, -āvī, -ātus (動), 稱揚する.  
celer, celeris, celere (形), 速な.  
celeritās, -ātis (女), 急速, 速力.  
celeriter (副), 急速に, celerius (比), celerrimē (優).  
cella, -ae (女), 小屋.  
cēna, -ae (女), = caena.  
cēnsēō, -ēre, cēnsuī, cēnsus (動), 考ふ.  
centēsimus (順), 百番の.  
centum (基), 百.  
Cerēs, -eris (女), Sātūrnus 神の娘で農業の女神.  
cernō, -ere, crēvī, crētus (動), 識別する, 認める.  
certē (副), 兎に角.  
certus (形), 確かな, 或る一定の, aliquem certīorem facere, 或人に報知する.  
cerva, -ae (女), 牝鹿.  
cēteri (代、形), 他の者(物)等(の).  
cībus, -ī (男), 食物.  
Cicerō, -ōnis (男), Rōma の有名な雄辯家で著者; Rōma の將軍.  
cingō, -ere, cīnxī, cīnctus (動), 圍む.  
circā (副), 周圍に, (前、對格を支配する) 周りに.  
circum-stō, -āre, -stetī (動), 圍む, 周りに立つ.  
cīterior, -ōris (形), 此岸の, 此方の.  
cīvis, -is (共), 市民.  
cīvitās, -ātis (女), 國家.  
clādēs, -is (女), 不幸, 禍害, 損害.  
clāmitō, -āre, -āvī, -ātus (他), 叫ぶ.

clāmō, -āre, -āvī, -ātus (動), 叫ぶ.  
 clāmor, -ōris (男), 叫聲.  
 clārus (形), 有名な.  
 clāssis, -is (女), 艦隊.  
 claudō, -ere, clausī, clausus (動), 閉ち  
 る, 圍む.  
 clēmentia, -ae (女), 溫和, 慈悲.  
 Cleobis, -is (男), Bitō の兄弟.  
 clitellae, -arum (女), 荷鞍.  
 Clōdius, -ii (男), 人名.  
 Clytaemnestra, -ae (女), Agamemnon 王  
 の妻.  
 coāctus, -ūs (男), 壓迫.  
 coena (= caena).  
 cō-ēō, -īre, -īvī (-ii), -itus [com-eō] (動),  
 集まる.  
 (coepiō) -ere, coepī, coeptus (動), 始め  
 る, 始まる.  
 cōgitō, -āre, -āvī, -ātus [com-agitō] (動),  
 考へる, 思慮する.  
 cōgnātiō, -ōnis (女), 血族.  
 cōgnātus (男), 血族.  
 cō-gnōscō, -ere, -gnōvī, -gnitus [com-  
 gnōscō] (動), 知る, 學ぶ, 認める.  
 cōgō, -ere, cōgī, coactus [com-agō]  
 (動), 強ゆる.  
 cohors, -rtis (女), Rōma の歩兵隊(凡そ  
 三百六十人).  
 co-hortor, -ārī, -ātus sum [com-hortor]  
 (所), 勵ます, 鼓舞する.  
 col-ligō, -ere, -lēgī, -lēctus [con-legō]  
 (動), 縛り合す.  
 collis, -is (男), 丘, 小山.  
 col-locō, -āre, -āvī, -ātus [con-locō] (動),  
 排列す, 置く.  
 col-loquor, -ī, -locūtus [con-loquor] (動),  
 會話す, 話す, (屢々 cum と共に).

colō, -ere, colui, cultus (動), 世話する,  
 尊敬する, 守る.  
 color, -ōris (男), 色.  
 columba, -ae (女), 鳩.  
 comes, -itis (共), 仲間, 同伴者.  
 commeātus, -ūs (男), 賜暇.  
 commilitō, -ōnis (男), 戦友.  
 com-mittō, -ere, -mīsī, -mīssus (動), 行  
 ふ, 戦ふ. [かす.  
 com-moveō, -ere, -mōvī, -mōtus (動), 動  
 com-mūnicō, -āre, -āvī, -ātus (他), 分つ,  
 分與する, 共にする, 告ぐる, (屢々  
 cum と共に).  
 commūnis, -e (形), 共通の.  
 com-mūtō, -āre, -āvī, -ātus (動), 交換す  
 る.  
 com-pāreō, -ēre, -uī (動), 顯れる.  
 com-parō, -āre, -āvī, -ātus (動) 支度す  
 る, 用意する, (屢々 ad と共に).  
 com-pleō, -ēre, -plēvī, -plētus (動), 充  
 たす.  
 complūrēs, -a 又は -ia (形), 多数の.  
 com-pōnō, -ere, -posuī, -positus (動), 定  
 める, 作る. [る.  
 com-portō, -āre, -āvī, -ātus (動), 持集め  
 com-prehendō, -ere, -prehendī, -prehen-  
 sus (動), 捉へる.  
 com-primō, -ere, -pressī, -pressus (動),  
 抑ふ.  
 con-cidō, -ere, -cidī (con-cadō) (動), 倒  
 れる, 死する.  
 con-cidō, -ere, -cidī, -cīsus [con-caedō]  
 (動), 切る, 殺す, 破毀する.  
 cōnciō (cōntiō), cōnciōnis (女), 集會, 公  
 衆演説.  
 concitō, -āre, -āvī, -ātus (動), 起す, 振  
 起さす, 勵ます.

conclāve, -is (中), 室, 房.  
 con-clūdō, -ere, -clūsī, -clūsus [com-  
 clūdō] (動), 閉ちる.  
 concordia, -ae (女), 和合, 一致.  
 concors, -cordis (形), 一致してゐる, 合  
 意の.  
 con-cutiō, -ere, -cussī, -cussus [com-  
 quatiō] (動), 振動さす.  
 con-demnō, -āre, -āvī, -ātus [com-damnō]  
 (動), 有罪と決する.  
 condiō (condiciō), -ōnis (女), 條件.  
 con-dō, -ere, -didī, -ditus [com-dō] (動),  
 建設する.  
 con-dūcō, -ere, -dūxī, -ductus (動), 召集  
 する, 庸ふ.  
 cōn-ferō, -ferre, -tulī, -lātus (動), 集め  
 る, 運ぶ.  
 cōnfestim (副), 直ぐ, 急に.  
 cōn-ficiō, -ere, -fēcī, -fectus [com-faciō]  
 (動), 成就す.  
 cōn-fidō, -ere, -fidī, confisus sum (動),  
 信賴する, 任す.  
 cōn-firmō, -āre, -āvī, -ātus (動), 固める,  
 確める.  
 cōn-fiteor, -ērī, -fessus sum [com-fateor]  
 (所), 白狀する.  
 cōn-flīgō, -ere, -flīxī, -flīctus (動), 戦ふ,  
 争ふ.  
 cōn-fringō, -ere, -frēgī, -fractus [com-  
 frangō] (動), 碎く, 折る.  
 con-jiciō, -ere, -jēcī, -jectus [com-jaciō]  
 (動), 投げ集める, 結ぶ, 投げる, 集め  
 る, 推定する, 豫言する. [ぶ.  
 con-jungō, -ere, -jūnxī, -jūctus (動) 結  
 conjūratiō, -ōnis (女), 結黨, 謀叛.  
 con-jūrō, -āre, -āvī, -ātus (動), 結黨す  
 る, 誓ふ.

conjux (conjūnx), -jugis (共), 配偶, 夫,  
 妻.  
 cōnor, -ārī, -ātus sum (所), 企てる, 試み  
 る.  
 con-quirō, -ere, -quisivī, -quisitus [com-  
 quaerō] (動), 捜す.  
 cōn-scribō, -ere, -scripsī, -scriptus (動),  
 募集する.  
 cōn-senēscō, -ere, -senui — (動), 老るる.  
 cōn-sentiō, -īre, -sēnsī, -sēnsus (動), 一  
 致する, 結黨する.  
 cōnsessus, -ūs (男), 集會.  
 cōn-sidō, -ere, -sēdī, -sessus (動), 坐す  
 る.  
 cōnsilium, -ī (中), 相談, 計畫, 思慮,  
 consilium ineō, 企つる.  
 cōn-sistō, -ere, -stitī, -stitus (動), 成り  
 立つ.  
 cōn-spiciō, -ere, -spēxī, -spectus [com-  
 specio] (動), 注視する, 視察する.  
 cōn-sternō, -āre, -āvī, -ātus (動), 困ら  
 す, 驚かす, 恐れらす.  
 cōn-stituō, -ere, -uī, -ūtus [com-statuō]  
 (動), 制定する, 決心する, 立てる.  
 cōn-stringō, -ere, -strinxī, -strictus (動),  
 縛す.  
 cōn-suēscō, -ere, -suēvī, -suētus (動), 慣  
 れる.  
 cōnsuetūdō, -inis (女), 習慣, しきたり.  
 cōnsul, -ulis (男), 執政官.  
 Cos. = cōnsul, Coss. = cōnsulēs.  
 cōnsulāris, -e (形), 執政官の.  
 cōnsulātus, -ūs (男), 執政官職.  
 cōnsulō, -ere, -sulūī, -sultus (動), 會議す  
 る, 相談する.  
 cōn-surgō, -ere, -surrēxī, -surrēctus (動),  
 立ちあがる, 起る.

con-tegō, -ere, -tēxi, -tēctus (動), 掩ふ.  
 con-temnō, -ere, -tempſi, -temptus (動),  
 輕蔑する.  
 contemptiō, -ōnis (女), 輕蔑.  
 con-tendō, -ere, -tendī, -tentus (動), 急  
 ぐ, 争ふ.  
 contentus (contineō の過、分、形), 満足  
 してゐる.  
 con-tineō, -ēre, -tinuī, -tentus [com-  
 teneō] (動), 保つ, 止める.  
 continuō (副), 絶へず, 引續いて.  
 contrā (副), 反對に, 面して, (前、對格  
 を支配する), 反して, 對して, 向ふ  
 て.  
 con-trectō, -āre, -āvī, -ātus [com-tractō]  
 (動), 觸れる.  
 contumēlia, -ae (女), 侮辱, 害.  
 con-veniō, -īre, -vēnī, -ventus (動), 集  
 る. [る.  
 con-vocō, -āre, -āvī, -ātus (動), 召集す  
 con-volvō, -ere, -volvī, -volūtus (動) 卷  
 く, 群る.  
 copia, -ae (女), 富, 充満, 供給; (複)  
 軍勢.  
 Corinthus, -i (女), Poloponnēsus 半島北  
 岸の有名な都市.  
 Cornēlia, -ae (女), 人名.  
 Cornēlius Lentulus (男), Rōma の一執  
 政官.  
 cornū, -ūs (中), 角, 翼(列の).  
 corōna, -ae (女), 花環, 冠.  
 corpus, -oris (中), 身體.  
 cotidiē (quotidiē) (副), 日々.  
 Cotta, -ae (男), 人名.  
 crās (副), 明日.  
 creber, -bra, -brum (形), 屢々の, 多く  
 の.

crēdō, -ere, -didī, -ditus (與), 信する.  
 creō, -āre, -āvī, -ātus (動), 選ぶ, なす.  
 crēscō, -ere, crēvī, crētus (動), 増加する.  
 crinis, -is (男), 毛髪.  
 cruciātus, -ūs (男), 苦痛.  
 crudēlis, -e (形), 不人情な, 残酷な.  
 crudēlītās, -ātis (女), 残忍.  
 cubiculum, -ī (中), 寢室.  
 culpō, -āre, -āvī, -ātus (動), 非難する, 責  
 める.  
 cultūra, -ae (女), 耕作, 世話.  
 cum (前、對格を支配する), 共に, 同時  
 に, 許に.  
 cum, (接), 時に, 故に, 間, 假令……に  
 もかかはらず.  
 cunctatiō, -ōnis (女), 遷延, 遲滞, 躊躇.  
 cunctor, -ārī, -ātus sum (所), 遷延する,  
 遷延する, ためらう.  
 cunctus (形), 全體の.  
 cupiditās, -ātis (女), 願望, 慾望.  
 cupidō, -inis (女), 慾望.  
 cupiō, -īre, -ivī, -itus (動), 望む, 欲する.  
 cūr (副), 何故に.  
 cūra, -ae (女), 心配, 世話, 勤勉, 注意.  
 Curius Dentātus (男), Rōma の有名な  
 將軍.  
 cūrō, -āre, -āvī, -ātus (動), 世話する, 心  
 配する, 注意する.  
 currō, -ere, cucurrī, cursus (動), 走る,  
 急ぐ.  
 currus, -ūs (男), 車, 戰車.  
 cursus, -ūs (男), 行程, 旅行.  
 cūstōdia, -ae (女), 守番.  
 cūstōdiō, -īre, -ivī, -itus (動), 番守する.  
 Cŷrus, -ī (男), (Κŷρος), 有名なペルシ  
 ア王國建設者; 其の後裔の勇敢な  
 王子.

## D.

daps, dapis (女), 饗宴, 食物, 馳走.  
 Dārēus (Dārius), -ī (男), ペンシア王.  
 dē (前、對格を支配する), より, から,  
 故に, 就て, 下りて.  
 dea, -ae (與格、對格、複 deabus), (女),  
 女神.  
 debēō, -ēre, -uī, -itus (動), 借る, 負ふ,  
 蒙る, ねばならぬ.  
 debilitō, -āre, -āvī, -ātus (動), 征服する.  
 decem (基), 十.  
 dē-cernō, -ere, -crēvī, -crētus (動), 定め  
 る. [ふ.  
 dē-certō, -āre, -āvī, -ātus (動), 戦ふ, 争  
 decet, -ēre, decuit (不、動), 適當である,  
 ふさはしい.  
 dē-cidō, -ere, -cidī [dē-cadō] (動), 倒れ  
 る, 死する.  
 deciēs (deciēs) (數、副), 十度, 十倍, 十  
 回.  
 decimus (順), 第十番の.  
 dē-cipiō, -ere, -cēpī, -ceptus [dē-capiō]  
 (動), 欺く.  
 dē-dō, -ere, -didī, -ditus (動), 譲る, 降  
 伏する.  
 dē-dūcō, -ere, -dūxī, -ductus (動), 導き  
 去る, 移す.  
 dē-fendō, -ere, -fendī, -fēnsus (動), 防  
 禦する.  
 defessus (defetiscor の過、分、形), 疲勞  
 した.  
 dē-figō, -ere, -fixī, -fixus (動), 結び付  
 ける, 垂れる.  
 dē-flectō, -ere, -flexī, -flexus (動), 轉す  
 る.

deinde (dein) (副), 次に, 其の後, 其れ  
 故.  
 dē-lectō, -āre, -āvī, -ātus [dē-laciō] (動),  
 誘ふ, 悦ばす.  
 dē-leō, -ēre, -ēvī, -ētus (動), 毀つ, 剿滅  
 する.  
 dē-ligō, -ere, -lēgī, -lēctus [dē-legō] (動),  
 撰擇す.  
 dē-linguō, -ere, -liquī, -lictus (動), 誤る,  
 罪を犯す.  
 delitēscō, -ere, -tuī [dē-latēscō] (動), 隠  
 れる.  
 Delphī, -ōrum (男), (Δελφοί), Apollō 神  
 の神殿の在る都邑で Graecia の Phō-  
 cis 國にある. [す.  
 dē-mergō, -ere, -mersī, -mersus (動), 浸  
 demissus (demittō の過、分、形), 下げ  
 られた, 低い.  
 dē-mittō, -ere, -mīsī, -missus (動), さげ  
 る, 垂れる.  
 dē-mōnstrō, -āre, -āvī, -ātus (動), 指示  
 する, 説明する.  
 Demosthenēs, -is (男), (Δημοσθένης),  
 Graecia の有名な雄辯家で愛國者.  
 dēnique (副), 其の後, 遂に, 最後に.  
 dēnsus (形), 茂つた.  
 dē-pellō, -ere, -pulī, -pulsus (動), 驅り  
 去る, 放逐する, 退ける.  
 dē-pōnō, -ere, -posuī, -positus (動), 置  
 く, 下げる.  
 dē-portō, -āre, -āvī, -ātus (動), 運び去  
 る, 取り去る, 得る, 持ち下る.  
 dē-scendō, -ere, -scendī, -scēnsus (動),  
 下る, 降る.  
 dēscriptiō, -ōnis (女), 記載.  
 dē-serō, -ere, -seruī, -sertus (動), 去る,  
 見棄てる.

dēsiderō, -āre, -āvī, -ātus (動), 望む, 慕ふ.  
 dē-stillō -āre, -āvī, -ātus (動), 滴下する.  
 dē-stituō, -ere, -uī, -ūtus [dē-statuō] (動), 見棄てる.  
 dē-sum, -esse, -fui [dēfutūrus] (動, 輿格を支配する), 居らぬ, 缺ける.  
 dē-tegō, -ere, -tēxī, -tēctus (動), 露はす.  
 dē-terreō, -ēre, -uī, -itus (動), 恐れらす.  
 dē-trahō, -ere, -trāxī, -tractus (動), 脱ぐ.  
 deus, -ī (男), 男神, (呼), deus.  
 dē-vincō, -ere, -vīcī, -vīctus (動), 全く征服する, 征服する, 打負かす.  
 dexter, -tera, -terum (又は -tra, -trum), (形), 右の, 右方の, 巧な, 吉兆の.  
 Diāna, -ae (女), 月の女神, 狩の女神.  
 dīcō, -ere, dīxī, dictus (動), 言ふ, 語る, 述べる, (命令法), dīc.  
 dictātor, -ōris (男), 統總.  
 diēs, diēī (男), 日, (単数では時として女性).  
 dif-ferō, -ferre, distulī, dilātus [dis-ferrō] (動), 遷延する.  
 difficilis, -e [dis-facilis] (形), 困難な, 煩はしい.  
 dif-fugiō, -ere, -fūgī [dis-fugiō] (動), 逃げる.  
 dīgnitās, -ātis (女), 價値, 威嚴, 名譽.  
 dīgnus (形, 奪格を支配する), 値ある, ふさはしい.  
 dīligēns, -entis (形), 勤勉な, 注意深い, 誠實な.  
 dīligenter (副), 勤勉に, 注意深く, 誠實に.  
 dīligentia, -ae (女), 勤勉, 注意, 誠實.  
 dī-ligō, -ere, -lēxī, -lēctus [dis-legō] (動), 重する, 愛する.

dī-micō, -āre, -āvī, -ātus (動), 戦ふ, 争ふ.  
 dī-mittō, -ere, -mīsī, -missus (動), 送り出す, 放免する.  
 Dionysius, -īī (男), (Διονύσιος), Syracūsae の専制主.  
 dir-imō, -ere, -ēmī, -ēemptus [dis-emō] (動), 分離する, 切り離す.  
 dis-cēdō, -ere, -cēssī, -cēssus (動), 去る.  
 discēssus, -ūs (男), 退去.  
 discidium, -ī (中), 分離, 不和.  
 dī-scindō, -ere, -scidī, -scissus (動), 引裂く, 分つ.  
 dīscō, -ere, didicī (動), 學ぶ.  
 dīs-jiciō, -ere, -jēcī, -jectus [dis-jaciō] (動), 投げ散す.  
 dis-pertiō, -ire, -pertivī, -pertitus [dis-partiō] (動), 配る, 分く.  
 dissēsiō, -ōnis (女), 不一致, 不和.  
 dis-sentiō, -ire, -sēnsī, -sēnsus (動), 意見を異にする, 争ふ. [する.  
 dis-serō, -ere, -seruī, -sertus (動), 演説  
 dis-similis, -e (形), 異なる.  
 diū (副), 一日中, 長き時日, diūtius (比), diūtissimē (優).  
 diūturnus (形), 長き時日の.  
 dīversus (divertō の過, 分, 形), 反對の, 別の, 轉じた.  
 dīves, -itis (形), 富んだ, 澤山の.  
 dī-vidō, -ere, -vīsī, -vīsus (動), 分割する.  
 dīvinus (形), 天よりの, 神に依つての, 神感した.  
 dīvitiae, -arum (女), 富.  
 dō, -are, dedī, datus (動), 與へる, 渡す.  
 doceō, -ēre, -uī, -tus (動), 教へる, 報知する, 證明する.  
 doctē (副), 博學に, 巧に.

doctus (形), 博學な, 巧な.  
 dolor, -ōris (男), 苦痛, 心配.  
 domina, -ae (女), 女主人, 婦女.  
 dominātiō, -ōnis (女), 支配, 主權. 「者.  
 dominus, -ī (男), 男主人, 支配者, 所有  
 domō, -āre, -uī, -itus (動), 馴らす, 征服する.  
 domus, -ūs (女), 家, 建物, (地), domī (家)内に, (奪), domō 家から, (對), domum 家へ.  
 dōnec (接), 間,迄.  
 dōnō, -āre, -āvī, -ātus (動), 贈與する.  
 dōnum, -ī (中), 贈物, 奉納物.  
 dormiō, -īre, -ivī, -itus (動), 眠る, 休む.  
 dracō, -ōnis (男), 蛇, 大蛇.  
 dubitō, -āre, -āvī, -ātus (動), 疑ふ, 狐疑する.  
 dubius (形), 疑はしい, 不定の.  
 ducentī (基), 二百.  
 dūcō, -ere, dūxī, ductus (動), 導く, (命令法), dūc.  
 dulcis, -e (形), 甘い.  
 dum (接), 間, 迄.  
 duo (基), 二.  
 duodecim (基), 十二.  
 duodēviginti (基), 十八.  
 dūrus (形), 固い, 困難な.  
 dux, -cis (男), 將軍.

## E.

ē (前), ex を見よ.  
 Eburōnēs, -um (男), Gallia Belgica に居つた一民族.  
 ē-discō, -ere, -didicī (動), よく學ぶ, 學ぶ, 記臆する.

edō, -ere (又は ēsse), ēdī, ēsus (動), 食ふ, 費す.  
 ē-dō, -ere, -didī, -ditus (動), 出す, 生ずる.  
 ē-dūcō, -ere, -dūxī, -ductus (動), 導き出る.  
 educō, -āre, -āvī, -ātus (動), 教育する.  
 ef-ferō, -āre, -āvī, -ātus (動), 猛くする.  
 ef-ficiō, -ere, -fēcī, -fectus [ex-faciō] (動), 生ずる.  
 ef-fugiō, -ere, -fūgī, (-fugitūrus) [ex + fugiō] (動), 逃れる.  
 ego (人, 代), 私, 我.  
 ē-gredior, -ī, -gressus sum [ex-gradior] (動), 出て行く.  
 ēgregius (形), 卓越した, 立派な.  
 elephās (elephāns), -antis, 及び elephantus, -ī (男), 象, (前者は主に只主格單数でばかり用ひられる, 他の形には後者から來た形を用ゐる).  
 ē-ligō, -ere, -lēgī, -lēctus [ex-legō] (動), 引き抜く, 選ぶ.  
 ē-mergō, -ere, -mersī, -mersus (動), 現れる, 出る.  
 emō, -ere, emī, emptus (動), 買ふ.  
 ēn (間), 見よ! 來れ! そら! (注意を引起し又は驚等を示すために用ひられる).  
 ē-narrō, -āre, -āvī, -ātus (動), 説述する, 説明する, 話す.  
 enim (接), 何とならば, (通例己が用ひられる句内の第二番目の位置をとる).  
 ēnnius, -īī (男), Rōma の有名な古い詩人.  
 eō, īre, ivī (又は ii) (itūrus) (動), 行く, 歩む, 帆走る, 進む, 動く.